

R180.3-067ㄅ



1200500766301

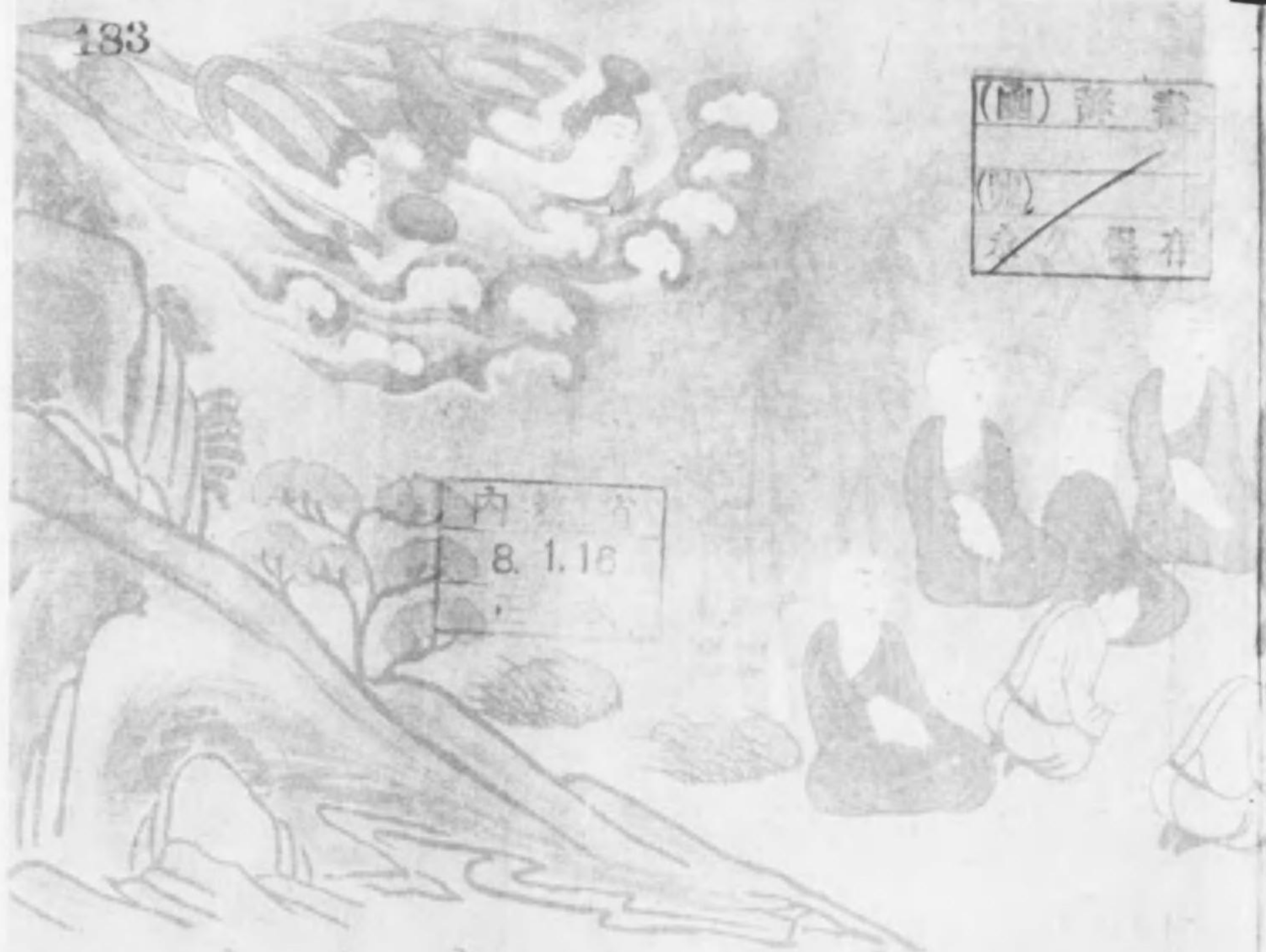


始



(圖) 經書  
(號) /  
卷八 經存

內  
8. 1. 16



威以香水於如來前  
 而作是言我今以此竹  
 園奉上如來及比丘  
 僧唯願哀愍為我納  
 受作此言已即便捨  
 水忝時世尊嘿然受  
 之說偈呪願  
 若人能布施 斷除於慳貪  
 若人能忍辱 永離於瞋恚  
 若人能造善 則速於慈惠  
 能身此三行 速至報恩  
 若有貧窮人 瓦財可布施  
 見他脩施時 而生隨喜心  
 隨喜之福報 與施等無異  
 爾時婆羅門大臣及  
 餘人民見王奉施如  
 來僧伽藍皆悉踊躍  
 生隨喜心爾時頗比  
 婆羅王施僧伽藍已  
 心大歡喜頭面禮足

5-4

R  
180.3  
0.67



佛書解說大辭典



大東出版社藏版

凡 例

一、本書は佛教に關する刊行物を東西兩洋に亘り、その大は一切經に收むる數千の經論より、その小は市井に埋もるゝ一論一文の小冊子に至るまで、これを擧ぐるは勿論、遠く散逸してその影を止めざるもの、或は貴重なる寫本の類に至るまで一切の典籍を收め盡し、これに現代最新の配列法（書名の首字を所謂五十音順音引假名遣に配列）により一々に内容解説を施し、且つその所在を明示したものである。

一、本書は邦語漢語佛教典籍（昭和七年十月卅一日刊行の分迄）の全部六萬五千五百餘を收む。即ち各種藏經より約八千、佛教全書、佛教大系等一般佛教叢書並に各宗關係の全書全集類約七千、各大學圖書館（京大、龍大、谷大、京專、高野山、正大、駒大、立正、東洋等）並に宮内省圖書寮、内閣文庫、帝國圖書館其他一般圖書館所藏のもの約十萬、東域傳燈目錄、諸宗章疏錄、八家請來目錄、眞宗教典志、扶桑禪林書目、其他諸目錄より約二萬の古逸註疏書目、出三藏記、歷代三寶紀等より偽經、抄經、關本、失譯經の書目約一萬五千を涉獵し、以上全部の書目カード中の同一書を整理して六萬五千五百餘部の佛教典籍を採録した。

一、本書は以上六萬五千五百餘部の典籍を便宜上五類に分類した。即ち「第一類、藏經」「第二類、全書」「第三類、單行本の古寫本、古刊本」「第四類、現在の單行本」「第五類、古逸書類」の五類であつて、其内容解説にあつては、六萬有餘全部に亘り詳細なる解説をなすことは到底紙數上よりも許されぬ事であり、且つ其の必要を認めぬ點もあるので、大體詳細解説するものとせざるものとに分ち、前記五類中の第一、二類即ち藏經、全書類を主とし、これに他の類本にして重要と認むるもの限り出来る丈内容そのものについて詳細な

る解説を施した。

一、本書の内容解説の形態はその要點を次の十項目とした。即ち、①題名、書名、具名略名異名併記。②卷數。③存、缺。④著者又は譯者、生存年代を併記。⑤著作年代又は譯出年代。⑥内容解説。⑦末書（注釋書參考書）。⑧寫刊の年月。⑨現所藏者、圖書館書庫名。⑩發行所名。この十項中前記第一、二類は⑧⑩を省略し、第三類は特に⑨の圖書館の函號を詳記し、披覽者に備へ、第四類は⑩の發行所名を記して入手に便益あらしめ、第五類は⑦の注釋參考書に力を入れて研究に有利ならしめた。この方針に依れるを以て藏經の經律論、各宗の宗典類は悉く詳細なる解説が③に於いて執筆され、且つその解説に責任をもつべく夫々執筆者の署名を附記した。

一、本書の解説に於ける十項目の内容について一定の方針を示せば左の通りである。

- ①、題名にはすべて具名、略名、異名をつけた。且つ日本語、支那音の讀方、梵語名、西藏語名、巴利語名を附記した。日・支・梵・藏・巴とあるがそれである。而して日本語の讀方はすべて羅馬字法を採用し、一字一字の間に接尾符(一)を附し、全體としては音便讀法を用ひ、促音其他の用法は便宜上大藏經南條目錄補正索引(昭和五年刊)に従つた。支那音はすべて現在の北京官話の正しい發音に依り、支那音を羅馬字に移す場合學者によつて相異なる點ありと雖も、本書は最も普通に廣く行はれてゐるトーマス・ウキード氏の式に従つた。大正一切經刊行會版の昭和法寶總目錄では佛蘭西語法を用ひたが、本書は右により英語法に依つて羅馬字化した。梵藏兩語名の記入は主として西藏甘肅爾勘同目錄(大谷大學圖書館昭和六年刊)により、巴利語名の記入は漢巴四部四阿含互照錄(赤沼目錄(昭和四年刊)に従ふことにした。
- ②、卷數は其典籍の卷數を記したが、丁卷の異なる場合あるものは一々これを附記した。
- ③、存、缺に就ては、存は現在行はれてゐる藏經の種類別所收卷數、全書類は其所載卷數を記した。而して各種藏經及び目錄

には左の如く略符號を使用した。茲に出てくる數字番號は本書の「佛教典籍總論」並に「昭和法寶總目錄」と連絡をとり研究に資することにした。

大正——大正新修大藏經。縮——縮刷大藏經。卍——卍字藏經。卍續——續藏經。北——北宋版。南——南宋版。元——元版。明北——明北藏。清——清藏。麗——高麗版。天——天海版。指——指要錄。法——法寶標目。至——至元法寶勸同總錄。明南——明南藏。Z——南條目錄。出三藏記——出三藏記集。三寶紀——歷代三寶紀。法經錄——衆經目錄(法經等撰)。仁壽錄——衆經目錄(彦深撰)。靜泰錄——衆經目錄(靜泰撰)。內典錄——大唐內典錄。譯經圖紀——古今譯經圖紀。武周錄——大周刊定衆經目錄。開元錄——開元釋教錄。貞元錄——貞元新定釋教目錄。佛全——大日本佛教全書。真全——真宗全書。真大——真宗大系。日藏——日本大藏經。

①、著者又は譯者は其人の生存年代を出来る丈精査して各種の史傳、目錄、年鑑、年表、系譜等により現存せるあらゆる參考資料を涉獵して正確を期した。但し傳記は人名辭書に讓るべき性質のものであるから特にこれを省略した。年代はすべて西曆を用ひ、年號は其の人物の生死國により、其國の年號をとり、一國に生れ他國に死したものは何れかの一國の年號を用ひた。年代中——線を用ひ、「年代——年代」なるは生死年を、「年代——」は生年、「——年代」は寂年のみ明らかなるもの、又兩者不明にて生存中の或る時期明白なるものは「——年代——」として記入した。年時帝世等すべて明らかならざるも、略々其時代を推定し得らるゝものは其推定年代に「？」の符號を用ひた。僧傳並に資料中生年を明記せざるも寂年享壽の判明してゐるものはその逆算により概ねこれを記入した。生死年代に諸説あるものは其中の一を採用若しくは一説として別出したものがある。

②、著作年代は著作若しくは譯出の年號を記入した。

③、内容解説は前述の如く主として第一・二類につき冗長繁文を避けて、名義・大綱・分科・判釋・傳通の範圍に於て詳記した。原典翻譯に關する歴史的説明譯出者の傳記等はこれを省略した。略名、異名を有するものは大藏經、全書類に標題とされ



の教法論文及び銘文等の記事基礎とし、南北兩傳の記事を参照して、王の事蹟を究明したもので、年表、論文の原文を附録してある。

阿育王舍利塔圖

明治四二刊 東京春陽堂 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

阿育王舍利塔圖

阿育王舍利塔圖 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

阿育王舍利塔圖

阿育王舍利塔圖 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

阿育王舍利塔圖

阿育王舍利塔圖 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

阿育王舍利塔圖

阿育王舍利塔圖 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

八萬四千の寶塔を建立せんとするの志願を起して、正法阿彌陀の名を得たるを説いたものであり、阿育王本傳傳は優波伽多の化導によつて、佛蹟を巡遊して到る所に塔を立てたるを述べ、阿彌陀王因縁は、王は弟宿大勝の不信なるを化せんとて、巧妙なる方便によつて、之を改心せしめたるを述べ、駒那羅本傳は、王子法智が内眼を捨てて法眼を得たるを述べ、中聖羅果因縁は、八萬四千の寶塔を建立せる大阿彌陀王も、最後は唯中聖羅果の自由あるのみなる悲愍の最後たりし事と、王統の最後の身舎寶塔王は、大王の施設に反して、佛法を破壊する事によつて、その名を後世に留めんとし、爲に王統の斷絶せる事を述べ、優波伽多因縁は、佛滅百年に摩突羅國に出世せる佛多に華を起して、而して、佛滅後に摩河迦葉が法眼を結集せる事に説き及び、摩河迦葉涅槃因縁は、迦葉が法を阿難に付嘱して後、難陀山中に入定して、彌勒の出世時代を持つに至つた事と、阿難が法を商那和修に付して恒河に入滅せる事を説き、摩提因縁は阿難の付法を得た摩提が、摩提國に傳道せる事を説き、商那和修因縁は摩突羅國を化導して、優波伽多を度して、入滅せる事を説き、優波伽多因縁は、その化益の實に大なりし事と、提多迦を得て之に付法して入滅せる事を説く外に、阿育王に無き佛法破壞の三惡王の出現と、佛母摩訶摩耶が天より來下して悲哀せる事を説き、阿育王現報因縁に於て、王が佛福する事によつて、龍王を降伏せる事を説いてある。

阿

三

本經は、その名稱は阿育王傳なれども、その内容は佛滅後の異世の五佛たる摩訶迦葉・阿難・商那和修・摩田地・優波伽多の付法相傳と、阿育王の一生とを説いたもので、佛滅一十年の佛敎史を包含するものである。中には、舍利八分もあり、第一結集もあり、阿育王の佛蹟巡禮もあり、三惡王もあり、幾多の史實を有する事は疑ない。付法藏因縁傳の如きは、斯る資料を基本として成せるものである。これと阿育王經との關係は、更に同經の下に於て略述する。

阿育王傳序 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

一行も亦、同様に飲食を得たのみならず、かの樹下の人から、無数の金銀珠寶を得て歸り、前には後世の生あることを信じなかつた阿鳩留も、この人の物語を聞いて後世あるべきを思ひ、大に財を施して貧窮を脱はし、死後初利天の一隅に生れたが、その果報は、遠く一乞女の女人(米粥を迦葉に上つて、初利天に生れ、帝釋の近くに座を得た)に及ばざる所以を示さんとしたものと考へられるが、現存の經では、この兩者の福を、僅かに比較する所に終つて、その所以を示すと思はるる部分が無い。即ち後佛が母の爲に初利天に昇つて説法せられた時、阿鳩留が、佛に我れ大典に布施して凡人を得たり、かの乞女の人、僅かに施して此の福有り、と述べる所で終つてゐるので、説話が完成してゐないのを知ることが出来る。

阿鳩留經 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

この經を譯して漢文一萬八千言と爲したもので、譯者竺佛念は、晋晉に譯するに、情義實に難いので、或は文を離して義に就き或は正辭して佛通し、或は辭を誦人に取し、或は事略して佛通しといつて、體文の形に譯した苦心を表白して居る。之を數ふるに二千七百四十八句の四句より成るから、正に一萬九千九百九十六言となるのである。歴代三寶記には、建初二年の譯として居るけれど、經序に従つて六年とすべきであり、經には符秦時代としてあるが、建初は後秦の年號である。

内容は、聖王阿育の太子法益は、その日蓮花の如くにて見るもの皆喜悅したので、天眼の波があつた。王の大夫浮容、之に懇して、その意を遂げざるに懇恨を懷きつゝあつたが、偶々玉區の耶舍なるもの、また太子にふくむ所あり、その雙目を挑げんを深く心に期した。太子の師善念羅漢は、報復の事あらんを洞見し、太子に對して無常の内眼を恃まず、不壞の天眼を求むべきを導した。時に西北印度乾陀國石室城が亂れたので、此機に乗じて、淨學夫人と耶舍とは、相計りて阿育王を説得し、太子を出して彼國を治せしめ、因つて太子に失らしめるの國を信服せしめたので、夫人と耶舍とは遂に王の金印を盗みて王命を矯めた秘密を露し、遂に法益の雙眼を挑出せしめた。法益は、之が爲に自ら退きて國界を出で善と善くした彈琴によつて家家に食を乞ひ、國より國に遷り、父王の治處に來り住した。一夜、阿育王は高樓にあつて、この聖經を聽き、その法益なるを知り、諸臣を詢問する事によつて、淨容と耶舍との奸計を知り、遂に二人を獄所に送つて燒き殺さしめた。經は、最後に、法益がこの厄に遇へる過去の因縁を説き、以て善惡報の誤らざるを教へて居る。

阿育王太子墳目因縁經 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

阿育王傳 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

阿古樓御得度之記 ①(B) A-ku-sha-ri-to-shu ①一巻 ②(龍大) ③(龍大) ④(龍大) ⑤(龍大) ⑥(龍大) ⑦(龍大) ⑧(龍大) ⑨(龍大) ⑩(龍大) ⑪(龍大) ⑫(龍大) ⑬(龍大) ⑭(龍大) ⑮(龍大) ⑯(龍大) ⑰(龍大) ⑱(龍大) ⑲(龍大) ⑳(龍大) ㉑(龍大) ㉒(龍大) ㉓(龍大) ㉔(龍大) ㉕(龍大) ㉖(龍大) ㉗(龍大) ㉘(龍大) ㉙(龍大) ㉚(龍大) ㉛(龍大) ㉜(龍大) ㉝(龍大) ㉞(龍大) ㉟(龍大) ㊱(龍大) ㊲(龍大) ㊳(龍大) ㊴(龍大) ㊵(龍大) ㊶(龍大) ㊷(龍大) ㊸(龍大) ㊹(龍大) ㊺(龍大) ㊻(龍大) ㊼(龍大) ㊽(龍大) ㊾(龍大) ㊿(龍大)

ama-tan-jō-gō-ni-ki ① 一巻 ② 存 ③ 富本(龐大、別號)  
**阿含經** ①(日) A-gon-kyō 現代意譯阿含經 ②一巻 ③存、現代意譯佛敎經典叢書第二 ④友松園譯  
**阿含經講義** ①(日) A-gon-kyō-ko ②一巻 ③存 ④安井廣度著 ⑤昭和七年 ⑥東京東方書院  
**阿含口解十二因緣經** ①(日) A-gon-ko-ge-jū-ni-in-en-kyō (文) O-han-Kō-chih-shih-erh-yin-yuan-ching-阿含口解、第十二因緣經 ②一巻 ③存、大正二五・五三、1938、館藏四、中二六、六、北1033號、南1049號、元1045號、明北1333號、清1323號、叢1029號、摺99號、法10156號、至1478號、明南1127號、N-1339 ④安支共贊佛譯 ⑤後漢光初四(A. D. 181)

第十二因緣經とも云ふ。十二因緣を簡單に解釋して、十二因緣の本を斷ずることに依つて、生死を離れるものであることを説くを主眼としてゐる。頗る異色ある經典であつて、普通云ふ所の十二因緣を内の十二因緣とし、これに地・水・火・風・空・識・根・塵・業・節・華・實を外の十二因緣とし、萬物の生死も亦この外の十二因緣に依るとしてゐる。又後半は全く十二因緣に關係なき人所談三事、四事不可説一切味八種の如き法數様のものを出してゐる。案ずると、西域地方にて編められた短經の一つであつて、中に般若經の影響の明かに顯はれてゐるものがあり、般若經が西域地方に流來流行し

て以後の作であらう。阿含口解とはあるが諸部派の傳持した阿含經及びその系統に屬するものではなく、西域地方の特殊の傳敎を理解する一資料となるものである。  
 ⑥(參考) 三寶紀第四、內典錄第一、譯經圖記第一、開元錄第一、貞元錄第二 (赤沼智善)

**阿含正行經** ①(日) A-gon-shō-kyō (支) O-han-cheng-hsing-ching-kyō ②一巻 ③存、大正二・八八三正意經 ④一巻 ⑤存、大正一四・一〇、北815號、南829號、元823號、明北858號、清663號、叢819號、天824號、摺865號、法844號、至1501年、明南699號、N-687 ⑥安世高譯 ⑦後漢建和二年(建寧三)(A. D. 148-170) ⑧本經は一切は心を基本とすること、生死の迷ひは無明を根源とするものなれば、十二緣起の理を明に解すべきこと、心端正ならざるものは五道に墮するが故によつて五根を制御すべきこと、更に佛陀自らの捨家業の精進の相を説き五戒を持ち四念處を修すべきこと、その心をよく攝すべきことを説かれたもので、又正意經の名が存する。  
 ⑥(參考) 三寶紀第四、內典錄第一、譯經圖記第一、開元錄第一、貞元錄第一、第二 (林五郎)

**阿含に於ける二體關係の資料** ①(日) A-gon-ko-eru-ni-tai-kan-kei-no-shiryō 法經卷第三  
**阿含正行經** ①(日) A-gon-shō-kyō (支) O-han-cheng-hsing-ching-kyō ②一巻 ③存 ④(參考) 出三藏記第四  
**阿含に於ける二體關係の資料** ①(日) A-gon-ko-eru-ni-tai-kan-kei-no-shiryō 法經卷第三

Kei-to-shi-kyō ①一巻 ②存 ③依藤行英著 ④昭和七年 ⑤京都佛敎書院  
**阿含の佛敎** ①(日) A-gon-no-bukkyō ②一巻 ③存 ④赤沼智善著 ⑤大正一〇刊 ⑥京都丁字屋書店  
**阿含部の大觀** ①(日) A-gon-bū-no-tai-kan ②一巻 ③存、大藏經要義第五 ④本多日生編

けた所以は密敎は佛部・蓮華部・金剛部の三部を以つて概括すれば餘す所がないから、密敎に關する總てを列記する意によつて本書に名けたものである。本書製作の事由は序によれば「甚深無相の法は密しく上機に傳り、修有相の法は淺かに劣慧に應ずるなり。故によつて諸法は垂範の文を抄し、明匠は次第の記を述し、就中、近古の諸法は或は廣文を拾つて淺智を迷し、或は簡略を好んで三闕の用意を闕く。今は中間を補つて廣略を兼ねんと欲し、竊に佛説の大經に就いて、具さに現行の一途を述ぶ。佛に十篇を列ねて二十要を綜括す。委しく次第を記して七分に編別し、斯れを阿含抄と名く。蓋し三部の通號、入修證の門を廣ふすと雖も、佛說三部を出でざるが故なり。抑も淺略も之れを捨てざるは、淺近より深奥に至らんがためなり。總括も之れを遺さざるは、總括を閉して未來に繼がしめんとするなり。十篇とは行法の歴史及び修行法實修に關する順序等を十段に分類したる事。第一、この法を修すべき事。第二、支度。第三、形像の事。第四、道場莊嚴の事。第五、行法の事。第六、護摩の事。第七、行法用意の事。第八、經軌の事。第九、私記の事。第十、卷數の事。次に廿要とはこの十篇の内に於て最も主要なるもの廿條を擧げたもの。然しながらその條目が明かに記されてゐない。篇目によつて記せば(一)種子(二)三形(三)□□□(四)發願(五)請願(六)□□□(七)根本印明(八)護摩(九)香僧呪(十)後加持呪(十一)□□□(十二)相承(十三)

行法(十四)五種隨(十五)阿含不同(十六)行法出處(十七)私記(十八)口傳(十九)支度(二十)卷數である。次に現在目錄によつて次第を記せば  
 (第一)諸私記。この下に胎灌記(本末)、金灌記(本末)、合灌記(本末)、離作業(本末)、延壽寺灌頂、兩寺灌頂(上下)、三戒(本末)、水取作法、灌要、曼荼羅供(本末)、胎灌灌兼用意、金灌灌兼用意、三戒灌兼用意、灌頂日記(上下)、許可(上下)、許可日記、修法(本末)、雜事、胎記(本末)、胎諸(本末)胎要、隨行(本末)、金記(本末)、金諸(本末)、金要、三摩地(本末)、合行(本末)、合行別、悉記(本末)、悉記(別)、十八道(本末)、十八道(別)、護摩(本末)、護摩(別)、護摩(要)、(第二)諸佛。この下に、一切佛、藥師(本末)、七佛藥師(本末)、阿閼、釋迦、無量壽命決定如來、阿彌陀(本末)、五佛頂、大佛頂、金輪、時處、熾盛光(本末)、慈勝(本末)、白傘蓋、佛眼、佛眼(初度、二度、三度)、孔雀、准胝、舍利、光明眞言、(第三)諸經。この下に、瓔珞經、法華(本末)、華嚴、灌頂經、文殊師利、八變、茶麗、一切經、普賢延命(本末)、仁王、請雨、造塔、無垢淨光、寶篋印、寶樓閣、持世、香提場、(第四)諸觀音。この下に、聖觀音、請觀音、六字(本末)、同阿彌(本末)、六字(別)、千手、十一面、馬頭、如意輪、不空羅索、華衣觀、大白衣(經)、多羅、尼俱低、青頸、白衣、大白衣、水月、六觀音合行、(第五)諸菩薩。この下に、普賢、五秘密、文殊五字、一印、文殊六字、一字一髻、滅經狀、文殊八字、合法久住、虛空藏、求聞

持、明星、五大虛空藏、隨求(本末)、彌勒、地藏、藥王、勢至、龍樹、周那、延命、轉法輪、放光、馬鳴、(第六)諸忿怒。この下に、愛染、不動(本末)、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉、五壇法(本末)、五大尊合行、安樂(本末)、正觀作法、支物加持、輪藏供養、受地、安樂日記(甲乙丙丁)、金剛童子、烏瑟沙摩、大輪、步迦、無能勝、(第七)諸天。この下に、毗沙門、雙身、四天王合行、最勝太子、阿利帝、吉祥天、北斗、星、妙見、摩利支、冰迦羅、常有利、童子經、歡喜天、水散喜天、施羅鬼、帝釋、火天、炎摩、神才、羅刹、水天、風天、伊舍那、梵天、地天、月天、迦樓羅、深沙、大黑天神、冥道供(本末)、冥道(別)、七十天、十二天、十羅刹、大佛供、山王、玉女、(第八)諸作法。この下に、四種念誦、五色絲、五色絲(左系)、護身符、胎者、佛法、三部、授戒、八齋戒、衣鉢、佛經供養、開眼、印佛、食法、誦經、上圖、洗符、御衣、木、佛前、鑪香、帶、易摩、湯、衣、食、念誦、鈴符、受地、(第九)諸雜抄。この下に、通法抄、請法要略、大日經等要文、義釋要文(上下)、兩經疏要文、菩提心論勘文(上下)、別、教相雜抄(上下)、一三三名目(上下)、胎灌諸尊釋(上下)、香慶(上下)、歡時義勘文(上下)、正普義、字記正決(上下)、九弄圖問答、次第記釋文料簡、字母表、頌一行、明匠抄(上下)、三國名所、請寺略記(上下)、山上請安、請社事、書翰事、已上であるが、治定目錄には、卷法百五十、式作法等七十八、都合二百二十八卷、文水

十二年二月日、僧正承澄とある。享保十四年に叡山顯願院天忠の編した私目錄は壹百卷とし、他に七佛藥師法、熾盛光(本末)は今宗の總録であるのと、胎灌記の首は面授口決の録であるから此等を別行することにし、たといひ、百卷以外に七佛藥師法と熾盛光法とを置き、次に阿含抄抄序目、三國明匠略記(白毫院顯光上人の撰業なり)、阿含抄抄事書、阿含抄私目錄以上各一巻を添へてある。又日本佛敎全集は第三五一四一に至る七冊に本書を収め、最後に總目并諸本存録一覽を掲げてあるが、閱覽に便である。佛敎全集によれば掲載項目は序以外二三三項に分れてゐる。本書は承澄が京都の三小川禪房で殆んど大部分を編したが、往々關東鎌倉大藏で集記してゐる。又前後約四十年間の探録であるが、録した年は二十ヶ年だけ時々中絶がある。又承澄以外に承澄なる者が「書」としてゐる。承澄は思ふに承澄常侍の弟子か。本書は合卷十三巻の中では大太液の傳書。然し乍ら諸流皆本書を寫傳して所依の書としてゐる。故に合卷の行法を研究する場合には主要なる參考書の一である。  
 ⑥(參考) 本朝古撰撰述書目 ①貞和三宮(百三卷) ②龐大(三六五・八) ③谷大、餘大・八六九(京大、二六・八) (田島德香) 阿含抄總目錄 ①(日) A-sa-ha-shō-kyō-kyōmoku ②一巻 ③存 ④梅時與興(一明治四四 A. D. 1911) ⑤明治四四 ⑥正太、一四〇(三) ⑦阿含抄抄 ①(日) A-sa-ha-shō

①一巻 ②圓參(弘仁五)寛平三 A. D. 814-133) 撰 ③(參考) 山家祖德撰述書目集卷上  
**阿護兩國殿免許記** ①(日) A-go-kōri-kuni-no-kenji ②一巻 ③存 ④寛政四寫 ⑤谷大、宗大(二七八六)  
**阿字義** ①(日) A-ji-gi ②一巻 ③存、弘法大師全集第一 ④空海(實龜五)承和二 A. D. 774-835) 撰  
 ⑥この書は阿字の無相不可得の義を述べたものである。この無相不可得の理は、淨菩提心の對境であり、行者の觀心が淨菩提心と相應一致する時に、行者は我即大日の悟りを得る。行者の觀心が淨菩提心と一致する爲めに、三密の妙行が必要となる。本書は無相亦不可得義と云ふ句で初て居るが、大師の文として、斯の如き書き方は極めて稀である。恐らく前文の分が脱落したものであるまいかと思はれる。且つ文章も大師の文としては、遺憾の點が少くはない。  
**阿字義** ①(日) A-ji-gi ②三巻 ③存、大正七七・五二 N. 269 ④實範(一)天養元 A. D. 1144) 述  
 ⑥梵語の阿(ā)字の義を説明せる書である。阿摩字實相名體事等十四項を分ちて、主として大日經、守護經、善長の大日經疏、弘法大師の摩字實相義、即身成佛義及び昨字義、十住心論、安樂の悉曇義等を引用し、問答を設けて詳細に阿字の義を解説してゐる。阿字は大日經一部の註要で





とを説き、菩提心の種子たる阿字とその三昧形たる蓮華と月輪とを觀じて、自心の佛性を開顯することを示してゐる。阿字に關する著書は東密台密を通じて數百種の多き上るが、本書はその最も主要なるもので、後世東密の僧徒が編める阿字觀次第は多く本書を所依としてゐるのである。

①(注釋) 惠照、阿字繪尾記授要抄二卷(延寶元年作、同二年刊)、同阿字繪尾編第一卷(延寶五年作、同年刊) (小田藤舟)

**阿字觀用心秘密阿字觀作法**

①(日) A. J. Kwan-yō-jū-hi-mitsu-ō-jū-kan-an-shū. ②三帖 ③存 ④足利時代寫 (實錄院、本)

**阿字觀要訣**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字觀略作法**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 (實錄院、本)

**阿字觀略作法依指尾口訣**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④寛順(一元祿四 A. D. 1691) 述 ⑤文政五寫 (實錄院、本)

**阿字觀略述**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④月海(一寛元 A. D. 1753) 述

**阿字觀略註**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④英録(寛永一六一正徳) A. D. 1639-1715 述 ⑤寫

地である。この妙法は佛が自ら説くに非ざれば人の知るものがない。故に妙法は佛自説の法である。分別功德品以下の諸品は流通分であつて、各品皆阿字の四義を明し、今世に五智を圓證し父母所生の肉身にして頓に成佛し、法流長く傳へて末法の修道の成じ易きことを勸勵するのである。されば善王妙善觀音の諸大士は東西各方より集つて供養守護し、陀羅尼を以つて持者の諸難を除き普賢菩薩は四法を世尊に請ひ、阿字不生の妙法即ち之の自心なりと覺らしめて、阿字妙法の流通せむ時がない。ここに知る法華一經は悉くこれ阿字不生の妙法體、阿字の妙法は即ち衆生内心の法である。もし我が心を覺ればそのまゝ普賢であり、大日一切處である。この故に大日如來は妙法蓮華經の題目である。願くは諸の行者幸に察思せよ。信も毀も究竟して蓮華臺に坐せよ。八葉は正圓にして増減がない。自受法樂であるから無所得である。南無妙法蓮華經と。これが本文の綱領である。これに依つて知る如く、本書は蓮門の正宗を以て阿字を別釋し、本門の久遠本地の關聯を大日如來の本地身であるとし、本途の流通分を以て第三の結合とし、阿字即妙法なる義を末法の劣機に勤めて蓮華臺の修道を成就せしめる究竟の法門であるといひ、法華大日一體義を述べ、更に唱題成佛義にまで論歩を進めんとしてゐる。これ明かに日蓮宗義が發生する萌芽であつて、同時に又本書製作の年代を推定すべき暗示をなすものといへる。この説が圓城寺學僧の間から發

**阿字觀略述**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④月海(一寛元 A. D. 1753) 述

**阿字觀略註**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④英録(寛永一六一正徳) A. D. 1639-1715 述 ⑤寫

**阿字觀略述**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字觀要訣**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②三帖 ③存 ④足利時代寫 (實錄院、本)

**阿字觀用心秘密阿字觀作法**

①(注釋) 惠照、阿字繪尾記授要抄二卷(延寶元年作、同二年刊)、同阿字繪尾編第一卷(延寶五年作、同年刊) (小田藤舟)

**阿字觀略作法**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 (實錄院、本)

**阿字觀略作法依指尾口訣**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④寛順(一元祿四 A. D. 1691) 述 ⑤文政五寫 (實錄院、本)

永七刊 ①(龍大、二六六七・六) 正大、一四八・五六

**阿字觀略法**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・六九)

**阿字偈**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④寫本(高大、寄・一・六九)

**阿字決**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字玄々觀**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④山縣支那(慶應治三六刊) ⑤(高大、寄・一・六九) (龍大、二六六七・七) ⑥高野山光明院

**阿字今無禪師語錄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④清代今無述 (參考) 釋日録

**阿字根本増加事**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④文正二寫 (實錄院、相)

**阿字贊語**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④傳教大師全集第四、天台觀經六之一(大日本傳教全集第一二六)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字心續生直指**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字頓覺章**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

に關する章疏から取意採擷したもの。但し偽撰とすべき點が認められないから傳教大師最澄の親撰として置くべきか。

**阿字釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字心續生直指**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字頓覺章**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字秘釋**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

と菩提、若しくは生死と涅槃との隔執を除き、斯くして速に成佛することを得るに至る。次に阿字觀を成就した機縁は、阿字を構見するが常見するかに依つて興る。構見を地前位と爲し、常見を地上位と稱する。行住坐臥四威儀の間に常に阿字を觀するに至れば、阿字に即して萬有を見、又萬有に即して阿字を觀するに至るから、心境互融し、覺行自在を得るに至る。此の境致に到達して始て阿字觀を成就したと稱するのであるとの旨が本書に示されてゐる。

**阿字秘密數息觀**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九 A. D. 1665-1734 述 ⑤寫本(正大、一四八・六三)(高大、寄・一・六九)

**阿字繪尾記授要抄**

①(日) A. J. Kwan-yō-kan-an-shū. ②一帖 ③存 ④豐光(寛文六一享保)九







須達多)に依つたものである。

本經は增一阿含第五一品第九經(大正二・八二〇)の別譯であつて、失譯玉耶女經(大正二・八六三)東晉竺佛蘭譯の玉耶經(大正二・八六五)またこれに該當するものであるが、増一阿含にあつては、本經の初めを缺き、その主人公を善生とし四種の妻の型をあげ、玉耶經及び玉耶女經は更にこれを詳述して婦人の道を明にしている。(別項を見よ)。然して増一阿含のそれに該當する巴利文にあつては(A.VII.50)七種の妻の型をあげてゐる。

【参考】三寶記第一〇、内典錄第四、撰經圖記第三、開元錄第五、貞元錄第七、(林五塔)

阿激連經

○(日) A-eko-ai-tan-kyō (支) O-son-ta-ching. ①一卷 ②失譯 ③求那跋陀羅譯阿激連經と同本

阿訶舍論法觀心釋

○(日) A-ko-sha-ron-hō-kan-shin-shaku. ①一卷 ②存 ③寫本(金剛三昧院、二五)

阿訶那智經

○(日) A-ko-na-ji-kyō (支) O-to-na-ching. ①一卷 ②十卷 ③唐龍興年中(A. D. 661-668) ④開元錄第一四、貞元錄第二四

阿訶婆拘鬼神大將上佛陀羅尼神呪經

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō (支) O-ta-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-ching. 阿

百千天龍與雲散雨龍王の印言、(10)日天子軍衆の印言、(11)月天子眷屬の印言、(12)一切火天兵令伏の印言、(13)阿闍維(A-ma-ri-ka)五道大將軍・牛頭兵衆の印言、(14)阿修羅(A-sura)王國軍衆の印言、(15)羅刹婆(Rakshasa)王軍兵開戰者衆衆の印言、(16)五方大力藥叉(Yaksha)王軍衆の印言、(17)阿利陀(Aridha?)諸文書(Camupa)の印言、(18)毘那夜迦(Viayaka)鬼神王の印言、(19)摩羅首羅(Mahesvara)天王二十八部の印言、(20)阿訶薄俱大將大悅會・天龍鬼神自護身の印、(21)小心呪、(22)阿訶婆俱降伏大度鬼神の印、(23)轉一切鬼神の印、(24)鬼神に動する印、(25)火輪の印(26)鬼神を投する印、(27)四天結界呪、(28)八部都呪、(29)般若(Fajna)不度羅婆使者神鬼の印、(30)般若降伏天鬼神印、(31)大將使神散禁法。

阿訶薄俱大元帥法

○(日) A-ko-po-ko-ku-dai-gen-hō-hō (支) O-to-po-ko-ku-dai-gen-hō. ①一卷 ②存 ③寫本(高天、寄一・七二)

阿訶薄俱大元帥法要私記

○(日) A-ko-po-ko-ku-dai-gen-hō-hō-shi-ki. ①一卷 ②存 ③安祥院流の阿訶薄俱大元帥法要私記 ④寫本(高天、寄一・七二)

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

阿訶薄俱付屬呪

○(日) A-ko-po-ko-ku-fu-ryoku-ji (支) O-to-po-ko-ku-fu-ryoku-ji. ①一卷 ②存 ③大正二・二〇二No. 129 ④除三・止論一・三・一一

い陀羅尼である。第二首は同心呪、第三首は同心中心呪、第四首は同結界呪とある。此等の呪文の中には漢字の入句があるが、この入句がある理由で、この呪文を支那で作つたものであると推測す可きではない。眞言陀羅尼には入句するものが、寧ろ常則と成つて居るのであるからである。本經の譯者は未詳ではあるが、その原本は確に印度のものである。

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌 ○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

【大綱】この法は世間法にして、殊に王者若しくは將軍の修す可きもので、出家の作法には無い。佛陀が俱那竭羅(Kanina-gra)城・婆羅伽(Varanasi)の間に於いて、將に涅槃に入り給はんとした時に、摩車(Archana)長者が諸の魔鬼の爲めに、惡魔せられた時に、高聲を發して佛陀に救を求めた。この時に佛陀は大日乾連(Mandala-gatya)に命じて、大放光佛頂呪を誦して長者の家から鬼神を去らしめられた。然るにその鬼神は森林に入つて尊者阿難を惱す事になつた。時に阿訶薄俱(Ajāvaku)

元帥が、佛陀の許を得て、獨り阿難の念を救ふだけでなく、末世の衆生を救ふ爲に、種々の魔神惡鬼を驅除する大威力のある甘露無邊陀羅尼を説かれたのである。本儀軌には甘露陀羅尼と阿訶薄俱心呪と阿訶薄俱中心呪と結界呪と八部都呪と教誨呪とが明されてゐる。普通眞言藏卷中の阿訶薄俱甘露呪と同心呪と同心中心呪とは、この儀軌から引用したものである。

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)

阿訶薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌

○(日) A-ko-po-ko-ku-on-shin-dai-jō-ten-ra-ni-shin-kyō-shū-i-ching-shang-tai-to-do-ai-ching. ①三卷 ②大正二・一八七No. 129 ③續前一四、止論一・三・五 ④善無畏貞觀一一一開元二二二 A. D. 657-735 ⑤唐開元五二二(A. D. 717-735)



者子日英は、即ち提想攝(Trankaragāra)佛であり、王陀種子無念は、即ち阿彌陀佛であると説いてある。

〔内容〕(1)佛陀は、維舍梨國の大勢憍(2)摩目婆羅(Mahamudgalyana)が、三千大千國に到りて、摩闍・維摩・香摩等を呼ぶ、(3)舍利弗は大衆の中で立つて、遂に成佛する方法を佛陀に問ふ、(4)佛陀は香摩行中に獲得門あることを示す、(5)阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼、(6)この阿彌陀の異名、(7)佛頭、(8)疾速陀羅尼法、(9)佛頭、(10)疾速得是陀羅尼、(11)佛頭、(12)八品字、(13)佛頭、(14)陀羅尼を念じ、法利を得る、(15)佛頭、(16)提想攝佛と阿彌陀佛との地持との關係、(17)阿彌陀佛はこの地持を受持することに依り、提想攝(Bhadra)實(劫中に、諸菩薩と俱に、四十萬劫を超越して、九十萬の佛を供養して無上道を證す、(18)佛頭、(19)隨擊流(Himalaya)山の八鬼神、(20)欲天上の八菩薩、(21)舍利弗等歡喜信受、(22)阿彌陀佛と説く。

〔阿彌陀佛〕(No. 1009)出生無量門陀羅尼經(第八譯)唐不空譯(大正一九・六七五—六七九)(No. 1010)無量門觀世音經(一名成道佛得一切智)(第一譯)吳支謙譯(大正一九・六八〇—六八二)

〔阿彌陀佛〕(No. 1012)出生無量門陀羅尼經(第二譯)東晉佛陀跋提譯(大正一九・六八二—六八五)(No. 1013)阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經(第三譯)宋東晉跋提譯(大正一九・六八五—六八八)

〔阿彌陀佛〕(No. 1014)無量門破魔陀羅尼經(第四譯)宋功德直支譯(大正一九・六八八—六九一)(No. 1015)阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經(第六譯)元魏佛跋提譯(大正一九・六九一—六九五)

〔阿彌陀佛〕(No. 1016)舍利弗陀羅尼經(第五譯)提僧伽跋提譯(大正一九・六九五—六九八)(No. 1017)一向出生菩薩經(第七譯)隋闍那崛多譯(大正一九・六九八—七〇二)

〔阿彌陀佛〕(No. 1018)出生無量門陀羅尼經(第九譯)唐智嚴譯(大正一九・七〇二—七〇七)

貞元新定釋教目錄第二十二卷(大正五五・九三—)

右の如く、各時代に於て、翻譯の現はれ居るは、一切經中に於ても、その例甚だ稀である。劉宋譯は蓋し東晉譯陀羅尼(Ġā-gabhadra)としては、處女譯とも見做す可きもので、同經の他の譯に比して、其未熟の點があつて、意味の解し難い點も少くはないが、幸に他の異譯と比較して始めてその意を解し得る譯である。

〔參考〕三寶記第一〇、內典錄第四、譯經圖記第三、開元錄第五、貞元錄第七

〔阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經〕(No. 1015) A-nan-fo-mo-hu-kyā-ai-ka-ta-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經、阿彌陀阿彌陀羅尼經

〔阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經〕(No. 1015) A-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經、阿彌陀阿彌陀羅尼經

〔阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經〕(No. 1015) A-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經、阿彌陀阿彌陀羅尼經

〔阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經〕(No. 1015) A-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經、阿彌陀阿彌陀羅尼經

〔阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經〕(No. 1015) A-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經、阿彌陀阿彌陀羅尼經

〔阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經〕(No. 1015) A-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經、阿彌陀阿彌陀羅尼經

〔阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經〕(No. 1015) A-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-fo-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿彌陀目法尼阿彌陀羅尼經、阿彌陀阿彌陀羅尼經

別經 ① 卷、大正一四・七五八—七六〇、495、船宿六、出二四・二、北771頁、南783頁、元777頁、明北633頁、清633頁、廣777頁、天770頁、指732頁、至1007頁、明南652頁、頁637 ② 法華經 ③ 在伏奉太初中 (A. D. 388—407)

④ 佛が阿難に對して、人生れて種々の苦があり、佛の滅後には、教説衰微して、比丘の自ら守ること清淨なるもの少く、世俗に墮して、汚濁のもの多く、時に學するもの有るも、行ずるもの少きを述べ、佛は値ひ難く、經法は聞き難いから、空しく思惟し、勤むべきを説かれたもので、その間に阿難が種々に分別して質問してゐる所から、阿難分別經の題號が出たものであらう。

始に佛は、人に六惡(眼等)あつて自ら徒歎し、三可(身口意)の爲に三毒を受け、六惑(眼等)の爲に十八の地獄に墮するものであつて、この苦を脱する爲には、佛に奉じて戒を受くべきを示し、佛に奉ずるにも、魔の弟子となつて事へると、人・天として事へると、佛弟子となつて事へるとの、三輩の別のあることを語り、更に佛の般泥洹の後千歲には、魔道興つて像法感なるべく、諸國の中でも眞升(支那)が最も惡いことを云ひ、佛の般泥洹後、外道の徒の來り入るものに就ての注意、並に後世に於て、法を求むるものに對する態度、經律の傳持、比丘の狀況、比丘として心得べき事柄、諸の價值などに就いて語り、末世の比丘の汚濁多く、佛の精神を没却して、専ら世俗に同すること多かるべきを示して、各精進す

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經

〔阿難問事佛吉凶經〕(No. 1015) A-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) O-nan-mo-hu-ai-ka-ta-ta-ai-kyā (支) Anantakhaśa-dhakaragoror Anantakhaśa-nama-dharaṇa (藏) Sō-mahā-pas-pas-bhagvā-pas sheṭṭya-hāḥi-kyā. 阿難問事佛吉凶經、阿難問事佛吉凶經







完結せるもの、如し。解釋に於て神華の破、光記、寶疏、續記、頌疏等廣く末疏に依る。と雖も、光記を以て勝と爲して居る。

①寫本(正大、一九〇・一六三)(坪井徳光)  
**阿毘達磨俱舍論支談** 〇(日) A-  
 bi-datsu-ma-ku-sha-ron-gen-tan. 〇1  
 卷 〇文政二(一)〇(正大、一一九〇・  
 一七二、一一九〇、四)〇(高次、寄、一、一、二)  
**阿毘達磨俱舍論古草** 〇(日) A-  
 bi-datsu-ma-ku-sha-ron-ko-ku. 〇1  
 卷 〇存 〇佐伯旭雄(文政二)一明治二四、  
 D. 1893-1891)等 〇明治一七寫 〇(正  
 大、一九〇・六五)

**阿毘達磨俱舍論講義** 〇(日) A-  
 bi-datsu-ma-ku-sha-ron-ko-ge. 〇1  
 卷 〇存 〇南條神興(文化二)一明治二〇、  
 D. 1814-1887)等 〇寫本(各本)

**阿毘達磨俱舍論講義附記**  
 〇(日) A-bi-datsu-ma-ku-sha-ron-ko-  
 shaku-zui-mon-ki. 〇2卷 〇存 〇段支(一  
 高永四 A. D. 1881)等 〇天保八寫 〇(各本)  
**阿毘達磨俱舍論指要** 〇(日) A-  
 bi-datsu-ma-ku-sha-ron-shi-yo-shu. 〇1  
 卷 〇存 〇指要 〇三十卷 〇存、  
 俱舍論指要鈔、指要鈔 〇三十卷 〇存、  
 大正六三・八〇分 No. 2250 〇漢譯(延寶三  
 一延享五 A. D. 1675-1747)等 〇享保一六  
 (A. D. 1731)

①本書は序説を六科に分ち、一に論の緣起、  
 二に論の宗旨、三に論の所攝、四に論の體、五  
 に作者、六に譯人である。次に本文に入つ  
 て一其文句を解釋して居るが、誠に簡に  
 ししを得たもの、p、光實の異義を批判す

①本書は序説を六科に分ち、一に論の緣起、  
 二に論の宗旨、三に論の所攝、四に論の體、五  
 に作者、六に譯人である。次に本文に入つ  
 て一其文句を解釋して居るが、誠に簡に  
 ししを得たもの、p、光實の異義を批判す

①本書は序説を六科に分ち、一に論の緣起、  
 二に論の宗旨、三に論の所攝、四に論の體、五  
 に作者、六に譯人である。次に本文に入つ  
 て一其文句を解釋して居るが、誠に簡に  
 ししを得たもの、p、光實の異義を批判す

①本書は序説を六科に分ち、一に論の緣起、  
 二に論の宗旨、三に論の所攝、四に論の體、五  
 に作者、六に譯人である。次に本文に入つ  
 て一其文句を解釋して居るが、誠に簡に  
 ししを得たもの、p、光實の異義を批判す

①本書は序説を六科に分ち、一に論の緣起、  
 二に論の宗旨、三に論の所攝、四に論の體、五  
 に作者、六に譯人である。次に本文に入つ  
 て一其文句を解釋して居るが、誠に簡に  
 ししを得たもの、p、光實の異義を批判す

①本書は序説を六科に分ち、一に論の緣起、  
 二に論の宗旨、三に論の所攝、四に論の體、五  
 に作者、六に譯人である。次に本文に入つ  
 て一其文句を解釋して居るが、誠に簡に  
 ししを得たもの、p、光實の異義を批判す

義疏六十卷、漢譯三藏、同疏八十三卷、陳智  
 悅述、同疏三十卷、唐紀國寺惠淨撰、同疏二  
 十二卷、唐光道撰、(略法義支談は二十  
 卷とあり) 等の亡失不傳の諸疏の外に十一  
 種末疏を擧げて説明してある。

二、此論宗趣、二門に分ち、一、所詮義  
 宗、通じては無我を明し人執を破し、別し  
 ては七十五法、三世實有法體恒有を宗と爲  
 してある。二、所計那宗、俱舍宗とも經部  
 宗とも云ふべからずして有部宗と爲すべき  
 であると述べてある。

四、分別撰號、尊者世親の六合釋による  
 説明、世親の時傳、同名異人に就き論ず。  
 五、料簡譯名、唐玄奘三藏法師奉詔譯の  
 説明、玄奘三藏の時傳及び俱舍論の譯時を  
 説く。

六、三分差別、二門あり、一、述今義、  
 二、破古非なり。述今義に於ては、快道師  
 提唱の破我別論の説を立つ。即ち世親最初  
 の遺疏には、前八品のみにて、破我品は無  
 し。前八品中、前七言三頌は、序分にして  
 定品中の迦羅羅等七言一頌は、流通分  
 であり、中間六百行五言頌は、正宗分であ  
 る。定品中、大師世親等の七言三頌は、破  
 我論の發起分にして、全く前論の頌ではな  
 いと説いて、此を證するに六の理證に依  
 る。此の論を立てたのは、正に天明七年二  
 月十五日である。破我品を三分して、大師  
 世親等の三頌は序分、終の三頌は流通、中  
 間散説は正宗分なりと。故に破我品は俱舍  
 論とは別論にして、破我品成立は、俱舍論  
 長行を作る後であると説いてある。

七、品次列位、前八品は諸行無常及び涅  
 槃寂靜の二法印を説くものにして、初二品  
 は總論無漏、後六品は別論無漏である。  
 八、按文評談、俱舍論三十卷の全文を逐  
 次評談す。

本論は快道師の「今論する所の者は、上  
 四阿含等に登り、中發智六足等の諸論に居  
 り、下正理、顯宗を闡して而して論主の旨  
 を得。全く光實等の本師に依らざるは何者  
 ぞ。光實に依て俱舍を造らざるを以ての故  
 なり」と云へるが如く、後世末疏の言に拘  
 泥せず俱舍論を釋してある。

①文政六寫(正大、一九〇・一九六)  
 (坪井徳光)

**阿毘達磨俱舍論法義辨稿**  
 〇(日) A-bi-datsu-ma-ku-sha-ron-ho-ge-  
 bi-an. 〇1卷 〇存 〇快道(寶曆元  
 一〇〇 A. D. 1751-1810)等 〇寫本(高  
 次、寄、一、一、二)

**阿毘達磨俱舍論本義鈔** 〇(日)  
 A-bi-datsu-ma-ku-sha-ron-hon-ge-sho. 〇1  
 卷 〇存 〇本義鈔、俱舍論明思鈔、明  
 思鈔 〇四十八卷(内四卷缺) 〇存、大  
 正六三・一、一、〇、〇、〇、大日本佛教全書第八  
 六一八八 〇宗性等撰 〇建久三(觀應二  
 (A. D. 1321-1331))

①此書は阿毘達磨俱舍論三十卷の本義を鈔  
 録したものであるから阿毘達磨俱舍論本義  
 鈔と云ひ、小乗有部の教義を闡明したもの  
 である。然るに俱舍論を注釋したものに神  
 泰疏、善光疏、法寶疏、及び圓暉の頌疏の  
 四本あり、其中神泰疏は一部分のみ流傳し

卷数	撰者	撰述年代	開答	存続	撰處	寫本年代	備考
一ノ上	宗性	弘長二年	五二	存	東大寺知足院	原	
一ノ下	宗性	弘長二年	四九	存	同	同	
二ノ上	同	弘長二年	六五	存	同	同	
二ノ下	同	弘長二年	四七	存	同	同	
三	同	弘長三年	五三	存	同	同	
四ノ上	不明	弘長四年	三七	存	同	同	
四ノ下	不明	弘長三年	三六	存	同	同	
五ノ上	宗性	文永二年	三五	存	同	同	
五ノ下	宗性	文永二年	三八	存	同	同	
六ノ上	同	寶治二年	二九	存	同	同	
六ノ下	同	寶治二年	二四	存	同	同	
七ノ上	不明	不明	三一	存	同	同	
七ノ下	同	不明	三〇	存	同	同	
八ノ上	宗性	文永六年	三四	存	同	同	
八ノ下	同	文永六年	三三	存	同	同	
九ノ上	不明	不明	二九	存	同	同	
九ノ下	不明	不明	二九	存	同	同	

てをる點は實に見るべき點である。  
 内容大綱は俱舍論三十卷の中破我の一品  
 を除いた二十九卷、即ち界二根五世間五業  
 六隨三賢聖四智二定二世願次巻を逐ふて俱  
 舍、要沙、光、實より本文を鈔出したもの  
 で問題は一千七百四十八問答あり、撰者に  
 つきては宗性として居るが、宗性以外に數  
 人の撰者あり、又年代も、長き時間に残り  
 て撰出せられ、又一卷より順次撰せられた  
 のではなく、必要に応じて撰せられたので  
 あるから自ら前後がある。要するに俱舍論、  
 最勝論、春日三十講等の諸師を命ぜられる  
 都度次第に撰られたものである。次に撰者  
 撰述年代、撰述場所等を一覽表にすれば、







る婆沙論を俟ちて明かにされたと言はねばならぬ。勿論、本論は表面上こそこれを論及してゐないけれども、全論一切が法有思想の上に構成されてゐることは断る處もない。其の論述の及ぶ範囲は、非常に廣く、恐らく其の當時、印度の所謂部派佛教間に論ぜられてゐたであらう一切の法相問題を取扱つたと思はれる。而も其の論述の仕方たるや、解釋的記述を爲さず、關係法目を擧げて、直ちに其等法相の善惡・無記の三性分別乃至成就不成就門分別等の相互關係論に移ると言つた風である。

〔内容大體〕 本論は、八章四十四納息に分たれてゐるが、其の文題なるものにも、恐ろしく複雑、深甚の意義を有する法相論集である。即ち四十四納息の一にも亦、多数の章節を含んでゐることは、各納息の初頭に掲ぐる短文に示す通りであるから、其の大意を略記するすら致すは不可能である。従つて今は一昆婆沙師説に準じて、簡く簡單に八章説述の内容を彷彿せしめるに止めたい。第一雜蘊は、いはゞ全論の序篇に當る。

(1) 先づ凡夫身中の最上清淨品たる世第一法論から始めて、其の所對の雜染品たる諸惡見を論じ(世第一法納息)、(2) 諸淨染二品を何者が能く了知するやと言ふ(ば無我智なるが故に、第二智納息を説き)、(3) 此の無我智は緣起を覺了するに由りて生ずるが故に、第三補特伽羅納息にて十二支緣起を説く、(4) 此の緣起の覺は愛と欲とに由りて起るが故に、第四に愛欲納息を説き、(5) 是の如き愛欲は慳性(慳)に由りて生ずるが

故に、第五無慳納息の名の下に、無慳性と慳性を對比的に論じ、(6) 慳性は法相を解するに由りて得るを以て、第六相納息を説き、(7) 此の法相の解了は無義の苦行を捨して有義の行法を修習するに由りて得るが故に、第七義納息を説く、(8) 此は又、正思惟と正思とに外ならざるが故に、第八思納息を説く第一蘊を了る。次に、雜蘊に説くが如きかゝる諸法の覺了が明淨となるは、一切の煩惱の斷に由るが故に、第二結蘊にて、其自性等と結斷との相相を論究し、又、此の結斷は諸智に由りて證するに外ならざるが故に、第三に智蘊を説き、而も斯る斷結の諸智は業障無き補特伽羅が能く生起するが故に、第四業蘊にて、業の種々相と業障の除滅とを明し、復、次に、此等の諸業の多分は大體に依止して生ずるが故に、第五大體蘊にて大體と造色とを論じ其の造色中の最勝なるものは、眼等の二十二根なるを以て、第六に根蘊を説き、諸根が清淨となるは、禪定力に依りて得ずるもなるが故に、第七に定蘊を説き、然も假令、定を得るも、若し邪見等に由りて起すものなれば、反つて諸惡見等を引生ずるが故に、茲に正し見識を得せしめんとて最後に見識を説けるなり。勿論、是の如き蘊の名は、其の蘊中の主眼とする論題に従つて立名したもので、其の間に相互交雜のあることも亦、免れない所である。

〔釋義〕 迦陀衍尼子が一度發智論を作るや其の精緻なる論法は、遂に有部宗に於て一大新發展をなすこととなり、従前よりも

一層阿毘達磨中心主義一線論に云へば論部偏重主義の傾向を附随することとなつた。従つて在來の有部に對して新運動として何程か表裏の異つたものもあつたことも事實で、發智系又は迦陀衍尼子系の有部學系を形造るに至つた。吾、寧ろ有部宗特定の宗義は此に由りて確立したと云つて過言でないのである。但し、發智論は、餘りに所謂阿毘達磨的特色即ち諸法の分別とか相互關係とかを明すに専心して、法相其のもの、解釋とか、事實の説明とかになれば、他の品類・施設論に及ばぬものがある。例せば發智中に五位の分類に由る秩序的説明もなければ、有情世間、器世間の生住滅に關する詳しき説明も無いのに徴しても明かである。是れやがて、有部一宗の所依の首論として、本論文では、物足らぬ感を生じ、彼の教徒をして、他の集異門等の六論を之に配して、有部所依の論部とき(い)ば、六足發智なりとする必要を生じた所以であり又、其の甚だ難解なる點は、現存の大毘婆沙論を始め、多くの昆婆沙(Vibhāṣā)製作の動機を醸せし所以でもある。

〔傳通〕 印度にて有部の最も盛なりしは、迦羅國(現ウタリヤ)を中心とする地方なるも、發智は迦羅國よりや、東方にある至那僕底國(Chabakhi)の闍林寺(Tanavavasa-sahāyana)にて誕生し、其の著作年代も可なり古く、大毘婆沙編纂當時には、已に品類足論との其の古に疑問を生じてゐた(婆沙四五、大正二七、頁三三二下)程であつた。其の傳通は、有部宗の行はるゝ

處は勿論、俱舍論の研究さるゝ處は何處にても、其の根本所依の論として傳通されたのであるけれども、實際上の研究となれば大毘婆沙論の研究が俱舍論にそのお株を奪はれてゐた如く、少くとも支那日本にては學者の研究興味から遠ざかつてゐたと言はねばならぬ。

因みに現存の支那譯大毘婆沙所引の發智本論は、麗本の發智よりも、寧ろ宮内省本及び宋・元・明三本のそれに近い。

〔注釋〕 阿毘達磨大毘婆沙論(舊・新兩譯)

① 內典雜第五、譯經圖記第四、開元錄第八、貞元錄第一(西義譯、故本半男)

阿毘達磨發智論條簡 ①(B) A-bi-dā-mo-pi-tai-tsu-tan. ② 一巻

③ 存 ④ 香樹院德藏(安永元一安政五、A. D. 1772-1858) ⑤ 文政元寫 ⑥ 各大本・三九〇九

阿毘達磨品類足論 ①(B) A-bi-dā-mo-pi-tai-tsu-tan. (支) O-dā-mo-pi-tai-tsu-tan. (支) Abhi-dharmaprakaraṇapada-āstara. 品類足論、品類論 ①十八卷 ② 存、大正二六・六九二 No. 1522 縮多一〇、中二五・一一二、北903 支、南907支、元905支、明北1270對、清1270對、關905支、天905支、南912支、法911支、至1400左、支、天1404清、No. 1277 ③ 尊者世友造、支、天1404清、No. 1277 ④ 尊者世友造、支、天1404清、No. 1277 ⑤ 尊者世友造、支、天1404清、No. 1277 ⑥ 尊者世友造、支、天1404清、No. 1277

⑦ 有部(說一切有部 Sarvāstivādin; Sāhba

Hivāṣā) ⑧ 最根本原典たる六足論(一、二、三、四、五、六) ⑨ 俱舍論(俱舍論、實二記等) ⑩ 於ては法蘊・集異門・施設・護身に次ぐ第五位に置かれ、梵文傳(Ch. Yasomitra; Abhidharmakosa-yākyā edited by S. Lévi and Scherbatsky P. 12) に在るは第一位、支、西譯傳(Ch. Taranātha; Die Geschichte d. Ind. Buddhismus abstrakt von A. Schaefer S. 56; Wasiljeff; Der Buddhismus S. 116) に於ては法蘊・施設・界身・護身に次ぐ第五位に置かれてゐる。梵・漢の諸傳一致して佛滅三百年頃出世の尊者世友 Vasumitra(和須蜜、提婆多羅等)造としてゐるが、果して傳説のままを肯ふべきや否や。寧ろ、元來ある程度まで各品各別に成立したものを、後に綜合し結論したもので、所詮は矢張り他の六足論論と同様、有部の諸學匠が佛滅二・三世紀頃、教會的に編纂したもの考へさせられる道理が多い。かくして早く後漢の安世高に阿毘婆沙法行經一巻とし、また、唐の法成に「薩婆多宗五事論」一巻として、今の品類足論五事品第一相應のもの傳譯がある、且つ永く散佚してゐるが、同じく安世高に阿毘婆沙論七事品第四相應の阿毘婆沙法行經一巻、同譯隨眠品第五相應の阿毘婆沙十八結經一巻の譯傳のあつたことが諸經錄に見えてゐるし、乃至、龍樹も大智度論二に、品類足論八分中の初め四品は是れ婆須蜜(即ち今の世友)の作で、他の四品は是れ羅賓(即ち今の世友)の作と傳つてゐる所である。題名「阿毘達磨品類足論」Abhidharma-

prakaraṇapada-āstara. とは「阿毘達磨論」は論部所屬の一原典たることを示し、品類 Prakaraṇa は廣範圍の諸佛教思想項目を分別・説明せるの意を明かにし、足pāda は六足論(有部の最根本六阿毘達磨聖典)の一たることを表す。恐らくは六足論中の最終の成立で、上代有部思想といふ範圍では殆ど具備せざるなく、有名な五位説(色・心・所不相應行・無爲といふ萬有を五の範疇に分類せる一の見方)も初めてこの論に見出されるし、心所法の一分類たる(一)十大地法、(二)十大煩惱地法、(三)十小煩惱地法、(四)十大善地法(但しこの最後の二は當品類足論、即ち、支、美事分阿毘婆沙論には見えない)の説も亦見えてをり、更に四大種(即ち地・水・火・風)とは是れ堅・濕・煖・動を本義とすなどいふ解釋も論中に初めて認めらるゝ所である。参考の爲めに左に各品に關し簡單に紹介をして置くこと。

一、辯五事品第一 五事とは用ち右記の五位の意味で、本品に於ては寧ろその五位の諸法の定義的解説をのべる。中に聲の有執受・無執受の二別、色の顯・形二別(但し、これほど判然としてゐない)、心不相應行法の六足論中に於ける初めて解説などが見える。

二、辯諸智品第二 法・類・他心・世俗・苦・集・滅・道・盡・無生の十智に關する關係的な諸檢討を記する。

三、辯諸處品第三 眼・耳・鼻・舌・身・

意・色・聲・香・味・觸・法の所謂十二處の諸門分別と五蘊・十二處・十八界・二十二根・九十八隨眠の相攝關係をのべる。

四、辯七事品第四 (一)十八界 (二)十二處 (三)五蘊及び五取蘊 (四)六界 (五)四種の十地法(十大地法等) (六)六種の五法 (七)六種の六身法等 (八)七事二十種の諸法に關して、初めに各解説を記し、次にそれら諸法の顯・處・界等の所謂三科の分類よりせる攝・不攝を論ず。

五、辯隨眠品第五 九十八隨眠に關する諸門分別・諸隨眠の隨増・その起り・相攝等を檢討す。

六、辯緣等品第六 最初、十五種一六百六十九(但し、別記の舊譯では六百六十七)の諸法に關して定義的に解説し、第二段に至つてそれら諸法の(一)三科の攝 (二)十智の如 (三)六識の攝 (四)隨眠隨智の諸問題を論述す。

七、辯千問品第七 五學處・四證淨・四淨門果・四通行・四聖種・四正斷・四神足・四念住・四聖諦・四靜慮・四無量・四無色・四修定・七等覺支・二十二根・三科等の諸法について(一)攝か有色にして(二)攝か無色なる等の各五十問、合計千問を分別記述する。

八、辯決擇品第八 有色法、唯有色法、無色法、唯無色法といふ具合にして、諸の二法四十四對、諸の三法三組九對、諸の四法二組八對、諸の五

法一組五對、諸の六法一組六對、三科の諸法三組三十五對、九十八隨眠法一組九十八對、以上合計五十五組二〇五對を各一對相對的に、前の辯緣等品第六の從分に準じて檢討・論述する。

品類足論は梵・漢二本の傳を缺くが、漢譯には、當支那譯品類足論以外に、まづ全譯傳として美事分阿毘婆沙十二卷が有り、次で論本傳として、前已に觸言せる(一)安世高譯阿毘婆沙法行經一巻(今の品類足論五事品第一相應)有り、(二)唐の法成譯薩婆多宗五事論一巻(同上)も現存する(以上各項下參照)その外更に今は散逸せるも、古、同譯の論本傳のあつたことは亦前言の如し。最後に品類足論五事品第一に對しては、佛滅六百年出世法教 Dharmarata 作といはれる五事品婆沙論(二卷といふ末疏も存し、現に漢譯中に承傳せる)の下參照も西城記二に曰く、「健駄國……城東有聖塔波、無憂王之所、建也。即過去四佛說法之處、先古聖賢自中印度、降神降物、斯地定多、即提婆聖明羅(唐言世友、舊曰和須蜜多)說也。論師、於此製(美事分阿毘婆沙論)」。大正五・一八八a)と。

阿毘達磨品類足論五事品 ①(B) A-bi-dā-mo-pi-tai-tsu-tan. (支) O-dā-mo-pi-tai-tsu-tan. (支) Abhi-dharmaprakaraṇapada-āstara. 品類足論、品類論 ①十八卷 ② 存、大正二六・六九二 No. 1522 縮多一〇、中二五・一一二、北903 支、南907支、元905支、明北1270對、清1270對、關905支、天905支、南912支、法911支、至1400左、支、天1404清、No. 1277 ③ 尊者世友造、支、天1404清、No. 1277 ④ 尊者世友造、支、天1404清、No. 1277 ⑤ 尊者世友造、支、天1404清、No. 1277 ⑥ 尊者世友造、支、天1404清、No. 1277

⑦ 有部(說一切有部 Sarvāstivādin; Sāhba





正二・八・一五、前七七一〇、出二  
三・四一七、北三〇五分至、南三〇五分至、  
元九〇五分至、明北三〇五分至、清三〇五分至、  
東京、慶應義塾、天九〇五分至、指914  
投至、至1401永五典、明南1405至、  
No. 1264 ①通海子造、五百羅漢、淨陀  
跋摩道等共譯 ②北涼水和五(A. D. 477)  
③異譯—阿毘達磨大毘婆沙論(支那譯の大  
毘婆沙論を新譯婆沙と稱するに對し、本  
書を婆娑沙と略稱する。  
本書はもと百卷全部、完備したものであ  
つたけれども、涼城の兵亂に散佚して今は  
六十卷のみ残存し、發智論八卷中の第三卷  
の註釋迄に止まる。之を支那譯二百卷より  
すれば、初めの百十一卷に相當する部分で  
ある。即ち

- (1) 雜難度
  - (2) 第一法品 (3) 智品 (4) 人品 (5) 受教品 (6) 無無憍品 (7) 色品 (8) 無義品 (9) 思品
  - (10) 使難度
  - (11) 不義品 (12) 一行品 (13) 人品 (14) 十品
  - (15) 智難度
  - (16) 八道品 (17) 他心智品 (18) 修智品 (19) 相應品
- 本書は新譯に比すると、直截簡明を期せる風ありて、其れが爲め反つて理解し難き點がなほ多い。尙、記述が前後したり或ひは又、新譯に「大德」とある所が舊譯では「尊者佛陀提婆」となつてゐたりして其の間多少の出入のある所もあるけれども

大體に於て彼此の一致を示してゐる。  
①(參考) 出三藏記第二、三寶紀第九、内典錄第三、譯經圖記第三、開元錄第四、貞元錄第六 (西義雄、坂本幸男)  
**阿毘曇法教文** ①(日) A. b. idon-hos-shōmon. (支) O. p. i. fan-tan-tan-shō-mon. ②(支) 東城傳燈目錄卷下  
**阿毘曇名教** ①(日) A. b. idon-myōkyō. (支) O. p. i. fan-tan-ming-kyō. ②(支) 東城傳燈目錄卷下  
**阿毘曇論義章** ①(日) A. b. idon-ron-gi-shō. (支) O. p. i. fan-tan-ron-gi-shō. ②(支) 東城傳燈目錄卷下  
**阿毘曇論** ①(日) A. b. idon-ron-shō. (支) O. p. i. fan-tan-ron-shō. ②(支) 東城傳燈目錄卷下  
③(支) 東城傳燈目錄卷下  
④(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑤(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑥(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑦(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑧(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑨(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑩(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑪(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑫(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑬(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑭(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑮(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑯(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑰(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑱(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑲(支) 東城傳燈目錄卷下  
⑳(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉑(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉒(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉓(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉔(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉕(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉖(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉗(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉘(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉙(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉚(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉛(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉜(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉝(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉞(支) 東城傳燈目錄卷下  
㉟(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊱(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊲(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊳(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊴(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊵(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊶(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊷(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊸(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊹(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊺(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊻(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊼(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊽(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊾(支) 東城傳燈目錄卷下  
㊿(支) 東城傳燈目錄卷下

阿毘曇に與へたもの二篇「阿毘曇御書」「阿毘曇御返事」千日尼に與へたもの四篇「阿毘曇御前御返事」「千日尼御前御返事」「青魚書」「千日尼御返事」の六篇を含む。阿毘曇に與へたものの中には法華經見寶塔品に於て出現した寶塔とは妙法五字であり、隨つて法華經を信する男女の肉身に外ならぬことを説いて、有名な「阿毘曇」ながら寶塔、寶塔ながら阿毘曇の語がある。又千日尼に與へたものの中には、諸法華の經に於いて懇切丁寧な解説を與へ、女人にして斯かる深重の法門を聽かんとするのには其の信智能女に等しいと稱揚してある。一説に阿毘曇は順德天皇に風從して佐渡に來た北の武士流藤爲盛であると傳へて居る。  
(馬田行啓)

- 阿毘問答** ①(日) A. b. idon-da. ②(支) 野口復堂述 (京塚)
- 阿母捺羅經** ①(日) A. b. idon-akū. ②(支) 大日本佛教全書第二八卷附錄  
③(支) 同卷(弘仁一五)寬平三  
A. D. 811-891 ④(支) 寬平四年、年七八(支) 説  
⑤(支) 阿母捺羅經とは A. Madra 阿母捺羅經であるが阿字の印契に關する論述と、ふべき者、即ち阿母捺羅大日如來の印契論である。本文は阿母捺羅とは中那捺羅印・法身印・報身印・阿字印・佛身圓滿印・法如智印・遍滿虚空無所不至印・金剛界自在印・三摩耶印等と名けてある。大日尊は半那捺羅を以て三摩耶印となすからである。元來半那捺羅は佛蓮三部の塔があつて、三部共に地水火風空の五輪を以て一切形の圓滿具足を表すものであると云ふ。本書は佛部特に胎藏大日尊の三摩耶形を觀するに就き、曼荼羅海會中の一切如來は皆大日尊の所變であり、種々の泥木塑像も悉く大日尊であり、大日法身の顯れであると記し、一切の字印形は皆悉く大日尊の三摩耶所變であるといひ、阿字に五點具足し、印契に五用あり、形像に五觀あり、塔婆に五形があるといふ。故に行者が觀行を運ばば必ず諸尊の本願に赴く。教に頓漸淺深があつても遠に非ず近に非ずして行人の願として應はざるはないと。尙、本書と姉妹篇として慈摩母捺羅經があつて金の智摩印に就いて述べてゐる。  
(田島德香)
- 阿毘曇** ①(日) A. b. idon. ②(支) 檢經記 ③(支) 存、大日本佛教全書第二八〇(支) 弘仁一五(支) 寬平三 A. D. 811-891 ④(支) 寬平四年、年七八(支) 説(參考) 諸法華經卷二、密乘撰述目錄
- 阿梵和利比丘無常經** ①(日) A. b. idon-wa-ri-bi-ku-an-shō. (支) O. fan-to-ri-bi-ku-an-shō. ②(支) 佛念譯出經第二卷の抄出 (參考) 出三藏記第四、法華經卷五、仁壽錄第三、壽壽錄第三、開元錄第六、貞元錄二六
- 阿摩羅** ①(日) A. ma-ro. ②(支) 存、大日本佛教全書第四七卷附錄之内
- 阿摩提念論次第** ①(日) A. ma-ti-nen-ron-ji-dai. ②(支) 存 (寶龜院、西)
- 阿摩羅經** ①(日) A. ma-ro-kyō. ②(支) 存

(支) O. mo-cho-shō. (支) D. Jambhūti. ②(支) 存、長西合經第二〇(大正一、No. 1. 20)  
**阿羅密經** ①(日) A. mi-da-mik-kyō. ②(支) 存、仁壽三(支) 延長三 A. D. 833-925 ③(支) 諸宗章疏卷第三  
**阿羅不** ①(日) A. mi-da. ②(支) 存、足利中期寫 ③(支) 金剛三昧院(五五)  
**阿彌陀** ①(日) A. mi-tō. ②(支) 存、大日本佛教全書第三六卷附錄之内  
③(支) 承慶(元久二—弘安五 A. D. 1203-1282) 撰 ④(支) 寫本(高木、寄、一・六六)  
**阿彌陀** ①(日) A. mi-tō. ②(支) 存、大日本佛教全書第四五卷附錄之内 ③(支) 聖德太子傳 ④(支) 成實(水徳元一寶徳三 A. D. 1381-1451) ⑤(支) 實政五篇 ⑥(支) 金剛三昧院(三五)  
**阿彌陀** ①(日) A. mi-tō. ②(支) 存、德川時代寫、足利時代寫、永正三寫(支) 寶龜院、(支) 存  
**阿彌陀** ①(日) A. mi-tō. (支) O. mi-tō. ②(支) 九品往生阿彌陀三摩地陀羅尼經 ③(支) 存 ④(支) 足利時代寫 ⑤(支) 寶龜院(正)  
**阿彌陀因行記** ①(日) A. mi-tō-in-gi. ②(支) 存、貞宗全書第七 ③(支) 光遠院寫(正保元—享保六 A. D. 1644-1721) ④(支) 貞享元(A. D. 1684)

本書は聖德太子が阿彌陀佛の因位願行を記し、其思徳の廣遠不思議なるを讃仰せしめ、上巻に於ては大無量壽經異譯は勿論、妙法蓮華經、悲華經、維持經、賢助經、觀佛三昧經等の中より、各論因事の説を採集して十説を列擧し、下巻には自ら上の諸經の説を略持せしめんが爲に頌を造り、更に上の諸説について問答を試み、是等久遠不可思議劫の昔に出現せる菩薩の願行は、誰か是れ先、誰か是れ後なるか知る事能はざるも、唯是れ法華比丘一人の積功累徳の相なることを斷じ、而して更に彌陀願行の相を詳説し、佛の苦行の相を記し、其大徳の深重なるを顯示してゐる。斯く著者は善く大徳を探りて、彌陀因位の願行を明にせしを以て、後の學者の因行を考察するに、概ね本書に據るを常としてゐる。  
①(支) 聖德太子傳 ②(支) 正徳六(正大、一五二—一四)享保二寫(各大、宗大、六三〇)各大、宗大、一四五四(龍大、一五〇二—一四)智、一七・右・二(大須賀秀道)  
**阿彌陀院資財帳** ①(日) A. mi-tō-in-shi-zai-chō. ②(支) 阿彌陀院佛遺教資財帳 ③(支) 存 ④(支) 奈良佛現在一切經疏目錄 2930  
**阿彌陀院寶物目錄** ①(日) A. mi-tō-in-hō-motsu-moku-roku. ②(支) 存、群書類從第一五、新校群書類從第十九 ③(支) 阿彌陀院 ④(支) 唐書(唐大業九—唐水陸二 A. D. 613-681) ⑤(支) 說經二(年六九) ⑥(支) 存、淨土正依經論書目録

**阿彌陀經** ①(日) A. mi-tō-kyō. (支) O. mi-to-kyō. (支) Sakavayāna. ②(支) Ude-ha-san-gi-kyō-pa. ③(支) 阿彌陀三昧經等の中より、各論因事の説を採集して十説を列擧し、下巻には自ら上の諸經の説を略持せしめんが爲に頌を造り、更に上の諸説について問答を試み、是等久遠不可思議劫の昔に出現せる菩薩の願行は、誰か是れ先、誰か是れ後なるか知る事能はざるも、唯是れ法華比丘一人の積功累徳の相なることを斷じ、而して更に彌陀願行の相を詳説し、佛の苦行の相を記し、其大徳の深重なるを顯示してゐる。斯く著者は善く大徳を探りて、彌陀因位の願行を明にせしを以て、後の學者の因行を考察するに、概ね本書に據るを常としてゐる。  
①(支) 聖德太子傳 ②(支) 正徳六(正大、一五二—一四)享保二寫(各大、宗大、六三〇)各大、宗大、一四五四(龍大、一五〇二—一四)智、一七・右・二(大須賀秀道)  
**阿彌陀院資財帳** ①(日) A. mi-tō-in-shi-zai-chō. ②(支) 阿彌陀院佛遺教資財帳 ③(支) 存 ④(支) 奈良佛現在一切經疏目錄 2930  
**阿彌陀院寶物目錄** ①(日) A. mi-tō-in-hō-motsu-moku-roku. ②(支) 存、群書類從第一五、新校群書類從第十九 ③(支) 阿彌陀院 ④(支) 唐書(唐大業九—唐水陸二 A. D. 613-681) ⑤(支) 說經二(年六九) ⑥(支) 存、淨土正依經論書目録

火風空の五輪を以て一切形の圓滿具足を表すものであると云ふ。本書は佛部特に胎藏大日尊の三摩耶形を觀するに就き、曼荼羅海會中の一切如來は皆大日尊の所變であり、種々の泥木塑像も悉く大日尊であり、大日法身の顯れであると記し、一切の字印形は皆悉く大日尊の三摩耶所變であるといひ、阿字に五點具足し、印契に五用あり、形像に五觀あり、塔婆に五形があるといふ。故に行者が觀行を運ばば必ず諸尊の本願に赴く。教に頓漸淺深があつても遠に非ず近に非ずして行人の願として應はざるはないと。尙、本書と姉妹篇として慈摩母捺羅經があつて金の智摩印に就いて述べてゐる。  
(田島德香)

- 阿彌陀** ①(日) A. mi-tō. ②(支) 檢經記 ③(支) 存、大日本佛教全書第二八〇(支) 弘仁一五(支) 寬平三 A. D. 811-891 ④(支) 寬平四年、年七八(支) 説(參考) 諸法華經卷二、密乘撰述目錄
- 阿梵和利比丘無常經** ①(日) A. b. idon-wa-ri-bi-ku-an-shō. (支) O. fan-to-ri-bi-ku-an-shō. ②(支) 佛念譯出經第二卷の抄出 (參考) 出三藏記第四、法華經卷五、仁壽錄第三、壽壽錄第三、開元錄第六、貞元錄二六
- 阿摩羅** ①(日) A. ma-ro. ②(支) 存、大日本佛教全書第四七卷附錄之内
- 阿摩提念論次第** ①(日) A. ma-ti-nen-ron-ji-dai. ②(支) 存 (寶龜院、西)
- 阿摩羅經** ①(日) A. ma-ro-kyō. ②(支) 存

























【ア】

得て浄土に至るを得るとある。又次に流通分は、最後の爾時觀自在菩薩摩訶薩以下である。

〔批評〕 本經は貞元録第十五に「經内題云阿彌多羅尼阿彌力品第十四」とあり、又三十帖童子第廿八帖の奥書に「永承三年七月十一日、勅文之處、不入錄、内題外題共不見、若取本書、置他文敷」とある。此れに由つて見るも、この經は大本中の略出であることは明かである。其の題は、蓮花部心の眞言阿彌力より名づけたものであらう。又其の眞言は聖觀世音菩薩の眞言であり、陀羅尼集經第五、並びに金剛頂經三世大儀軌法王教中觀自在菩薩心眞言一切如來蓮花大曼拏羅品にあり、且つ其の所記も相似してゐる所あれば、此れ等は同本或はこの大本中の一部であらう。又此の經はもと多羅觀世音菩薩の眞言なるも、聖觀世音菩薩の眞言として、古來から用ひられ、曼殊師利菩薩の卷上(眞言)に「阿彌力加羅多羅觀世音經云、又聖觀音咒可加用也」とある。因に本邦に本經を講求したのは聖海、圓仁、圓珍の三師である。

①(参考) 貞元録第一五、三十帖童子第二八、八家經錄卷上多羅法、諸佛觀世音經第七 ②永正一七曼道寫、永承三校勘(三十帖童子) (神林隆彦)

**阿梨吒經** ①(日)A-ti-ta-kyō (支)O-ti-ta-ching (日)M. 22. Alagaddupama. ②存、中阿含經第五(大正一 No. 26, 300)

**阿留邊夜字和** ①(日)A-ri-u-ben-ya-wa. ②存、禪門法苑卷

中 ①高麗(承安三)貞永元 A. D. 1173-1175)述

②此語は上人の法語中でも特に有名で、誰れでも能く使用して居る。現代語の「らしく」の意味に能く當つて居る。此語は上人の上足の弟子喜海の收集した「明惠上人遺訓」の佛頭と群書類從第四百七十五卷「益椿」の中に出づ居るのが最も古い様である。兩書を比較すると法語に語の多少はあるけれども、意味は同じである。尙庵尾高山寺には鎌倉時代に流行した題板に白雲「僧侶の日用清規とも云ふべきものを『阿留邊夜字和』と題して自ら書かれたものが残つて居るのを見ると、上人自身も此法語を日常色々の方面に活用せられたことが想像出来る。(土宜覺了)

**阿和三昧經** ①(日)A-wa-san-mi-kyō (支)O-ho-san-mi-ching. ①一卷

②劉宋代失譯 ③(参考) 出三藏記第四、武周錄第一、開元錄第一五、貞元錄第二五

**阿訶記** ①(日)A-ko-ki. ②四帖

③存 ④撰(建久七)文永一〇A. D. 1195-1175)草 ⑤天文二二寫 ⑥金剛三昧院(八七)

**阿訶開書** ①(日)A-ko-kaikyō (支)A-ko-ka-ching. ①一卷

②劉宋代失譯 ③(参考) 出三藏記第四、武周錄第一、開元錄第一五、貞元錄第二五

**阿訶支底** ①(日)A-ko-shi-ki. ②一帖

③存 ④德川時代寫 ⑤寶龜院(智)

**阿訶合行** ①(日)A-ko-gō-gō. ②一帖

理趣三昧合行通觀 ①一帖 ②存 ③天保四寫 ④寶龜院(金)

**阿訶才祝狀** ①(日)A-ko-sai-shūkyō. ②六卷 ③存 ④遺寶(建保二)弘安四 A. D. 1211-1230)述 ⑤足利時代寫 ⑥寶龜院(智)

**下火眞言初學集** ①(日)A-ka-shō-gō-shūshū. ②四卷 ③存

④傳(寶龜)貞元元刊 ⑤龍大、二六六八・五(智、け、四、左、七)

**安藝兩僧御調書** ①(日)A-ki-ryō-sō-ō-gō-gō. ①一卷 ②存

③流傳(支)文化元(明治一四)A. D. 1884-1851)述 ④寫本(龍大、一五〇一・一一)

**安土宗論** ①(日)A-tsu-shō-ron. ①一卷 ②存、大日本佛教全書第九七宗論叢書第一 ③萬治三(A. D. 1660)

④天正七年(A. D. 1579)五月二十七日織田信長の命により安土城下淨土院に於て淨土宗の王念及び自安と日蓮宗の日蓮、日蓮等と宗論對決を行つた顛末を記したもので、末尾に「此宗論信長記にこれありといふも不足故正本をもつて寫之者也 萬治三年庚子四月吉日」とあるから筆者は不明であるが轉寫であることは明瞭である。安土宗論に就ては古來全く相反する記載が傳はつて其の眞相は容易に把握できないが此書が淨土宗の立場に於て自宗に有利なやうに書いたことは疑ひがなく、問答の論旨が徹底明瞭を缺いてゐる。故に因果居士曰「安土問答」及び日蓮の「安土宗論實錄」日蓮の「安土問答記」等を参照する必要がある。

ある。又問答の勝敗は鬼も角、安土宗論が信長の殘忍性のため我國宗論史上空前絶後の大悲惨事を出したことは注意すべきである。

⑤元祿四寫 ⑥(龍大、二八二二・二二) (馬田行啓)

**安土宗論實錄** ①(日)A-tsu-shō-ron-jishū. ①一卷 ②存、大日本佛教全書第九七宗論叢書第一 ③日蓮說、底支記 ④天正七(A. D. 1579)

⑤我國宗論史上空前の悲惨事を出した信長の安土宗論(「安土宗論」参照)に、日蓮宗側の一人として終始これに關係し、且つ親しく宗論の席に列坐して負傷までした久遠院日蓮(前名日蓮)が、後日(恐らくは當年)其の顛末を語つて弟子成女(後の波壽院日光)に筆録させたものである。奥書によれば久しく京都の經師屋屋内匠方に疑難せられてゐたのを、寛保元年(A. D. 1741)に至つて體寫普及させたものである。此書は「安土宗論」が淨土宗の立場で書かれたに對し日蓮宗の立場に於て記したものであるから、宗論の勝敗並に其の前後の事情等全く正反對であるが、他書に比し遙に詳細を極め素朴な書き振りで眞相に近い感をも與へるところは本書の特色である。(馬田行啓)

**安土法難** ①(日)A-tsu-hō-nan. ①一卷 ②存 ③田中智學著 ④大正一一刊 ⑤東京天業民報社出版部

**安土問答** ①(日)A-tsu-mon-dō. ①一卷 ②存、大日本佛教全書第九七宗論叢書第一 ③因果

【ア】

居士記 ①天正七(A. D. 1579)

②安土宗論に於て南禪寺普秀長老と共に列者を命ぜられ、普秀長老が老耳であつたため唯一の列者として活躍した金花山の十界因果居士が、問答の次第を簡潔に記したもので「江州於安土」に「淨土宗」日蓮等論議之次第となる題の下に直に問答に入り、最後に「是ハ信長將軍之御内儀深キニ依テ左様ノ批判ヲスル也。全私ノ義ニアラズ。其座ニ在リシ人々皆以テ可知々々」と率直に記して居るところを見れば、安土問答が信長の私情によつて可なり無理を以て始終したことが推知せられ「安土宗論實錄」「安土問答記」等に記するところが全然の虚偽でないことが肯定せられる。尙ほ末尾に「于時天正七年五月廿七日巳午兩期也 筆者因果(花押)」とあるから、宗論の當日記したものであると見らる。(馬田行啓)

**安土問答記** ①(日)A-tsu-mon-dō-ki. ①一卷 ②存、大日本佛教全書第九七宗論叢書第一 ③日蓮(天文元)慶長三(A. D. 1535-1598)記 ④天正七(A. D. 1579)

⑤安土宗論に日蓮宗側の一人として宗論の席に列した佛心院日蓮(淨土院住持、頂妙寺前住)が、安土問答の由来及び顛末を記し、日蓮宗側が淨土宗の眞安を三度閉口させて問答に勝つたにも拘らず負けとなつた實狀を簡明に記したものである。尙ほ附録として、天正十年七月二十日、秀吉の命により民部卿法印 前田玄以の名を以て法華宗及び日蓮に與つた書翰、並に明治十五年日顯

記の日蓮宗に對する信長私憤の由来を載せてあるのは参考すべき資料である。

**安土問答諸註** ①(日)A-tsu-mon-dō-gō-shū. ②五卷 ③存 ④寶龜院(立大、A. O. 五・一七)文化二(龍大、二八二・一)正大、一五七・六一(京大、一・二六)文政二(各)大、宗大、五四四)

**足立抄** ①(日)A-tsu-tsu-shō. ②一巻

③貞忠(正治元)弘安一〇 A. D. 1199-1287)撰、淨土記 ④文永元(A. D. 1254)

⑤(参考) 淨土眞宗教典卷第三

**鴉鼻集** ①(日)A-ya-bi-shū. ②一巻

③存、五山文學全集第三 ④眞玄太白述

⑤鴉鼻集は建仁寺九十代太白金玄禪師の詩文の遺稿である。眞玄は特に四六辭體文を善くし、心田清澄の詩、惟有得履の文と共に俊才多き當時の五山禪僧中に於ける。上下二卷四十九項の下に其の想華を飾つて居る。上卷に學文十一、叙九、序三、疏一、銘二、文二十六。下卷に諸尊宿住山の祝賀の疏たる山門十六、諸山二十、江湖十三、遺書二、同門四、法華三、南無化疏一である。先師たる前南禪大持宗洞、義堂周信、春屋妙葩、絶海中津、以篤信仲等の諸師の名も見えて居る。(大久保保瑞)

**蛙鳴蟬吟集** ①(日)A-matō-gō-shū. ①一卷 ②存 ③(参考) 禪詩日鑑

**關加水作法** ①(日)A-kan-sui-shō. ①一卷

③(龍大、二八二二・二二) (馬田行啓)

**アインスタインか達磨か** ①(日)A-in-sh-ta-in-ka-daru-ka. ①一卷 ②存 ③井上秀天著 ④大正一一刊 ⑤東京實業館

**あき葉の箱物語** ①(日)A-ki-ha-no-hako-monogatari. ①一卷 ②存、國文東方佛教叢書第九

**あさじのみやげ** ①(日)A-sa-ji-no-miyage. ①一卷 ②存 ③辨才(寛延三)文政七 A. D. 1750-1824)撰 ④(京大、二六・小)

**あづまの操言** ①(日)A-uma-no-kari-goto. ①一卷 ②存 ③開華院法住(一)明治七 A. D. 1874)述 ④寫本(各)大、宗大、二六八・一一七)

**あづまの道の記** ①(日)A-uma-no-michi-no-ki. ①一卷 ②存、國文東方佛教叢書第七

**あみだかんきん抄** ①(日)A-mi-da-kan-kin-shō. ①一卷 ②存 ③龍大、二六八四・一一)

**哀泣經** ①(日)A-i-ki-kyō (支)A-i-ki-ching. ①一卷 ②存 ③(参考) 現存中

④失譯 ⑤(参考) 法華經第一、仁壽錄第二、壽壽錄第二、内典錄第六、武周錄第二、開元錄第一七、貞元錄第二七

⑥天平一二寫 ⑦寶龜院

**愛行比丘經** ①(日)A-i-gō-bi-ku-kyō (支)A-i-gō-pi-ku-ching. ①一卷 ②存 ③(参考) 出三藏記

第四、武周錄第一二、開元錄第一五、貞元錄第八

**愛敬天明正徳儀軌** ①(日)A-i-kyō-tem-angyō-shō-toku-gi-ki. (支)A-i-kyō-tem-ang-kyō-tem-toku-gi-ki. ①一卷 ②存、曼珠室利相愛敬通眞愛敬新加法之内

③唐金剛智(成亨二)開元三九 A. D. 671-741 一説開元三〇或開元一九說譯 ④寫本(京大、一六・二)

**愛生經** ①(日)A-i-shō-kyō (支)A-i-shō-ching. ①一卷 ②存、中阿含經第六〇(大正一 No. 26, 216)

**愛生經** ①(日)A-i-shō-kyō. ①一卷 ②存、現代意譯根本佛教叢書第三 ③鳥越道顯撰

**愛身比丘經** ①(日)A-i-shin-bi-ku-kyō (支)A-i-shin-pi-ku-ching. ①一卷 ②存 ③(参考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第一五、貞元錄第八

④存、大日本佛教全書第九七宗論叢書第一 ⑤承授(元久二)弘安五 A. D. 1205-1283)撰 ⑥文永一一實錄寫(高六、寄、一・六六)

⑦寛延三子方寫(高六、寄、一・六六)

**愛染王聞書** ①(日)A-i-zen-ō-kyō. ①一卷 ②存 ③寫本(高六、寄、特一九・一・六六)

**愛染王口決** ①(日)A-i-zen-ō-ku-ketsu. ①一卷 ②存 ③教海記 ④寶曆八寫 ⑤(高六、一・六六)

**愛染王口傳** ①(日)A-i-zen-ō-ku-den. ①一卷 ②存 ③寶曆記 ④元元



















も云ふ。(参考) 出三級記第五、三寶  
紀第一、内典録第四、武周録第一、開元  
録第一八、貞元録第二八  
**安曇神呪經** 〇(日)Am-ko-jin-shu  
kyō(文)Am-ko-jin-shū-chō-chōng、安曇  
呪經 〇(参考) 法華録第四、仁  
壽録第四、新華録第四  
**安曇虎角上人傳** 〇(日)Am-ko-  
ko-kaku-shō-an-den 〇(参考) 〇一巻 〇存 〇  
〔参考〕 大日本佛教全書續刊決定書目  
**安曇開山勅諭正眼智禪師年  
譜** 〇(日)Am-ko-kai-san-chōku-shi-  
shō-gō-dai-kan-ten-jō-nem-pū 〇一巻  
〇存 〇正嘉禎 〇(参考) 大日本佛教全  
書續刊決定書目  
**安曇故郷詩** 〇(日)Am-ko-kyō-  
shi(文)Am-yan-ko-ishi-kyō-shi 〇一巻  
〇宋有載(一建中靖國元年A. D. 1101)作  
〔参考〕 淨土依憑經論章疏目錄  
**安曇寺御文書** 〇(日)Am-ji-ji-  
tami-anshū 〇一巻 〇存 〇文政二寫  
本(大)  
**安曇寺本尊緣起** 〇(日)Am-ji-ji-  
hon-zon-en-ki 〇一巻 〇存 〇寫本  
(大)  
**安曇抄** 〇(日)Am-yō-shō 〇八巻  
〇存、大正八四・一九 No. 2686 〇平安  
朝末期  
①この書は安曇神樂淨土に關する經典章疏  
より特殊なる問題を出し、それに關し要文  
を抄出編纂したもので、文章は問答體で、  
日本淨土教の研究には極めて必要なるもの

で、法然上人が淨土開宗の基本である選擇  
集を撰述せらるる以前のものと、源信の往  
生要集、永觀の往生十因より稍後に撰せら  
れたもので、抄出されて居る章疏は、古き  
は三部の大經より往生論及び論註を始とし  
て、往生要集往生十因に終つて居る。著者  
は不明であるが、淨土依憑經論章疏には  
三本ありて、一は安曇抄十巻字數(宇治  
大納言隆國)とあり、二は安曇抄三巻心儀  
開聖(日本人)とあり、三は安曇抄六巻良慶  
(教月母依(白河院)傳之)とありて明で  
ないが、今の本より察すると、天台教學に  
立脚して淨土教を解釋したものであるから、  
當て三井寺の長史たりし良慶の撰と見  
るのが最も適當であると考へらる。  
一部の大綱は天台教學に立脚して淨土の  
諸問題を解釋せるもので、唐朝以來の各宗  
諸家の淨土信仰研究に對し詳細なる批判を  
して居る。内容は第一巻は七問ありて、一  
安曇淨土四種佛土中何耶、二安曇爲上品淨  
土當如何、三安曇界去此量何、三十六想  
觀中華座觀依正中何、五阿彌陀佛身量何、  
六阿彌陀人觀何相耶、七不具足或行生安曇  
耶とあり、第二巻は八問ありて、一九品往  
生者爲利物皆來安曇耶、二九品往生者得度  
云何、三神樂說三乘教耶、四有不發大乘心  
生彼土者耶、五安曇界有入無餘涅槃三乘  
耶、六安曇界有通二乘耶、七進法生神  
樂耶、八九品人品位何とあり、第三巻は七  
問ありて、一九品往生人皆有彌陀來迎耶、  
二九品往生人運會實如何、三生神樂有不  
得香花供養菩薩耶、四普泰國與神樂同異云

何、五安曇兜率往生難易云何、六十念成就  
等及別時意趣文、七解慢國相云何とあり、  
第四巻は十四問ありて、一三寶九品相攝  
文、二胎生者三寶九品相攝文、三九品生人  
所經時節彼此文、四九品生人花鬘時節文、  
五九品生人所生時節定不文、六九品生人天  
位數相文、七上品上生人上中善化佛授  
手文、八經名佛名號多少文、九下品三生誠  
罪多少文、十諸往生人皆攝盡九品往生耶、  
十一佛身道樹不同文、十二六道衆生共生神  
樂耶、十三諸往生人皆阿耨跋致數、十四小黃  
根文とあり、第五巻は十七問ありて、一安  
曇世界主女人耶、二凡夫未斷惑者生神樂  
耶、三阿彌陀成佛已來劫數文、四阿彌陀之  
本願多少、五安曇淨土菩薩摩訶多少、六觀  
譯文、七觀經觀經等說前後後之文、八經終  
十念何等耶、九說無先世結緣者臨終十念成  
就耶、十佛光明大小、十一生疑惑者生神樂  
耶、十二往生人定業轉不文、十三九品往生  
人皆生池水中耶、十四神樂八部等有無文、  
十五神樂四王乃至淨居有勝耶、十六安曇  
地相之文、十七神樂國有苦耶とあり、第  
六巻は二十二問、一觀行位階目目見佛  
事、二四種佛土淨穢之文、三化樂淨土遣人  
化章提來自往文、四自然淨土成阿那含  
文、五教令正觀爲除疑心等文、六十六想觀  
減罪多少之文、七諸佛如來是法界平等文、  
八善觀二觀差別之文、九觀音勢至圓光不同  
文、十安曇菩薩摩訶光明不同文、十一生諸  
佛前得無生忍文、十二觀手相文、十三退善  
提摩開生安曇經觀劫數至劫地耶、十四中品  
生出家文、十五少時心力勝身事、十六往

安曇者必爲生蓮華中爲當如何、十七九品往  
生人蓮華未敷之前開闢觀音說法耶、十八  
阿耨跋致文、十九實莊嚴土者只是安曇之  
文、二十生蓮華內者胎前淨化中如何、二十一  
安曇中人依正俱無勝劣耶、二十二安曇世  
界輪日夜劫數耶とあり、第七巻は十問あり  
て、一安曇世界有無色天耶、二神樂衆生清  
且供養佛耶、三法藏比丘發心者何位發心  
耶、四何故名阿彌陀耶、五胎生者虛宮殿開  
闢先世罪過耶、六神樂國有實食想耶、七神  
樂聖衆光明大小何、八釋迦後百設開闢陀  
教流布者指何時耶、九樂師經所說八菩薩者  
淨瑠璃淨土菩薩歟爲當神樂菩薩歟、十神樂  
池水中蓮華量云何とありて、平安鎌倉時代  
に流行した説義問答に用ふる資料たる要文  
を抄出したもので、思想内容としては當代  
に見ることの出来ない科學的研究に依るも  
のである。この抄本(東大寺藏)に流傳し  
て居つて、世に現れなかつたが、大正大藏  
經の編纂せらるゝにあつて特に許を得て  
入藏したものである。  
〔参考〕 淨土依憑經論章疏目錄 〇卷末  
に安曇花押ありて年紀不明平安末期の寫本  
歟 〇東大寺圖書館 (稿本寫本)  
**安曇抄** 〇(日)Am-yō-shō 〇十巻  
〇一巻 〇宇治大納言隆國(寛弘元一承應元  
A. D. 1101-1177)抄 〇(参考) 淨土依  
憑經論章疏目錄  
**安曇抄** 〇(日)Am-yō-shō 〇六  
巻 〇良慶述 〇(参考) 淨土依憑經論章  
疏目錄

**安曇抄** 〇(日)Am-yō-shō 〇三巻  
〇〇心儀述 〇(参考) 淨土依憑經論  
章疏目錄  
**安曇抄** 〇(日)Am-yō-shō 〇三巻  
〇三巻 〇存 〇印刷(永享七一永  
正一六 A. D. 1435-1519)述  
①此の書は神樂安曇抄又は單に安曇抄とも  
呼ばれ、龍樹の神樂阿衍論十巻の中、第十  
巻四日下已下に於ける主として淨土思想に  
關しての論議決擇を述記したものであつ  
て、總じて十六の問答が述べられてゐる。  
(一)勤勞向勝不退門之事、本項目の下に  
於ては神樂阿衍論中に於ける「勤勞向勝不  
退門」の中の不退について説義論議し、云  
ふ處の不退とは處不退であるか又位不退で  
あるかの問答決擇である。(二)信下品人修  
理觀樂之事、神樂本論所引の經文に「若觀  
彼佛眞如法身」とある。それに就いて今此  
の觀門は四信下品の人の所修觀門なりや如  
何の論議決擇である。(三)神樂世界報身報  
土之事、神樂所引の經文に「若人專念西方  
神樂世界」とある。爾らば此の安曇世界は  
報身報土なりや否や如何との問答である。  
(四)唯勸西方往生之事、神樂本論に「隨願  
得生他方佛土」とあるが、此の「他方佛土」  
とは果して西方神樂淨土のみに限るの意を  
取る可きや否やの問答である。(五)西方淨  
土三界所攝歟之事、神樂所引の經文に「西  
方神樂世界」とある。爾らば今此の世界は  
三界有攝の所攝とやせんや否やに就いての  
決擇である。(以上卷上)  
(六)華開見佛歟之事、神樂本論に「得十

信位前四信心」とある。爾らば今此の四信  
下品の人、西方淨土に生ぜし時に見佛開法  
すと云ふ可きや否やの決擇である。(七)三  
惡趣往生神樂之事、神樂本論に「得往生妙  
樂土」とある。爾らば三惡趣の衆生同く往  
生淨土の義ありと云ふ可きや否やに就いて  
の決擇である。(八)所修善根無明所發歟之  
事、神樂本論所引の經文に「所修善根」とあ  
る。爾らば今此の善根は無明所發なりと云  
ふ可きや否やに就いての決擇である。(九)  
念佛因緣稱名數之事、神樂本論に「專意念  
佛因緣」とある。爾らば云ふ所の念佛とは果  
して稱名念佛であるや否やの問答決擇であ  
る。(一〇)淨土受生四生所攝歟之事、神樂  
本論所引の經文に「則得往生」とある。爾ら  
ば淨土の受生は胎化等の四生の所攝なりと  
云ふ可きや否やの問答である。(以上卷中)  
(一一)西方神樂唯樂無苦之事、神樂本論  
所引の經文に「西方神樂世界」とある。爾ら  
ば云ふ所の神樂世界は唯樂のみにして苦は  
無しと云ふ可きや否やを記してゐる。(一)  
二)西方神樂通淨穢二土歟之事、神樂本論  
所引の經文に「西方神樂世界」とある。爾ら  
ば此の神樂世界は淨穢の二土に通ずと云ふ  
可きや否やに就いての決擇である。(一三)  
神樂本論所引の經文に「生彼世界即得往生」  
とある。爾らば唯小行に住し、大乘心を發  
さぬ人も神樂に生ずる義ありと云ふ可きや  
否やを記してゐる。(一四)諸諸大衆人往生  
歟之事、神樂本論所引の經文に「生彼世界  
即得往生」とある。爾らば大乘を講講する  
人も亦西方淨土に往生すと云ふ可きや否や

を記してゐる。(一五)往生神樂後修念佛三  
昧歟之事、神樂本論所引の經文に「彼世界  
即得往生」とある。爾らば彼土に往生して  
後、念佛勤修の功を運んで正定位に住す  
と云ふ可きや否やについての問答である。  
(一六)若觀彼佛指上阿彌陀之事、神樂本論  
所引の經文に「若觀彼佛眞如法身」とある。  
爾らば云ふ所の彼の佛とは上の阿彌陀佛を  
指すと云ふ可きや否やに就いての論議決擇  
である。(以上卷下)  
蓋し本書は編纂の命を奉じて著はしたと  
言はれる類編の廣範圍に依つて述べられた  
ものであらう。  
①明曆三刊(各六、宗大・二四〇一)(大、二  
六八一・六八八)正、大、一四二・七一(古寫本  
(大、寄、一・五六) (坂田光全)  
**安曇淨業章** 〇(日)Am-yō-jō-  
shō 〇一巻 〇〇澄然(仁治元一  
享元 A. D. 1240-1312)撰 〇(参考) 諸宗  
章疏錄第二  
**安曇身土說** 〇(日)Am-yō-shin  
tō-shō 〇一巻 〇存、眞宗全書第  
五一六 〇(参考) 正徳五一寛政元 A. D. 1715  
-1789)述 〇(参考) 寛享四(A. D. 1747)

①本書は安曇淨土の佛身佛土について、其  
義旨多岐にして幼學惑ひ易きものあればと  
りて、古來諸師の見解を擧げ、眞宗の所立よ  
り之を批判し論定せるもの。書中章を立つ  
ること五門、即ち、一叙三諸師解、二陳宗所  
立、三明三界攝不、四述三所感因、五問答決  
議にして、初の諸師の解には、淨影、天台、  
高詳、慈恩、至相、元曉、賢首、龜才、元

【ア】

が西方道徳多く兜率性生を易行とし西方性生を難行とするのに対し、群疑論には十二勝劣、西方要法には十界を建立し、西域には小乘多く此法未だ興らず、故に隨順往生經に十方世界無差別で安樂如足難難なしと云ふ。然れども、安樂には一に無有過難有女人、二に他力往生願力強きが故にと云ひ、以下難易二道を毘婆沙論に依りて明し、更に七種難易、十二優劣を出し、最後に此二處往生並是佛勸請隨人所願依之修行、並得往生と會通し、更に自義をのべ、極樂生而多時不見兜率具諸法相須臾即過聖と云ひ知足を稱揚して居る。又善哉成胎經に億千萬衆時有一人生阿彌陀國とありて、安樂は難生であらうとの間を出し、群疑論を以て會通し、次に開淨道數と極樂との不同、及び安樂易往なるも往生人なしと云ふは如何と、又嘉祥の觀經疏より菩提心爲業主凡夫心狹無廣濟心何淨土と問を出し、縱横に安樂を破し、淨影慈恩は兜率を欣ひ、西方には難往なり、後淨道に開く師資の儀に背き佛經の旨を失ふ、淨論を止めて自業を専らにす、難易優劣を比較推求して知足の求むべきものなることを教へられたるものである。

- ① 安樂院行事 ①(日) An-raku-in-ryō-shi ②存 群書類聚第一五
- ③ 安樂院布令 ①(日) An-raku-in-fu-kyō ②存 ③(日) 高木(大) 寄・(一) 一〇
- ④ 安樂院置空大和尚行業記 ①(日) An-raku-in-zaikō-ōshō-gōkō-gyōgi ②存 ③(参考) 大日本佛教全書檢訂確定書目
- ⑤ 安樂記 ①(日) An-raku-ki ②缺

- ⑥ 宋代思溪神煥造 ⑦(参考) 請宗章疏錄第二
- ⑧ 安樂行 ①(日) An-raku-kyō ②法華經安樂行義 ③一巻 ④存 ⑤(三三・一) 陳慧思(延昌四)大建九 A. D. 515-577) 述 ⑥(参考) 請宗章疏錄第一、傳教大師將來台州錄
- ⑨ 安樂行註 ①(日) An-raku-kyō-ju ②一巻 ③缺 ④宋祖暹有錄(一建中增國元 A. D. 1101) 述 ⑤(参考) 請宗章疏錄第二
- ⑩ 安樂行道轉經願生淨土法事讚 ①(日) An-raku-kyō-dō-ten-kyō-ten-kyō-gwan-shō-jō-do-kyō-shō-an ②(支) An-to-shing-tao-shih-san 轉經行道願生淨土法事讚 法事讚 ③二巻 ④存 ⑤(大正四七・四二四 No. 1979) 中編 11・2・1 ⑥唐善導(大業九年永德 11 A. D. 613-68. 1 説無相 11 年六九) 述
- ⑪ 安樂行私記 ①(日) An-raku-kyō-shi ②三巻 ③缺 ④圓仁(延暦一三一貞觀六 A. D. 791-864) 述 ⑤(参考) 山家圓德撰述諸日集卷上
- ⑫ 安樂集 ①(日) An-raku-shū ②(支) An-to-shi ③二巻 ④存 ⑤(大正四七・四 No. 1938) 中編 11・11・11 淨土宗全書第一、眞宗聖教大全卷中、七祖聖教卷上 ⑥唐善導(陳天高三)唐貞觀一九 A. D. 639-645) 撰
- ⑬ 末法の初運に出世したる道徳師が、自己求道の體験よりして得たる信念を告白し

たる書にして、一代佛敎を聖淨二門に分列し、末法の考辨は、偏に西方の彌陀佛に歸して安樂世界に往生すべきことを勸めたるものである。而して本書は觀無量壽經の隨文作釋にあらずれども、その經意を釋闡することにつとめ、此が爲に多くの經論を引用したものである。故に或時は文中、今此觀經と云ひ又此經等とある。巻頭に此安樂集一部之内總有二十二大門、皆引經論證明勸信求往とあるのは此の意を表明したものである。此集の引文、四十四部、律一部、論八部、釋が三部、總じて五十六部の多きに亙つてゐる。以つて釋師の廣博なる知識が知られる。傳に依るに、釋師は四十八歳の時、所謂涅槃の廣業さしおきて、初て淨土門に入り、それより八十四歳の進法まで三十七年、觀經を講ずること二百遍と云ふ。さればその講説の妙義が蒐録され、以て勸信求往の本書となりて出たものと謂ふてよい。故に古來の學者は本書を以て、總てかの釋師の高弟終南山の善導大師が觀經に疏を作り、具に經の支義文句を釋し給ひしその基礎となりしもの、洵言すれば、四結疏の基礎となりしものが本書であると謂ふや、その意は而して釋師が本書を作るとし、その意は一面破邪顯正、以て當時の敎界に對して淨土往生の眞意を開發する事に努められたものである。即ちその出世當時は、恰も三論の嘉祥大師が弘法隆盛の頃であつて、かの無相大師の敎意を布かれた時であつたから此が爲めそれを因執する解見者は、淨土住

【ア】

生を以て有相の見に墮するものと爲し、願生淨土の敎義を記しめ否難するに至つた。而して又當時一方には、通論家別時意の異計があつて、觀經の十念往生の經説を以て別時意と偏執した、その結果西方往生の道が一時は殆んど閉塞されむとした有様である。加之當時敎界の亂象と稱せらるる淨影、天台、嘉祥等の如き、各々觀經の講説を爲し、その著を敎界に送り出してみたと雖も、此等の諸師は各々其本宗を弘布するの傍、淨土の經旨を説くものであるから、その釋義は自ら聖道門の宗域を脱することが出来ず、願生淨土の敎義上、體・教・身・土の批判に於いて誤解甚多く、遺體のものありしが爲めに、道統はその非義を認め、その眞意開發につとめられたのである。勿論この破邪の大成は、次に來る善導大師に依りて、その事業は完成し所謂古今楷定の妙判が、その著、四結疏の上に開展せられたものであるが、この大事業に先鞭を附け、善導大師のこの大事業の基礎とまで成りしものは、師道統の安樂集の釋義と謂はなければならぬ。その勳功は淨土敎義史上決して没却すべからざることである。

多天)を指すのである。この極樂世界も都率天も本來我等の胸中に存することを明す書であるからこの名稱を用ひたのである。眞言宗の往生思想は十方淨土往生で、何れの世界でも行者に縁のある諸尊の淨土に往生するのであるが、鎌倉期頃から特に極樂往生と都率往生の願生者が多くなつた。そこで著者は本書に於て密敎の立脚地から特にこの極樂と都率とが共に自己胸中に本來具せる功德であることを説明したのである。僅に三頁の短篇ではあるが注意すべき書である。(小田慈舟)

- ① 安樂院行事 ①(日) An-raku-in-ryō-shi ②存 群書類聚第一五
- ③ 安樂院布令 ①(日) An-raku-in-fu-kyō ②存 ③(日) 高木(大) 寄・(一) 一〇
- ④ 安樂院置空大和尚行業記 ①(日) An-raku-in-zaikō-ōshō-gōkō-gyōgi ②存 ③(参考) 大日本佛教全書檢訂確定書目
- ⑤ 安樂記 ①(日) An-raku-ki ②缺
- ⑥ 宋代思溪神煥造 ⑦(参考) 請宗章疏錄第二
- ⑧ 安樂行 ①(日) An-raku-kyō ②法華經安樂行義 ③一巻 ④存 ⑤(三三・一) 陳慧思(延昌四)大建九 A. D. 515-577) 述 ⑥(参考) 請宗章疏錄第一、傳教大師將來台州錄
- ⑨ 安樂行註 ①(日) An-raku-kyō-ju ②一巻 ③缺 ④宋祖暹有錄(一建中增國元 A. D. 1101) 述 ⑤(参考) 請宗章疏錄第二
- ⑩ 安樂行道轉經願生淨土法事讚 ①(日) An-raku-kyō-dō-ten-kyō-ten-kyō-gwan-shō-jō-do-kyō-shō-an ②(支) An-to-shing-tao-shih-san 轉經行道願生淨土法事讚 法事讚 ③二巻 ④存 ⑤(大正四七・四二四 No. 1979) 中編 11・2・1 ⑥唐善導(大業九年永德 11 A. D. 613-68. 1 説無相 11 年六九) 述
- ⑪ 安樂行私記 ①(日) An-raku-kyō-shi ②三巻 ③缺 ④圓仁(延暦一三一貞觀六 A. D. 791-864) 述 ⑤(参考) 山家圓德撰述諸日集卷上
- ⑫ 安樂集 ①(日) An-raku-shū ②(支) An-to-shi ③二巻 ④存 ⑤(大正四七・四 No. 1938) 中編 11・11・11 淨土宗全書第一、眞宗聖教大全卷中、七祖聖教卷上 ⑥唐善導(陳天高三)唐貞觀一九 A. D. 639-645) 撰
- ⑬ 末法の初運に出世したる道徳師が、自己求道の體験よりして得たる信念を告白し

大門に三巻の料簡を以て初に發菩提心を明し、安樂淨土に往生せんと願ふ意、即ち往生淨土の安心を示し、第二巻の料簡は主として破邪を示したるもので、此の中に所謂大乘無相の偏執、別時意料簡等が出てゐるのである。次に第三大門は四巻の料簡あり、第一は龍樹の難易二道の判釋を擧げて而も自力他力の分齊を示して、佛の大願業力の乘すべきことを示し、第二は時勢の大小不同を明し、第三が正しく聖淨二門の決判を下し、大集經、大經、觀經、小經に依りて一代佛敎中自ら二門の通塞ある所以を示し、第四は以上を總結して勸信求往したるものであつて、此の第三門に於いて正しく一部の本意が開闢されたものと見るべきである。而して第四大門以下の九門は、上の第三大門の列に基き更に種々に之を分別して勸信求往せしものに外ならぬ。





分に至るまで全部に涉りて難解の字句を解説し、異義あるものは問答論議して原本の深義を説明したものである。

①(参考) 淨土真宗教典第二 ②寛永一八刊(谷大、宗大、一四八)慶安二刊(京大、日大、一六六)明暦二刊(正太、一五三)三、一、一五三、三四)安政二刊(谷大、宗大、一五三)正太、一五三、三七)正太、一五三、三〇)鶴子各法然院本(京大、一、二六、一、七)

**安樂集私記見聞** ①(日)An-raku-sha-shi-kikenshon ②二卷 ③存、淨土宗全書第一 ④良榮(康永元—正長元)A. D. 1342—1425)著

⑤本書は主として良忠の私記を註釋したものであるが、私記の解説未盡と思考するものに對しては更に補補して遺漏なきを期し、私記が解説を省略したる本文に對しては一々本文を擧げて詳釋す。故に私記の補遺とも云ふべきもので良榮の越前見聞が現はれて居る。私記と併讀して一層精義を知悉し得る要書である。

淨土宗全書に收むる本書には撰載なきも蓮門經緯、真宗教典志に良榮作とある。

⑥慶安二刊(正太、一五三、四一)寛大、二六八、一、三二〇)谷大、宗大、七八)寛文二刊(正太、一五三、一四〇)立大、A. D. 三〇、二九) (寛、五、五、左、一一)

**安樂集試解録** ①(日)An-raku-sha-shi-gekoku ②三卷 ③存 ④宗瀛(天保六—明治二七)A. D. 1835—1897)著 ⑤寛本(龍大)

**安樂集待講記** ①(日)An-raku-sha-shi-kaiki ②二卷 ③存 ④黙了記 ⑤寛本(龍大、一三二五、一五)

**安樂集述聞** ①(日)An-raku-sha-jishu-mon ②五卷 ③存、真宗全書第一 ④善意(元祿一〇—安永四)A. D. 1697—1773)著

⑤本願寺派の學匠若輩、法義等に師事せる著者が主として信條の説を承けて本文全部を忠實に講説せるものである。

⑥寛本(龍大、一三二五、一七)谷大、長保、一一)

**安樂集述要** ①(日)An-raku-sha-jishu-yo ②一巻 ③存 ④鈴木法理著 ⑤明治四〇(A. D. 1907) ⑥(龍大、研眞)帝(三二四、四一一)

**安樂集正錯録** ①(日)An-raku-sha-shi-sakurakoku ②一巻 ③存、真宗全書第二 ④眞宗秘録 ⑤道粹(正徳三—明和元)A. D. 1713—1764)著 ⑥寛保三(A. D. 1743)

⑦安樂集の本文の諸語を正し、文字の誤謬を改めんとし、集の上巻に五則、下巻に七則の十二箇所を校訂してある。本書は本願寺派第三代能化若輩が考定し、第四代能化法義が補筆し、その門人道粹の錄次する所である。

⑧延享三刊(龍大、一三二五、一八)正太、一五三、一三二四)谷大、宗大、三四三)寛本(龍大、一五〇、一八〇) (高千穂敬業)

**安樂集鈔** ①(日)An-raku-sha-shi-sho ②五巻 ③存 ④龍榮(元祿八—A. D. 1695—)著 ⑤(参考) 大日本佛教全書續刊

**安樂集新鈔** ①(日)An-raku-sha-shi-shin-sho ②五巻 ③存 ④貞淳(貞享二—A. D. 1685)著 ⑤(参考) 淨土真宗教典第三 ⑥天和三刊 ⑦龍大、二六八、一一)谷大、宗大、七六)

**安樂集壬寅録** ①(日)An-raku-sha-jinshin-roku ②五巻 ③存 ④雲華院大舍(安永二—嘉永三)A. D. 1773—1850)著 ⑤(参考) 眞宗大系刊行決定書目

**安樂集壬申記** ①(日)An-raku-sha-jinshin-ki ②六巻 ③存 ④四業院宣明(寛延二—文政四)A. D. 1749—1821)著 ⑤(参考) 眞宗大系刊行決定書目

**安樂集隨聞記** ①(日)An-raku-sha-jishu-mon-ki ②三巻 ③存 ④玉振(延享二—文化一)A. D. 1745—1814)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、一〇〇)

**安樂集隨聞記** ①(日)An-raku-sha-jishu-mon-ki ②三巻 ③存 ④道粹(一寶曆年間)A. D. 1731—1763)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、一九)

**安樂集隨聞記** ①(日)An-raku-sha-jishu-mon-ki ②三巻 ③存 ④龍榮(一慶應元)A. D. 1805—)著 ⑥寛本(谷大、宗大、二〇〇、七)

**安樂集藻鑑** ①(日)An-raku-sha-sho-kan ②七巻 ③存 ④谷大)

**安樂集大意** ①(日)An-raku-sha-shi-tai ②一巻 ③存 ④道粹(安永二—文政七)A. D. 1771—1824)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、一一)

**安樂集大意** ①(日)An-raku-sha-shi-tai ②一巻 ③存 ④松島善慶(文化三—明治一九)A. D. 1806—1886)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、二四)

**安樂集聽記** ①(日)An-raku-sha-shi-ki ②一巻 ③存 ④性海(明和二—天保九)A. D. 1765—1838)著 ⑥寛本(龍大、(京考))

**安樂集聽記** ①(日)An-raku-sha-shi-ki ②三巻 ③存 ④雲華院大舍(安永二—嘉永三)A. D. 1773—1850)著 ⑥天保一三)谷大(龍大、研眞)

**安樂集聽記** ①(日)An-raku-sha-shi-ki ②七巻 ③存 ④松島善慶(文化三—明治一九)A. D. 1806—1886)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、二二)

**安樂集通入記** ①(日)An-raku-sha-shi-kyo ②四巻 ③存 ④勢州達 ⑤(参考) 淨土真宗教典第二 ⑥寛本(龍大、一三二五、二九)

**安樂集丁亥記** ①(日)An-raku-sha-shi-tei-gai-ki ②八巻 ③存 ④細川千景(天保五—明治三〇)A. D. 1834—1897)著 ⑥明治二〇)谷大、宗大、一六一、一一)

**安樂集導訪録** ①(日)An-raku-sha-shi-do-hoku ②一巻 ③存 ④唯淨達 ⑥寛本(龍大、一三二五、三〇)

**安樂集日講** ①(日)An-raku-sha-shi-nichiro ②三巻 ③存 ④武田行忠(文化一四—明治二二)A. D. 1817—1890)著 ⑥寛本(谷大、宗四、四〇)

**安樂集日纂** ①(日)An-raku-sha-shi-nichizuan ②一巻 ③存 ④貞淳(貞享二—A. D. 1685)著 ⑥(参考) 眞宗全書刊行決定書目

**安樂集** ①(日)An-raku-sha-shi ②六巻或三巻 ③存、眞宗全書第十二 ④慧琳(正徳五—寛政元)A. D. 1715—1789)著 ⑤延享三刊(A. D. 1746)

⑥此書は理綱院慧琳師が道粹の安樂集を解説せしものにて、延享三年その都里勢州の自坊にて脱稿し、翌四年夏大法學寮に於て講説せる講案に併せしものである。文前に來由、旨歸、題號の三門を解明し、本文に入つては首尾一貫して細に科段を分ち、理當精確なる註解を與ふ。而も一本の跋語に自聖淨境、内懷疑懼、深仰佛祖之冥安、講買一過學恨集中所、後經不、能詳考、且科文簡、古點示未、尙、改定、他有、暇須、披讀、焉とあり、以て師が謙虛研學の態度を見えし。されど其卷首に眞西良忠の私記、西山貞準の新鈔及び龍谷如空の論語に對し、批評する所あるを表すれば、本書は惠然師の動信義と深勵師の講義との中間にあつて、大法學寮の基礎を築ける著者の安樂集に對する見方を窺知するを得しむるものである。

⑦寛本(谷大、宗大、七)龍大、一三二五、三二)

**安樂集備忘** ①(日)An-raku-sha-bi-moku ②三巻 ③存 ④美廣(明和元—天保九)A. D. 1764—1838)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、三三)

**安樂集備忘録** ①(日)An-raku-sha-bi-moku-roku ②八巻 ③存 ④伊井智量(一—明治四四)A. D. 1911—)記 ⑥寛本(龍大、一三二五、三四)

**安樂集筆記** ①(日)An-raku-sha-shi-hon ②一巻 ③存 ④貞淳(貞享二—A. D. 1685)著 ⑥(参考) 眞宗全書刊行決定書目

**安樂集待講記** ①(日)An-raku-sha-shi-kaiki ②二巻 ③存 ④黙了記 ⑤寛本(龍大、一三二五、一五)

**安樂集述聞** ①(日)An-raku-sha-jishu-mon ②五巻 ③存、眞宗全書第一 ④善意(元祿一〇—安永四)A. D. 1697—1773)著

⑤本願寺派の學匠若輩、法義等に師事せる著者が主として信條の説を承けて本文全部を忠實に講説せるものである。

⑥寛本(龍大、一三二五、一七)谷大、長保、一一)

**安樂集述要** ①(日)An-raku-sha-jishu-yo ②一巻 ③存 ④鈴木法理著 ⑤明治四〇(A. D. 1907) ⑥(龍大、研眞)帝(三二四、四一一)

**安樂集正錯録** ①(日)An-raku-sha-shi-sakurakoku ②一巻 ③存、眞宗全書第二 ④眞宗秘録 ⑤道粹(正徳三—明和元)A. D. 1713—1764)著 ⑥寛保三(A. D. 1743)

⑦安樂集の本文の諸語を正し、文字の誤謬を改めんとし、集の上巻に五則、下巻に七則の十二箇所を校訂してある。本書は本願寺派第三代能化若輩が考定し、第四代能化法義が補筆し、その門人道粹の錄次する所である。

⑧延享三刊(龍大、一三二五、一八)正太、一五三、一三二四)谷大、宗大、三四三)寛本(龍大、一五〇、一八〇) (高千穂敬業)

**安樂集鈔** ①(日)An-raku-sha-shi-sho ②五巻 ③存 ④龍榮(元祿八—A. D. 1695—)著 ⑤(参考) 大日本佛教全書續刊

**安樂集新鈔** ①(日)An-raku-sha-shi-shin-sho ②五巻 ③存 ④貞淳(貞享二—A. D. 1685)著 ⑤(参考) 淨土真宗教典第三 ⑥天和三刊 ⑦龍大、二六八、一一)谷大、宗大、七六)

**安樂集壬寅録** ①(日)An-raku-sha-jinshin-roku ②五巻 ③存 ④雲華院大舍(安永二—嘉永三)A. D. 1773—1850)著 ⑤(参考) 眞宗大系刊行決定書目

**安樂集壬申記** ①(日)An-raku-sha-jinshin-ki ②六巻 ③存 ④四業院宣明(寛延二—文政四)A. D. 1749—1821)著 ⑤(参考) 眞宗大系刊行決定書目

**安樂集隨聞記** ①(日)An-raku-sha-jishu-mon-ki ②三巻 ③存 ④玉振(延享二—文化一)A. D. 1745—1814)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、一〇〇)

**安樂集隨聞記** ①(日)An-raku-sha-jishu-mon-ki ②三巻 ③存 ④道粹(一寶曆年間)A. D. 1731—1763)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、一九)

**安樂集隨聞記** ①(日)An-raku-sha-jishu-mon-ki ②三巻 ③存 ④龍榮(一慶應元)A. D. 1805—)著 ⑥寛本(谷大、宗大、二〇〇、七)

**安樂集藻鑑** ①(日)An-raku-sha-sho-kan ②七巻 ③存 ④谷大)

**安樂集大意** ①(日)An-raku-sha-shi-tai ②一巻 ③存 ④道粹(安永二—文政七)A. D. 1771—1824)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、一一)

**安樂集大意** ①(日)An-raku-sha-shi-tai ②一巻 ③存 ④松島善慶(文化三—明治一九)A. D. 1806—1886)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、二四)

**安樂集聽記** ①(日)An-raku-sha-shi-ki ②一巻 ③存 ④性海(明和二—天保九)A. D. 1765—1838)著 ⑥寛本(龍大、(京考))

**安樂集聽記** ①(日)An-raku-sha-shi-ki ②三巻 ③存 ④雲華院大舍(安永二—嘉永三)A. D. 1773—1850)著 ⑥天保一三)谷大(龍大、研眞)

**安樂集聽記** ①(日)An-raku-sha-shi-ki ②七巻 ③存 ④松島善慶(文化三—明治一九)A. D. 1806—1886)著 ⑥寛本(龍大、一三二五、二二)

**安樂集通入記** ①(日)An-raku-sha-shi-kyo ②四巻 ③存 ④勢州達 ⑤(参考) 淨土真宗教典第二 ⑥寛本(龍大、一三二五、二九)

**安樂集丁亥記** ①(日)An-raku-sha-shi-tei-gai-ki ②八巻 ③存 ④細川千景(天保五—明治三〇)A. D. 1834—1897)著 ⑥明治二〇)谷大、宗大、一六一、一一)

**安樂集導訪録** ①(日)An-raku-sha-shi-do-hoku ②一巻 ③存 ④唯淨達 ⑥寛本(龍大、一三二五、三〇)

**安樂集日講** ①(日)An-raku-sha-shi-nichiro ②三巻 ③存 ④武田行忠(文化一四—明治二二)A. D. 1817—1890)著 ⑥寛本(谷大、宗四、四〇)

**安樂集日纂** ①(日)An-raku-sha-shi-nichizuan ②一巻 ③存 ④貞淳(貞享二—A. D. 1685)著 ⑥(参考) 眞宗全書刊行決定書目









[4]

三A. D. 1826-1890)記 ①寫本(龍大, 一一三・二八)  
**易行品丁巳記** ①(日)I-gyo-bon-tai-shi-ki. ①卷 ②存 ③藤井宜真(文化八)明治三三A. D. 1811-1890)著 ④寫本(龍大)

**易行品筆記** ①(日)I-gyo-bon-hiki. ①卷 ②存 ③未詳(寫本)一寫本一〇A. D. 1742-1798(說寫本)一〇, 年八五)著 ④寫本(龍大, 一一三・二九)

**易行品筆記** ①(日)I-gyo-bon-hiki. ①卷 ②存 ③力精(文化一四)明治一三A. D. 1817-1879)著 ④龍大(研眞)

**易行品風航記** ①(日)I-gyo-bon-fu-kou-ki. ①卷 ②存 ③順口針水(文化五)明治三六A. D. 1808-1893)著 ④寫本(龍大, 一一三・三〇)

**易行品辨錄** ①(日)I-gyo-bon-han-ki. ①卷 ②存 ③兼經(享保一一)文化六A. D. 1727-1809)著 ④寫本(龍大, 一一三・三二)

**易行品分科** ①(日)I-gyo-bon-bun-kwa. ①卷 ②存 ③圓環(元祿九)享保一〇A. D. 1696-1730)著 ④寫本三刊(龍大, 一一三・三三)

**易行品分科** ①(日)I-gyo-bon-bun-kwa. ①卷 ②存 ③七里恒順(元保六)明治三三A. D. 1835-1900)著 ④寫本(龍大, 一一三・三三)

**易行品丙午記** ①(日)I-gyo-bon-hei-go-ki. ①卷 ②存 ③一蓮院秀存(天明八)一萬源元 A. D. 1788-1860)著 ④

〔參考〕 眞宗大系刊行豫定書目  
**易行品丙午錄** ①(日)I-gyo-bon-hei-go-roku. ①卷 ②存 ③足利義山(文政七)明治四三A. D. 1831-1910)著 ④明治三九刊 ⑤龍大(研眞)(谷大, 宗洋, 三五四)

**易行品法管鼓** ①(日)I-gyo-bon-ho-pu-ko. ①卷 ②存 ③僧辯(享保八一)天明三A. D. 1723-1783)著 ④寫本(龍大)

**易行品戊子錄** ①(日)I-gyo-bon-bo-shi-roku. ①卷 ②存 ③調雲集(文政二)明治三三A. D. 1819-1899)著 ④明治二刊 ⑤寫本(谷大, 宗大, 一五五六)

**易行品本統記** ①(日)I-gyo-bon-hon-tsu-ki. ①卷 ②存 ③香雲院澄玄(天明七)嘉永四A. D. 1787-1851)著 ④天保七寫 ⑤(谷大)

**易行品彌陀拿提耳錄** ①(日)I-gyo-bon-mi-da-sho-tei-er-roku. ①卷 ②存 ③義經(仁孝)代A. D. 1817-(846)著 ④寫本(龍大, 研眞)

**易行品毛譜錄** ①(日)I-gyo-bon-mo-to-roku. ①卷 ②存 ③大業(寶曆元)一文政六A. D. 1751-1823)記 ④寫本(龍大, 一一三・三四)

**易行品聞記** ①(日)I-gyo-bon-mon-ki. ①卷 ②存 ③印持(一)明治三三A. D. 1870)著 ④寫本(龍大, 一一三・三五)

**易行品聞錄** ①(日)I-gyo-bon-mon-roku. ①卷 ②存 ③雲華院大合(安永二)嘉永三A. D. 1773-1850)著 ④(谷大)

**易行品要津錄** ①(日)I-gyo-bon-yo-tsu-roku. ①卷 ②存 ③長阿含經第十七卷の抄出 ④(參考) 出三藏記第四, 法經錄第三, 仁壽錄第三, 辨善錄第三, 武則錄第七, 開元錄第一六, 貞元錄第二六

**重提希夫人** ①(日)I-dai-ke-ban-nin. ①卷 ②存, 佛教婦人叢書第三〇(一一・八)

**重提得忍義** ①(日)I-dai-toke-nia-gi. ①卷 ②存 ③展善(寶曆四)一文政二A. D. 1751-1819)著 ④寫本(龍大, 一五〇・一八)

**重提得忍辨** ①(日)I-dai-toke-nia-ben. ①卷 ②存, 眞宗小部集 ③僧辯(享保八一)天明三A. D. 1723-1783)著

**異阿毘曇五法** ①(日)I-a-i-to-don-go-ho. (支)I-a-i-to-don-go-ho. ①卷 ②存 ③齋子良造(參考) 仁壽錄第五

**異安心史** ①(日)I-an-jin-shi. ①卷 ②存 ③中島覺亮著 ④明治四五刊 ⑤(谷大, 宗洋, 二八七)(龍大, 研眞)(正大, 一六一・四)(京大, 一・二一・五) ⑥東京無我山房

**異安心難破書** ①(日)I-an-jin-nam-pa-sho. ①卷 ②存 ③寫本(龍大)

**異安心之種々** ①(日)I-an-jin-no-sho-jyu. ①卷 ②存 ③中井玄道著 ④昭和廿(A. D. 1932) ⑤眞宗學研究所

yo-shu-roku. ③卷 ④存 ⑤寂蓮述  
 ⑥明和六(A. D. 1769) ⑦明和七刊 ⑧龍大, 一一三・二六(谷大, 宗大, 六八六)

**易行品略記** ①(日)I-gyo-bon-ryaku-ki. ①卷 ②存 ③天保一二寫 ④(谷大, 宗大, 一一〇五)

**易行品略解** ①(日)I-gyo-bon-ryaku-ge. ①卷 ②存 ③四月(文政元)明治三五A. D. 1818-1902)著 ④明治二九刊(正大, 一一三四・二八) ⑤寫本(龍大, 一一三・三七) ⑥大分版本屋次郎

**易行品略釋** ①(日)I-gyo-bon-ryaku-shaku. ①卷 ②存 ③中臣俊敏(文化七)明治三三A. D. 1819-1888)著 ④明治一三刊 ⑤龍大(一一三・三九)

**易行品略述** ①(日)I-gyo-bon-ryaku-jutsu. ①卷 ②存 ③湯美契錄(天保一一)明治三九A. D. 1840-1906)著 ④明治四二刊 ⑤龍大(研眞)

**易行品論題科釋義** ①(日)I-gyo-bon-ron-dai-ka-shaku-gi. ①卷 ②存 ③利井辨妙(天保六)大正三A. D. 1835-1914)著 ④大正五刊 ⑤龍大(研眞)

**易辨語** ①(日)I-han-goku. 大光慈舟(參考) ②卷 ③存 ④單孝等編 ⑤文化二刊 ⑥(龍大)

**易辨語** ①(日)I-han-goku. ①卷 ②存 ③陽春主語(參考) ④(龍大)

**怡山願文注解** ①(日)I-an-gwan-ban-ka-gi. ①卷 ②存 ③相燈元法(延享)頃A. D. 1744-1747)註 ④(龍大)

**怡山然禪師願文疏** ①(日)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-sho. (支)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-sho. ①卷 ②存 ③海門疏 ④元祿五刊 ⑤(龍大)

**怡山然禪師願文註** ①(日)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-shu. (支)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-shu. ①卷 ②存 ③水月註 ④(參考) ⑤(日)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-shu. (支)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-shu. ①卷 ②存 ③(參考) ④(龍大)

**怡山發願文口曉** ①(日)I-an-ho-su-gwan-mon-ku-yen. ①卷 ②存 ③(參考) ④(龍大)

**怡山發願文墓註** ①(日)I-an-ho-su-gwan-mon-san-ki. (支)I-an-ho-su-gwan-mon-san-ki. ①卷 ②存 ③(參考) ④(龍大)

**怡山禮佛發願文** ①(日)I-an-ho-su-ho-su-gwan-mon. (支)I-an-ho-su-ho-su-gwan-mon. ①卷 ②存 ③立大A. D. 1740

**威儀經** ①(支)I-ai-gyo. (支)Wei-ling-gi. ①卷 ②存 ③(參考) ④出三藏記第四, 法經錄第五, 仁壽錄第五, 辨善錄

[4]

第五, 三寶紀第五, 內典錄第二, 武則錄第一〇, 開元錄第二, 貞元錄第三

**威儀略述** ①(日)I-ai-gyo-ryaku-jutsu. ①卷 ②存 ③航海(天和三)寶曆一一A. D. 1683-1761)著 ④寶曆四刊 ⑤龍大, 一一三・一(谷大, 龍大, 二六一〇)(普, 七・八・左・三四)(正大, 一八八・五二・一五三)

**威德神通妙覺了大薩埵御緣起** ①(日)I-toke-jin-sho-myō-aku-ki. ①卷 ②存 ③小島高勝著 ④昭和七刊 ⑤東京法北莊書院

**威德陀羅尼神呪經** ①(日)I-toke-da-ra-ai-jin-shu-kyō. (支)Wei-te-to-lo-ai-shin-sho-kyō. ①卷 ②存 ③宋代失譯 ④(參考) 出三藏記第五, 法經錄第二, 仁壽錄第三, 辨善錄第三, 武則錄第一二, 開元錄第五, 貞元錄第八

**重葺日用** ①(日)I-an-ai-chi-ya. ①卷 ②存 ③周建述 ④(參考) 禪語目錄

**重葺舟判斷天台四教譯文** ①(日)I-kyō-shū-han-dan-ten-dai-shi-kyō-jō-mon. (支)Wei-han-chou-p'an-tan-tien-tai-sat-chiao-cheng-gwa. ①卷 ②存 ③(參考) 傳教大師將來台州錄

**重之香傳** ①(日)I-shi-shū-den. (支)Wei-chih-chin-chuan. ①卷 ②存 ③(參考) 傳教大師將來越州錄

**重提希子月夜問夫人經** ①(日)I-dai-ke-shi-gwatsu-ya-mom-bon-nin-gyo. (支)Wei-shi-hai-tat-yah-yeh-sen-

to-ken-chang. ①卷 ②存 ③長阿含經第十七卷の抄出 ④(參考) 出三藏記第四, 法經錄第三, 仁壽錄第三, 辨善錄第三, 武則錄第七, 開元錄第一六, 貞元錄第二六

**重提希夫人** ①(日)I-dai-ke-ban-nin. ①卷 ②存, 佛教婦人叢書第三〇(一一・八)

**重提得忍義** ①(日)I-dai-toke-nia-gi. ①卷 ②存 ③展善(寶曆四)一文政二A. D. 1751-1819)著 ④寫本(龍大, 一五〇・一八)

**重提得忍辨** ①(日)I-dai-toke-nia-ben. ①卷 ②存, 眞宗小部集 ③僧辯(享保八一)天明三A. D. 1723-1783)著

**異阿毘曇五法** ①(日)I-a-i-to-don-go-ho. (支)I-a-i-to-don-go-ho. ①卷 ②存 ③齋子良造(參考) 仁壽錄第五

**異安心史** ①(日)I-an-jin-shi. ①卷 ②存 ③中島覺亮著 ④明治四五刊 ⑤(谷大, 宗洋, 二八七)(龍大, 研眞)(正大, 一六一・四)(京大, 一・二一・五) ⑥東京無我山房

**異安心難破書** ①(日)I-an-jin-nam-pa-sho. ①卷 ②存 ③寫本(龍大)

**異安心之種々** ①(日)I-an-jin-no-sho-jyu. ①卷 ②存 ③中井玄道著 ④昭和廿(A. D. 1932) ⑤眞宗學研究所

yo-shu-roku. ③卷 ④存 ⑤寂蓮述  
 ⑥明和六(A. D. 1769) ⑦明和七刊 ⑧龍大, 一一三・二六(谷大, 宗大, 六八六)

**易行品略記** ①(日)I-gyo-bon-ryaku-ki. ①卷 ②存 ③天保一二寫 ④(谷大, 宗大, 一一〇五)

**易行品略解** ①(日)I-gyo-bon-ryaku-ge. ①卷 ②存 ③四月(文政元)明治三五A. D. 1818-1902)著 ④明治二九刊(正大, 一一三四・二八) ⑤寫本(龍大, 一一三・三七) ⑥大分版本屋次郎

**易行品略釋** ①(日)I-gyo-bon-ryaku-shaku. ①卷 ②存 ③中臣俊敏(文化七)明治三三A. D. 1819-1888)著 ④明治一三刊 ⑤龍大(一一三・三九)

**易行品略述** ①(日)I-gyo-bon-ryaku-jutsu. ①卷 ②存 ③湯美契錄(天保一一)明治三九A. D. 1840-1906)著 ④明治四二刊 ⑤龍大(研眞)

**易行品論題科釋義** ①(日)I-gyo-bon-ron-dai-ka-shaku-gi. ①卷 ②存 ③利井辨妙(天保六)大正三A. D. 1835-1914)著 ④大正五刊 ⑤龍大(研眞)

**易辨語** ①(日)I-han-goku. 大光慈舟(參考) ②卷 ③存 ④單孝等編 ⑤文化二刊 ⑥(龍大)

**易辨語** ①(日)I-han-goku. ①卷 ②存 ③陽春主語(參考) ④(龍大)

**怡山願文注解** ①(日)I-an-gwan-ban-ka-gi. ①卷 ②存 ③相燈元法(延享)頃A. D. 1744-1747)註 ④(龍大)

**怡山然禪師願文疏** ①(日)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-sho. (支)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-sho. ①卷 ②存 ③海門疏 ④元祿五刊 ⑤(龍大)

**怡山然禪師願文註** ①(日)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-shu. (支)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-shu. ①卷 ②存 ③水月註 ④(參考) ⑤(日)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-shu. (支)I-an-nen-sen-shi-gwan-mon-shu. ①卷 ②存 ③(參考) ④(龍大)

**怡山發願文口曉** ①(日)I-an-ho-su-gwan-mon-ku-yen. ①卷 ②存 ③(參考) ④(龍大)

**怡山發願文墓註** ①(日)I-an-ho-su-gwan-mon-san-ki. (支)I-an-ho-su-gwan-mon-san-ki. ①卷 ②存 ③(參考) ④(龍大)

**怡山禮佛發願文** ①(日)I-an-ho-su-ho-su-gwan-mon. (支)I-an-ho-su-ho-su-gwan-mon. ①卷 ②存 ③立大A. D. 1740

**威儀經** ①(支)I-ai-gyo. (支)Wei-ling-gi. ①卷 ②存 ③(參考) ④出三藏記第四, 法經錄第五, 仁壽錄第五, 辨善錄

真宗一統の中に(一)惡無礙(二)別相傳(三)誓名異(四)有無念(五)自力(六)期臨終等の異計あることを明す、されば本書は十六卷本の第一巻として之を巻首にあげるより見て、著者が異義についての體面と看做し得べきである。

①自筆本一三三部(谷大、宗甲・一七)寫本(谷大、宗大、二〇六)寫本文刊(谷大、宗大、三〇九)寫本文刊(龍大、二六五、四)天和三刊(龍大、研佛)大正六刊(龍大、一〇三・二九)

異義蘭菊集 ①(日)I-tan-ku-sha-sha. ①一巻 ②缺 ③(参考) ④(参考) 本朝台閣圖書部書目、山家祖傳遺書目集卷下

異教對話 ①(日)I-kyō-tai-gwa. 四明術 ①一巻 ②存 ③阿彌得圖(文政九)明治三九 A. D. 1856-1906)著 ④明治三〇刊 ⑤(龍大、二八四・一)

異解試評 ①(日)I-ge-shi-hyō. ①二巻 ②存 ③香山院龍圖(寛政一一)明治一八 A. D. 1800-1865)著 ④寫本(谷大、宗大、二五〇)

異計小部集 ①(日)I-kei-shō-bu-shū. ①一巻 ②存 ③(龍大、研眞) ④(参考)

異國日記 ①(日)I-koku-ni-ki. ①一巻 ②存 ③以心崇傳(永祿一一)寛永一〇 A. D. 1569-1633)記 ④(参考) 詳新日録

異國來翰誌 ①(日)I-koku-rai-kan-shi. ①一巻 ②存 ③西笑承兌(天文一七一)慶長一一 A. D. 1545-1607)記 ④(参考)

考) 評語目録

異軌決疑篇 ①(日)I-sha-keizan-shi. ①二巻 ②存 ③真宗全書第五六 ④光遠院惠聖(正保元)享保六 A. D. 1611-1721)述 ⑤元祿八(A. D. 1695)

本書は他家より真宗に對する評語及び自門中に於ける謬解を破破せんが爲に著述せられたもので、其異軌の主張と其非理なる點を的示し、疑難を評決して、人をして方に迷ふことならしめた。故に自ら序して是故集評諸家評語一辨決一洗之疑懐、異軌之類在此、亦因釋一除同門龜學之邪謬決疑之名述、此と言ふ、本書の大綱以て知るべし。而して上巻は他家初稿にして此(一)一念混疑(二)邪見無意(三)三心一心(四)佛法一體(五)平生業成(六)否相變(七)報分念傳(八)捨諸難行(九)不禮釋尊(一〇)非分惡行の十條につき、一々他家よりの謬解を擧げて之を解答し、中巻には自門謬解を釋除して此に(一)自受他受(二)往生成佛(三)信行異論(此有二十六ヶ條)(四)文句法門(五)作法執異(六)追加雜論の六條を出す。而して本書は元と其次次に示すが如く上中下三巻に編を分つと雖も、其中上中二巻を存して、下巻は之を附けり。爾るに下巻は其次次に、東西辨正と掲げて其下に表裏問答と金輪記との二部の書目を出してある。

想ふに此二部は本派の訓の著述ありて、東西兩派の分離につき其論を論じ、力を盡して本派の正確なることを主張せるものである。されば大派の立場として何等か之に對する主張がなければならぬ、然るに本

書に之を附けるより推想すれば、恐らく惠空師は之を著述せんとしたるも果さずして終つたのであらうか。而して表裏問答、金輪記、及び大派側の主張を代表する制述集は、何れも真宗全書第五六に載せてある。

異出義足經 ①(日)I-shutsu-gi-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出九偏經 ①(日)I-shutsu-ku-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出四諦經 ①(日)I-shutsu-shi-tai-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出十善十惡經 ①(日)I-shutsu-jū-shan-jū-aku-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出孫陀耶致經 ①(日)I-shutsu-sun-ta-ya-ji-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出般若三昧經 ①(日)I-shutsu-han-ya-san-mai-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異成實論 ①(日)I-ichō-jitsu-ron. ①一巻 ②(参考) ③仁壽錄第四

異信異欲經 ①(日)I-shin-ik-yō. ①一巻 ②(参考) ③仁壽錄第十四卷の抄出

異賊調伏記 ①(日)I-soku-chō-ki. ①一巻 ②(参考) ③仁壽錄第十四卷の抄出

異象經 ①(日)I-zō-kyō. ①一巻 ②(参考) ③仁壽錄第十四卷の抄出

異尊 ①(日)I-son. ①一巻 ②(参考) ③仁壽錄第十四卷の抄出

異章抄 ①(日)I-shō-shō. ①一巻 ②(参考) ③仁壽錄第十四卷の抄出

異出本經 ①(日)I-shutsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異處七處三觀經 ①(日)I-sho-shichi-sho-san-kan-gwan-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出菩薩本經 ①(日)I-shutsu-ho-satsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出寶藏經 ①(日)I-shutsu-hō-zō-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

失譯(参考) ①三藏記第四、武周錄第一二

異出比丘威儀經 ①(日)I-shutsu-bi-ku-i-ki-kyō. ①一巻 ②(参考) ③法華經第五、仁壽錄第五、武周錄第一二

異出普門經 ①(日)I-shutsu-fu-mon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出菩薩本起經 ①(日)I-shutsu-ho-satsu-hon-gi-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出摩訶結經 ①(日)I-shi-mo-ka-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異比丘尼戒本 ①(日)I-hi-ku-ni-kei-hon. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心鈔 ①(日)I-tai-dō-shin-shō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心錄 ①(日)I-tai-dō-shin-roku. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心正 ①(日)I-tai-dō-shin-shō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心本 ①(日)I-tai-dō-shin-hon. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異體同心結經 ①(日)I-tai-dō-shin-ketsu-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

である。布髮受記の本より筆を起し、下生・誕生・立太子・四門出遊・受胎・胎成・降魔・成道・文殊龍王降魔・五比丘得度・三迦葉濟度に至るまでを簡略に叙述してある。説光如来を供奉せんとした時に、菩薩に七枚の蓮華を興(た)女子の名を羅夷とし、太子の婦を羅夷とし、魔王の名を羅夷として居るが、そのまま同一なるは、吳支謙譯太子瑞應本起經である。唯本經が聖母の年を二十とせるに反して、瑞應經が十七とせる、本經よりも彼の方が委しき差はあるが、同本異譯たるを察せしめる。

同本異譯たるを察せしめる。

異出菩薩本經 ①(日)I-shutsu-ho-satsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出寶藏經 ①(日)I-shutsu-hō-zō-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出本經 ①(日)I-shutsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異處七處三觀經 ①(日)I-sho-shichi-sho-san-kan-gwan-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出菩薩本經 ①(日)I-shutsu-ho-satsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出寶藏經 ①(日)I-shutsu-hō-zō-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出本經 ①(日)I-shutsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異處七處三觀經 ①(日)I-sho-shichi-sho-san-kan-gwan-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出菩薩本經 ①(日)I-shutsu-ho-satsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出寶藏經 ①(日)I-shutsu-hō-zō-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出本經 ①(日)I-shutsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異處七處三觀經 ①(日)I-sho-shichi-sho-san-kan-gwan-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出菩薩本經 ①(日)I-shutsu-ho-satsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出寶藏經 ①(日)I-shutsu-hō-zō-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出本經 ①(日)I-shutsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異處七處三觀經 ①(日)I-sho-shichi-sho-san-kan-gwan-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出菩薩本經 ①(日)I-shutsu-ho-satsu-hon-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異出寶藏經 ①(日)I-shutsu-hō-zō-kyō. ①一巻 ②(参考) ③三藏記第四、武周錄第一二

異部見文述記

開元錄第二、貞元錄第四  
異部見文述記 ①(日)I-bu-  
ken-mun-jak-ki-oke-gaki. ②1卷  
天海(天文五—寛永三)O.A.D.1535—1645  
撰(参考)山家祖師撰述諸目録集下

異部宗論

異部宗論 ①(日)I-bu-sha-ri-  
ron.(支)I-pu-tsung-tsun-ron.(梵)Samas-  
yabhedoparacana-cakra. (藏)shub-tugs  
kyi-bye-brag bhad-pahi bhokhor-ho. 宗論  
①1卷 ②存 大正四九・一五・No. 2031  
縮本四二・五・四、北950頁、南950頁、元992  
頁、明北1279頁、清1279頁、羅984頁、天987  
頁、指940頁、法959頁、至1435頁、明南1434  
頁、No. 1286 ③支(隋)仁壽二—唐麟德元  
A.D.602—656)譯 ④唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑤唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑥唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑦唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑧唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑨唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑩唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑪唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑫唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑬唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑭唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑮唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑯唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑰唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑱唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑲唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ⑳唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉑唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉒唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉓唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉔唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉕唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉖唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉗唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉘唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉙唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉚唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉛唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉜唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉝唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉞唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㉟唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊱唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊲唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊳唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊴唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊵唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊶唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊷唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊸唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊹唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊺唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊻唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊼唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊽唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊾唐龍朔二(C.A.D.632)  
A.D.602—656)譯 ㊿唐龍朔二(C.A.D.632)

て他に求むることは出来ぬ、此の意味に於  
て極めて大切な論書である。本書は支那に  
前後三譯された。第一は十八部論(又は分別  
部論と云ふ)、第二は部執異論、第三は異部宗  
論である。この三本は同本異譯だと云ふ。  
十八部論は唐代三寶記(縮本六)に諸譯と  
してあるが、これは誤りで開元錄(縮本四)  
には失譯人名とす。此の十八部論の「他部  
論」の譯に「秦言上座部」と云ふ、これに依り  
て、この十八部論は秦時代に撰譯されたこ  
とが解る。内容を觀るに初めに並の僧伽婆  
羅の譯出した文殊問經下卷分別部品を出  
し、本文に「羅什法師集」と云ふ句がある。  
自ら法師と云ふのも可笑しいが、古藏の三  
論支論に羅什の分別部論と云ふ文句もある  
から、先づ十八部論は羅什三藏の譯譯と見  
て差支へない。部執異論は眞諦三藏の譯譯  
であつて三藏自ら撰譯論十卷を作り、  
一時は支那日本に於て盛んに讀まれたやう  
である。異部宗論論は支婁迦讖の譯譯で、  
此の三譯の中で最も完備したものと稱さ  
れて居る。本書は漢譯の外に西藏譯本があ  
る、西紀一八六〇年ツレツフこれを譯し、  
西紀一九二六年ツレツフこれを譯し、  
分つて居る。本書の内容は大體に於て二大部門  
に分つて出来る。其の第一部門は部論の教理  
の分製を述べ、其の第二部門は部論の教理  
を本宗同義、末宗異義に互りて述べたもの  
である。但し其の分製史に於ても、教理大  
系に於ても一切有部を中心として述べて  
居る。

基(参考) 譯經圖記第四、開元錄第八、  
貞元錄第一  
異部宗論論題 ①(日)I-bu-sha-ri-  
ron-ron-ki-dai. ②存、開元大藏經論部第  
一三 ③木村春賢(明治四一—昭和五)A.D.  
1881—1930)述 ④大正一〇刊  
異部宗論論記 ①(日)I-bu-sha-ri-  
ron-ki.(支)I-pu-tsung-tsun-ron-ki. 異  
部宗論論記、異部宗論論記 ①1卷 ②  
存、中檢一・八三・三 ③唐寶基(貞觀六—永  
淳元)A.D.632—656)述 ④(参考)奈良  
朝現在一切經藏目錄2034  
異部宗論論講義 ①(日)I-bu-sha-ri-  
ron-kyō-gi. ①1卷 ②存 ③寺島光法述  
明治三八刊 ④正、大、一九五・四七(各  
大、餘詳七)⑤(龍大、研佛)  
異部宗論論講義 ①(日)I-bu-sha-ri-  
ron-kyō-gi. ①1卷 ②存 ③舟橋水成  
撰六—永淳元(A.D.632—656)述  
④本書は異部宗論論の註にして、慈恩大  
師實基自ら造論の由を述べ、「昔江表の陳  
代三藏家依、已に其の本を譯し、部執異論  
と名く、諸の貝葉を譯し、彼の撰る所  
を校ふるに、或は梵文に異ひ、理本義に  
違ふことあり、故に悟る所のものは増々こ  
れを演べ、述ふ所のものは悉くこれを考  
す」と云つて居る。眞諦三藏の部執異論の誤  
りを訂正して、唐の支婁迦讖に於て、重ねて此  
の本を譯し、異部宗論論と名く。寶基は其  
の譯場に列し、「續に續ひ、旨を受け、述記  
を編纂す、しかば此の述記は支婁三藏の  
旨を受けて作られたものであつて異部宗論  
論の註疏として唯一の權威である。この述  
記出づるや、眞諦三藏の部執異論論これに  
照例せられ、今や散逸して其の完本を得る  
ことは出来ぬ。慈恩の述記に「家依法師は疏  
十卷を成して諸の事義を叙ぶ、委實を盡す  
といへども、學者其の要文を傳へ、或は廣  
延を遺することあり、今は但だ其の大旨を  
詳にし、其の本文を釋す、舊と異なるものは  
互に細にして言ひ、舊と異なるものは期か  
極限を陳ぶ」と云ふ。たとへば舊文であつても  
現存せざるは遺憾である。現在に於て部執  
異論論は僅かに三論支論、同檢論抄、  
同譯要、義林章等に引用されたもの外、  
知ること出来ぬ。

異部宗論論記 ①(日)I-bu-  
sha-ri-ron-jak-ki-oke-gaki. ①1卷  
②存 ③(一)寛政三(A.D.1791)述  
④(二)寛政三(A.D.1791)述  
⑤(三)寛政三(A.D.1791)述  
⑥(四)寛政三(A.D.1791)述  
⑦(五)寛政三(A.D.1791)述  
⑧(六)寛政三(A.D.1791)述  
⑨(七)寛政三(A.D.1791)述  
⑩(八)寛政三(A.D.1791)述  
⑪(九)寛政三(A.D.1791)述  
⑫(十)寛政三(A.D.1791)述  
⑬(十一)寛政三(A.D.1791)述  
⑭(十二)寛政三(A.D.1791)述  
⑮(十三)寛政三(A.D.1791)述  
⑯(十四)寛政三(A.D.1791)述  
⑰(十五)寛政三(A.D.1791)述  
⑱(十六)寛政三(A.D.1791)述  
⑲(十七)寛政三(A.D.1791)述  
⑳(十八)寛政三(A.D.1791)述  
㉑(十九)寛政三(A.D.1791)述  
㉒(二十)寛政三(A.D.1791)述  
㉓(二十一)寛政三(A.D.1791)述  
㉔(二十二)寛政三(A.D.1791)述  
㉕(二十三)寛政三(A.D.1791)述  
㉖(二十四)寛政三(A.D.1791)述  
㉗(二十五)寛政三(A.D.1791)述  
㉘(二十六)寛政三(A.D.1791)述  
㉙(二十七)寛政三(A.D.1791)述  
㉚(二十八)寛政三(A.D.1791)述  
㉛(二十九)寛政三(A.D.1791)述  
㉜(三十)寛政三(A.D.1791)述  
㉝(三十一)寛政三(A.D.1791)述  
㉞(三十二)寛政三(A.D.1791)述  
㉟(三十三)寛政三(A.D.1791)述  
㊱(三十四)寛政三(A.D.1791)述  
㊲(三十五)寛政三(A.D.1791)述  
㊳(三十六)寛政三(A.D.1791)述  
㊴(三十七)寛政三(A.D.1791)述  
㊵(三十八)寛政三(A.D.1791)述  
㊶(三十九)寛政三(A.D.1791)述  
㊷(四十)寛政三(A.D.1791)述  
㊸(四十一)寛政三(A.D.1791)述  
㊹(四十二)寛政三(A.D.1791)述  
㊺(四十三)寛政三(A.D.1791)述  
㊻(四十四)寛政三(A.D.1791)述  
㊼(四十五)寛政三(A.D.1791)述  
㊽(四十六)寛政三(A.D.1791)述  
㊾(四十七)寛政三(A.D.1791)述  
㊿(四十八)寛政三(A.D.1791)述

異部宗論論記 ①(日)I-bu-  
sha-ri-ron-jak-ki-oke-gaki. ①1卷  
②存 ③(一)寛政三(A.D.1791)述  
④(二)寛政三(A.D.1791)述  
⑤(三)寛政三(A.D.1791)述  
⑥(四)寛政三(A.D.1791)述  
⑦(五)寛政三(A.D.1791)述  
⑧(六)寛政三(A.D.1791)述  
⑨(七)寛政三(A.D.1791)述  
⑩(八)寛政三(A.D.1791)述  
⑪(九)寛政三(A.D.1791)述  
⑫(十)寛政三(A.D.1791)述  
⑬(十一)寛政三(A.D.1791)述  
⑭(十二)寛政三(A.D.1791)述  
⑮(十三)寛政三(A.D.1791)述  
⑯(十四)寛政三(A.D.1791)述  
⑰(十五)寛政三(A.D.1791)述  
⑱(十六)寛政三(A.D.1791)述  
⑲(十七)寛政三(A.D.1791)述  
⑳(十八)寛政三(A.D.1791)述  
㉑(十九)寛政三(A.D.1791)述  
㉒(二十)寛政三(A.D.1791)述  
㉓(二十一)寛政三(A.D.1791)述  
㉔(二十二)寛政三(A.D.1791)述  
㉕(二十三)寛政三(A.D.1791)述  
㉖(二十四)寛政三(A.D.1791)述  
㉗(二十五)寛政三(A.D.1791)述  
㉘(二十六)寛政三(A.D.1791)述  
㉙(二十七)寛政三(A.D.1791)述  
㉚(二十八)寛政三(A.D.1791)述  
㉛(二十九)寛政三(A.D.1791)述  
㉜(三十)寛政三(A.D.1791)述  
㉝(三十一)寛政三(A.D.1791)述  
㉞(三十二)寛政三(A.D.1791)述  
㉟(三十三)寛政三(A.D.1791)述  
㊱(三十四)寛政三(A.D.1791)述  
㊲(三十五)寛政三(A.D.1791)述  
㊳(三十六)寛政三(A.D.1791)述  
㊴(三十七)寛政三(A.D.1791)述  
㊵(三十八)寛政三(A.D.1791)述  
㊶(三十九)寛政三(A.D.1791)述  
㊷(四十)寛政三(A.D.1791)述  
㊸(四十一)寛政三(A.D.1791)述  
㊹(四十二)寛政三(A.D.1791)述  
㊺(四十三)寛政三(A.D.1791)述  
㊻(四十四)寛政三(A.D.1791)述  
㊼(四十五)寛政三(A.D.1791)述  
㊽(四十六)寛政三(A.D.1791)述  
㊾(四十七)寛政三(A.D.1791)述  
㊿(四十八)寛政三(A.D.1791)述

異部宗論論記 ①(日)I-bu-  
sha-ri-ron-jak-ki-oke-gaki. ①1卷  
②存 ③(一)寛政三(A.D.1791)述  
④(二)寛政三(A.D.1791)述  
⑤(三)寛政三(A.D.1791)述  
⑥(四)寛政三(A.D.1791)述  
⑦(五)寛政三(A.D.1791)述  
⑧(六)寛政三(A.D.1791)述  
⑨(七)寛政三(A.D.1791)述  
⑩(八)寛政三(A.D.1791)述  
⑪(九)寛政三(A.D.1791)述  
⑫(十)寛政三(A.D.1791)述  
⑬(十一)寛政三(A.D.1791)述  
⑭(十二)寛政三(A.D.1791)述  
⑮(十三)寛政三(A.D.1791)述  
⑯(十四)寛政三(A.D.1791)述  
⑰(十五)寛政三(A.D.1791)述  
⑱(十六)寛政三(A.D.1791)述  
⑲(十七)寛政三(A.D.1791)述  
⑳(十八)寛政三(A.D.1791)述  
㉑(十九)寛政三(A.D.1791)述  
㉒(二十)寛政三(A.D.1791)述  
㉓(二十一)寛政三(A.D.1791)述  
㉔(二十二)寛政三(A.D.1791)述  
㉕(二十三)寛政三(A.D.1791)述  
㉖(二十四)寛政三(A.D.1791)述  
㉗(二十五)寛政三(A.D.1791)述  
㉘(二十六)寛政三(A.D.1791)述  
㉙(二十七)寛政三(A.D.1791)述  
㉚(二十八)寛政三(A.D.1791)述  
㉛(二十九)寛政三(A.D.1791)述  
㉜(三十)寛政三(A.D.1791)述  
㉝(三十一)寛政三(A.D.1791)述  
㉞(三十二)寛政三(A.D.1791)述  
㉟(三十三)寛政三(A.D.1791)述  
㊱(三十四)寛政三(A.D.1791)述  
㊲(三十五)寛政三(A.D.1791)述  
㊳(三十六)寛政三(A.D.1791)述  
㊴(三十七)寛政三(A.D.1791)述  
㊵(三十八)寛政三(A.D.1791)述  
㊶(三十九)寛政三(A.D.1791)述  
㊷(四十)寛政三(A.D.1791)述  
㊸(四十一)寛政三(A.D.1791)述  
㊹(四十二)寛政三(A.D.1791)述  
㊺(四十三)寛政三(A.D.1791)述  
㊻(四十四)寛政三(A.D.1791)述  
㊼(四十五)寛政三(A.D.1791)述  
㊽(四十六)寛政三(A.D.1791)述  
㊾(四十七)寛政三(A.D.1791)述  
㊿(四十八)寛政三(A.D.1791)述

異部宗論論記 ①(日)I-bu-  
sha-ri-ron-jak-ki-oke-gaki. ①1卷  
②存 ③(一)寛政三(A.D.1791)述  
④(二)寛政三(A.D.1791)述  
⑤(三)寛政三(A.D.1791)述  
⑥(四)寛政三(A.D.1791)述  
⑦(五)寛政三(A.D.1791)述  
⑧(六)寛政三(A.D.1791)述  
⑨(七)寛政三(A.D.1791)述  
⑩(八)寛政三(A.D.1791)述  
⑪(九)寛政三(A.D.1791)述  
⑫(十)寛政三(A.D.1791)述  
⑬(十一)寛政三(A.D.1791)述  
⑭(十二)寛政三(A.D.1791)述  
⑮(十三)寛政三(A.D.1791)述  
⑯(十四)寛政三(A.D.1791)述  
⑰(十五)寛政三(A.D.1791)述  
⑱(十六)寛政三(A.D.1791)述  
⑲(十七)寛政三(A.D.1791)述  
⑳(十八)寛政三(A.D.1791)述  
㉑(十九)寛政三(A.D.1791)述  
㉒(二十)寛政三(A.D.1791)述  
㉓(二十一)寛政三(A.D.1791)述  
㉔(二十二)寛政三(A.D.1791)述  
㉕(二十三)寛政三(A.D.1791)述  
㉖(二十四)寛政三(A.D.1791)述  
㉗(二十五)寛政三(A.D.1791)述  
㉘(二十六)寛政三(A.D.1791)述  
㉙(二十七)寛政三(A.D.1791)述  
㉚(二十八)寛政三(A.D.1791)述  
㉛(二十九)寛政三(A.D.1791)述  
㉜(三十)寛政三(A.D.1791)述  
㉝(三十一)寛政三(A.D.1791)述  
㉞(三十二)寛政三(A.D.1791)述  
㉟(三十三)寛政三(A.D.1791)述  
㊱(三十四)寛政三(A.D.1791)述  
㊲(三十五)寛政三(A.D.1791)述  
㊳(三十六)寛政三(A.D.1791)述  
㊴(三十七)寛政三(A.D.1791)述  
㊵(三十八)寛政三(A.D.1791)述  
㊶(三十九)寛政三(A.D.1791)述  
㊷(四十)寛政三(A.D.1791)述  
㊸(四十一)寛政三(A.D.1791)述  
㊹(四十二)寛政三(A.D.1791)述  
㊺(四十三)寛政三(A.D.1791)述  
㊻(四十四)寛政三(A.D.1791)述  
㊼(四十五)寛政三(A.D.1791)述  
㊽(四十六)寛政三(A.D.1791)述  
㊾(四十七)寛政三(A.D.1791)述  
㊿(四十八)寛政三(A.D.1791)述









[4]

(支) *Ji-pi-lung-wang-yeh-pao-yin-yin* an-ching. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

元録第一六、貞元録第二六

**イエスカ親賢か** ① (日) *I-e-ska-shin-an-ka*. ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**いなづま** (日) *I-na-zu-ma*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**いぬほし** (日) *I-nu-ho-shi*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**いりの光** (日) *I-ri-no-hikaru*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**いろは歌** (日) *I-ro-ha-uta*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

て一字音となることを示すと云ひ、一説には此歌の理想とする所の涅槃の域を示すと云ひ、更に一説には産婆の習字のために近世に至つて附加したものと云うてゐる。しかし、朝阿の高野日記に四十八字を記し、書字海にも京の字を用ひてゐるから古くからあつたものゝ如くである。此歌は我邦の字母を悉く包含してゐるから、中古以来習字本として用ひ、童幼に深く親しまれてゐる。彼の五十音は片假字で書き、いろは歌は平假字で記すのが慣例である。

作者につき、古今序註四等には法相宗の護命が初二句十二字を作り、弘法大師空海が餘句を作ると云ひ、或説には勸修堂と空海と師弟二人の合作なりと云ふ、この二説共に確證がない。弘法大師傳年譜八には種々の證據を擧げて空海が作ること力説してゐる。渡雲集に載せてある仲理王の語「海上人」と題する詩の中に、字母弘三三三三、眞言四句の句があり、倭片假字反切義解序、阿海抄第十二枚、伴信友の假名本末等何れも空海説を述べてゐる。此説の中で、製作の場所につき三説ある。朝阿の高野日記には、高野山開創の時弘仁七年、空海此歌を作り、工匠にこれを授けたと記してゐる。一説には出雲國神門郡神門寺で作ると云ひ、一説には大和國富永寺長院羅堂で作ると云ふ。此兩説は共に寺傳である。従つて前記三ヶ處に各空海高野と稱するいろは歌を編纂してゐるが、三本共に後人の草本であつて眞蹟ではない。三本の内では高野本が最も古色を帯び筆勢も優秀である。

① (注釋書) 覺後、以呂波時釋一卷(刊) 同以呂波時釋可有事等一卷(刊) 慧眼、以呂波音調傳五卷(刊) 元輝、伊呂波註解一卷(刊) 良禮、以呂波天理抄二卷(刊) 日香、以呂波開書一卷(寫) 全長、以呂波字考錄二卷(刊) 亡名、伊呂波探支抄一卷(刊) 盛典、以呂波童蒙抄三卷(寫) 良翁、以呂波便蒙抄一卷(寫) 壽忍、以呂波開辨一卷(刊) 忍覺、伊呂波見聞口傳書一卷(寫) 亡名、以呂波傳述一卷(寫) 多田義俊、以呂波摩母傳一卷(寫) 同、以呂波調義一卷(寫) 亡名、以呂波見聞一卷(寫) 亡名、以呂波正字編一卷(寫) 亡名、いろは抄一卷(寫) 宇都宮山、以呂波傳一卷(寫) 同谷勿、以呂波字神等。(小田鹿舟) 藤如上人全書 ② 運如(應永二二) 明應八 A. D. 1451-1490 撰

**いろは歌** (日) *I-ro-ha-uta*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**いろは歌** (日) *I-ro-ha-uta*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

六刊 ① 正六、一〇九、二〇四) **いろは祝釋** (日) *I-ro-ha-shaku*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**いろは本義** (日) *I-ro-ha-hon-gi*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**いろは物語** (日) *I-ro-ha-monogatari*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**飯倉山茅野天満宮略縁起** (日) *I-bukura-san-kayano-temmangu-ryaku-enki*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**飯高檀林一件** (日) *I-baka-dan-in*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**飯沼弘經寺志** (日) *I-banuma-ji-shi*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正二二刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

名所行録 (名所書) 京都府 月年の刊録 (書考書目録) 清水 説解書内 代年作書 著書 録有 教書 (名書名録) 號鳴字數

[4]

天徳院其他の墓碑を、歴代法流には岡山の家譜、代々の略傳及遊學の附の逸材、雄器の事蹟を摘録し、末寺の次には報國寺外數十ヶ寺の略誌を載せてある。

本書は他の檀林誌と同一體裁にて、通稱檀林誌の一項である。(中谷在禪)

**家** ① (日) *I-ka*. ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**家康公消息** (日) *I-ka-kon-kou-shi*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**斑鳩嘉元記** (日) *I-han-kyu-ka-ken-ki*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**斑鳩古事便覽** (日) *I-han-kyu-ko-ji*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

隆祥史を研究するに缺くべからざるものである。(高瀬水龍)

**斑鳩寺雜記** (日) *I-han-kyu-ji*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**勢と力と涙とに輝く本願寺全史** (日) *I-han-kyu-ji*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**青英資度帖** (日) *I-ka-eh-shi-do-ka*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**都伽居士見佛說法醒悟經** (日) *I-ka-ge-ji-mi-butsu-shi-ho-kyo*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**都伽支羅經** (日) *I-ka-ge-ji-shi-ka-kyo*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**都伽長者會** (日) *I-ka-ge-ji-chou-ka-e*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

住し、大乗に乗じて一切の衆生を安樂ならしめんとする菩薩の、或は在家し或は出家して、學し住し、勝業を得ることを説いたもので、異譯に都伽羅越問菩薩行經並に法鏡經がある。

初に在家の菩薩は、三寶の功徳を以て、無上正眞道に趣向する爲に三寶に歸すること、善大夫の業をなし、五戒を受持し、正見に住して邪見を離るべきこと、所在の處に法を説いて、一人をも惡趣に墮せしむるなからんことを努むべきことを述べ、次で在家の義を説いて、菩薩はよく家を知るべきこと、よく施に住すべきこと、施するに當り三想と六度の想とを起すべきことを云ひ、次に世間の八法に於て、憂と喜とを生ずべからざること(特に妻・子・財寶)に關し、説く所詳らかなりある。次で在家の菩薩は八戒を持すべきこと、在家と出家とを對照して、出家の利益を擧げると、長者も出家の決心をする。佛は次に出家の菩薩の學すべき所として、四種事に住すること、身衣(袈裟)を着け・乞食し・阿練兒(空閑)にあるの十利と、四種の親近とを説き、更に阿練兒に住して、念ずべく學すべきことを示し、常に六度を離るべからざるを云ひ、更に和上阿闍梨には、懈怠せずして供養すべきこと、並に出家の法の如く、戒・定・慧に住すべきことを述べ、最後に(一)一切の財物を施して果報を望まず(二)淨梵行を具して欲想を習せず(三)四禪を修するもその正位に入らず(四)精進して智慧を學び、一切に慈を及べし(五)法を護つて他人に勸む

此等の法を具足した者は、在家にありながら、在家の戒を學ぶ菩薩であること説き、經を受持する功徳を述べて終つてゐる。

經の終に、經名を擧げた中に、本經を在家出家菩薩戒と名けるといふのがある。是によるも、本經の主とする所は、在家出家の菩薩が受持し修學すべき所を示すに在るが、一面に於て、在家のままにして出家の戒を學ばんと云へる長者の意氣は、ややもすれば形式的の差別に拘泥せる教誨に對する一の警鐘であり、菩薩佛敎興起當時の教團内の氣運を示すものと見られる。本經の異譯の中で、既に唐代に於て、失はれたものが三本有つたといふ。都伽羅越問菩薩行經參照。

**都伽長者經** (日) *I-ka-ge-ji-chou-ka-kyo*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**都伽長者所問經** (日) *I-ka-ge-ji-chou-ka-sho-mon-kyo*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

大正一五刊 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

**都伽羅越問菩薩經** (日) *I-ka-ge-ji-shi-ka-kyo*. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵





て、唯だ此の一巻の法語を味讀して大安  
樂人たれと敬示して居る。康正三年(A.D.  
1457)の乗誠である。挿入の體骨の種々な  
る卷は、室町時代の刻本最も原本の面影  
を傳へ、延寶三年、元祿五年、文化二年本  
(延寶本再刻)等に及び漸次、草紙類の挿入  
に近似して居る。挿入の間に記された言葉  
は當時の口語を傳へて居るものである。  
①元祿五刊(龍大)研究文化二刊(駒大)大  
正一三影寫本(駒大)文政八刊(正大、一〇  
九・一八三) (大久保堅瑞)

**一休がSUNO** ①(日)Ik-kyō-gan-  
koku. ②存 ③西光義選編  
大正一三刊 ④京都龍谷大學出版部

**一休奇行録** ①(日)Ik-kyō-ki-  
roku. 修養師話一休奇行録 ①存 ②存  
③高橋定規著 ④(参考) 龍谷日報 ⑤東  
京東京堂

**一休諸國物語** ①(日)Ik-kyō-shū-  
koku-mono-gatari. ①存 ②平  
田止水、源基定補 ③明治一九刊 ④駒  
大) ⑤大飯坂々堂

**一休諸國物語圖會** ①(日)Ik-kyō-  
shū-koku-mono-gatari-e. ⑤五卷 ⑥  
存、日本歴史學會第九、鎌倉國文庫第四九  
存、日本歴史學會第九、鎌倉國文庫第四九

**一休諸國物語圖會並拾遺**  
①(日)Ik-kyō-shū-koku-mono-gatari-  
e-narabihai-shū-i. ⑥國會五卷、拾遺三  
卷 ⑦存、佛教各宗高僧會傳、日本歴史會  
館第九

⑧本書は一休宗純和尚一代の事蹟を、俗書  
世説をも採り入れて編纂したもので、滑稽

語讀の中に教訓を織り込みたるもので一休  
可笑記をも引用して居る。諸國物語五卷の  
中の諸所に圖會を挿入したものであるから  
此の書名がある譯である。圖會を除いたも  
のと同様に一休諸國物語圖會と題されて  
居る(高僧會傳の如く)。拾遺は二卷のもの  
と三卷のものがあるが三卷のものは其の  
第三卷に當る部分(一休和尚の般若心經抄  
一卷を附加されたもので、他の部分は同内  
容である。

⑦(参考) 龍谷日報 (大久保堅瑞)

**一休師假名法語** ①(日)Ik-  
kyō-shū-jū-anan-hō-go. 一休假名法語  
①存、龍谷大系龍谷部五、龍門法語集卷上、  
一休和尚全集 ②一休宗純(應永元)文明  
一三A.D.1391-1481)著

**一休師教訓圖會** ①(日)Ik-  
kyō-shū-jū-kyō-kan-e. ①存 ②存  
③(駒大)

**一休師諸國物語** ①(日)Ik-  
kyō-shū-jū-koku-mono-gatari. ⑥存  
⑦五柳亭徳升(寛政五—嘉永六A.D.1793-  
1853)歌川國芳(寛政八—萬延元A.D.1796-  
1865)著 ⑧(参考) 龍谷日報

**一休師笑談法語** ①(日)Ik-  
kyō-shū-jū-do-ke-hō-go. ①存 ②  
③爲水貞高(寛政元—天保一三A.D.  
1789-1842)著、池田義信(寛政四—嘉永元  
A.D.1792-1848)著 ④(駒大)

**一休師百話** ①(日)Ik-kyō-shū-  
jū-hyakwa. ①存 ②河村定壽  
著 ③大正四刊 ④東京光風閣

**一休師世の中百首** ①(日)Ik-  
kyō-shū-jū-no-naka-hyaku-shū. ①  
②存 ③一休宗純(應永元—文明一三  
A.D.1391-1481)撰 ④(駒大)

**一休宗純和尚行狀略記**  
①(日)Ik-kyō-gū-shū-anan-hō-shū-  
shūryōki. ①存 ②寫本(立  
大、A.五〇・六五)

**一休道歌俳句** ①(日)Ik-kyō-shū-  
dōka-haijū. ①存、一休和尚全集  
②一休宗純和尚の道歌八十五首、越川親當  
との道歌問答に於て二十二首合計百〇七  
首及び越川親當の道歌二十三首、親當妻一  
首、一路居士一首の總計百三十三首を蒐録  
せるものである。俳句は一休和尚三首、越  
川親當一首である。共に通俗的な言葉を  
以て、佛教の義を示し、人倫の道を歌ひ  
詠したもので、よく一休和尚の洒脫な面影  
を窺ふ事が出来る。(大久保堅瑞)

**一休道歌評釋** ①(日)Ik-kyō-shū-  
dōka-shūka. ①存 ②菅原時保  
評、友田長隆撰 ③大正二刊 ④東京國文館

**一休談話** ①(日)Ik-kyō-shū-  
dan. ①存 ②越山師傳講 ③明  
治三五刊 ④(帝國、九四・二四)

**一休ばなし** ①(日)Ik-kyō-shū-ba-  
nashi. ①存、國文東方佛教叢書第九文藝部上  
②一休宗純(應永元—文明一三A.D.1394-  
1481)著

③一休宗純和尚の逸話を録したもので、興  
味を以て讀むことが出来る世説俗説をも雜  
けた一種の傳記であるが、滑稽本の一種と

も見られる。従つて要所に挿入した圖會十  
九巻も草紙本のそれと類似して居る。著者  
は不明であるが、大徳寺を訪ねて開覺えた  
る物語を録し梓に上すと序して居る所より  
佛教に對して相當の理解深き人であつた事  
を知る事が出来る。三巻本であるが、上巻十  
五項を九項までを採つて巻一とし、上巻第  
十項より中巻十七項の中七項までを巻二  
とし、第八項より第十七項までを巻三とし、  
下巻十五項は其のまゝ巻四として居る四巻  
本もある。諸版本ともに同内容で單に巻の  
組合せを異にして居るのみである。

④元祿一三刊(正大、一七五・九二)寛文八刊  
(駒大) 刊本(各六、餘大・二六四九)(龍大、  
研究)

**一休法語** ①(日)Ik-kyō-shū-hō-  
go. ①存 ②一休宗純(應永元—文明一三  
A.D.1391-1481)著 ③刊本(帝國、二〇  
二・一八三)

**一休法語集** ①(日)Ik-kyō-shū-hō-  
shū. 註解一休法語集 ①存、修養資料叢  
書之内

**一休問答** ①(日)Ik-kyō-mondō.  
田舎再来一休問答 ②四卷 ③存 ④丹羽  
供齊(享保頃 A.D.1715-1735)著  
⑤弘行四刊 ⑥(帝國、二二一・五四)

**一休抄** ①(日)Ik-kyō-shō. ③三帖  
④存 ⑤俱全(一應永三 A.D.1434)記  
⑥天文二〇寫 ⑦(金剛三昧院、八七)

**一休神靈難問答抄** ①(日)Ik-  
kyō-shū-shin-nan-an-gi-mono-dō-shō. ①  
②存 ③日辰述 ④明治二七刊 ⑤(各

名所行録(名所書)諸書所見(月年の刊行) (書考參書釋註)諸本(説解書内) 代年作者(著者) 録存(録色) (古書名題) 號略字數

大、餘大・二二〇五)(京大、日大末、五四三)  
(立大、A.〇三・九二一九六) ②東京海聖社

**一經讀否之論** ①(日)Ik-kyō-dōka-  
-ni-no-ron. ①存、日蓮宗々學全  
書本妙法華宗部第二之内 ①日蓮(一)元龜二  
A.D.1571)著

②京都本隆寺の日蓮が富士門流の所立たる  
一經不讀論を反駁するために著した書  
p. 辨顯の問、法華圓宗、意制止、一經讀  
論、但令、法華要法口唱可、言耶、答、通、實、  
要法、不、制止、讀論、也、就、之、兩方、若  
凡、於、法華、修行、可、有、讀受、折伏、也、何  
折伏、弘通、之、可、交、讀論、讀受、之、行、耶、受  
以、見、金言、非、說、不、專讀論、經、但、行、修、拜  
手、若、受、持、等、五、種、衣、座、室、三、軌、共、以、如  
說、修行、方法、也、何、可、交、讀論、行、耶、と、い  
ふ、問答、が、二、篇、の、地、要、p. 有、る。(馬田行啓)

**一行居集** ①(日)Ichikyo-kyō-ko-shū.  
(支)I-kyō-cho-hi. ②八卷 ③存 ④清  
代影射升記 ⑤民國八刊 ⑥(龍大、研究)京  
大、(二四・二) ⑦常熟別經處

**一行禪師字母表** ①(日)Ichikyo-  
sen-jū-jimo-ji. ①存 ②一行(弘  
道元一開元一五A.D.653-727)作、澄禪  
(一)延寶八A.D.1680)書 ③享保四刊(正  
大、一四七・六一八)足利時代寫(寶龜院、測)  
高野版(各六、餘大・三七二二)慶長一一寫  
(寶龜院、藤)寛文九刊(各六、餘大・八六〇)  
元祿一一刊(各六、餘大・七八二)

**一行禪師字母表考訂** ①(日)Ichikyo-  
sen-jū-jimo-ji-kyō-ka-ki. ①存 ②  
③(複製)(元祿一一一明和八A.D.1701-

177)撰 ④寫本(高次、寄、一・五二)(京專)  
(龍大、二七二・二)

**一行禪師字母表便覽** ①(日)Ichikyo-  
sen-jū-jimo-ji-mo-hyō-ben-ran. ①存 ②  
③享保四刊 ④(正大、一〇六・二〇)  
**一行六壬歌** ①(日)Ichikyo-kyō-roku-  
-jin-ka. (支)I-kyō-shū-kyō-roku-ka. ②三卷  
③(参考) 惠運禪師請來日録

**一卷揚塵** ①(日)Ichikyo-kyō-kōm-  
-nan-shō. (支)I-kyō-shū-kyō-kōm-shū.  
③三卷 ④(道宣)開皇一六一(統御)二A.D.  
596-657)著 ⑤(参考) 東城傳燈日録卷  
下、請來日録第一

**一卷抄** ①(日)Ik-kyō-shū. ①存  
②成源(一)寛政三A.D.1221)作 ③(参考)  
本朝台詞撰述書目

**一貫錄** ①(日)Ik-kyō-shū-kan-ryoku. (支)  
I-kyō-shū. 備者禪公案一貫錄 ①存 ②  
③(参考) 龍谷日報

**一家拾遺決擇** ①(日)Ik-kyō-shū-  
-nan-ke-cho-ka. ①存 ②普圓(文  
化九—明治九A.D.1512-1876)述 ③寫本  
(龍大、一五〇・三)

**一家衆次第** ①(日)Ik-kyō-shū-shū-  
-dal. (支)I-kyō-shū-shū-chū-jō. ①存 ②  
③(参考) 龍大、別覽

**一華五葉** ①(日)Ik-ke-go-ya. (支)  
I-kyō-shū-ya. ①存、市三・一七、日中  
華和尚傳録之内 ②元明本中峰(南宋景定四  
元—治三A.D.1261-1232)述  
③元の中峰明本禪師の語要五部より成る。  
山房夜話三卷、擬塞山詩一卷、傳教信心辯

見或問一卷、信心銘講義三卷、幻住家訓  
一卷p. ありて總て中峰傳録に收められて居  
る。即ち廣録第十二巻が山房夜話で禪定の  
禪と達磨直傳の禪との差異、公案の本義、  
坐禪の本領、悟後の修行の有無、學得知と  
眞知、禪者臨終の坐臥等の本質的にして然  
る興味ある諸問題を提へて論じて居  
る。同十二巻は信心銘講義p. 信心銘  
の註解である。同十三巻は傳教信心辯見  
問p. 傳教論者との問答に答へたもの、同十  
六巻は幻の一法を提唱した幻住家訓であ  
り、同十七巻は塞山詩首に擬して參禪の  
用心を説いた擬塞山詩である。中峰廣録  
巻二十四に一華五葉序、一華五葉後序を収  
め、中峰傳録の附録に一華五葉集説を収め  
て居る。元版、五山版、明和本等がある。

⑦(参考) 龍谷日報 (大久保堅瑞)

**一華五葉** ①(日)Ik-ke-go-ya. ①  
②存 ③(参考) 龍谷日報 A.D.  
1751-1761)撰 ④明和二刊 ⑤(龍大、  
研究)(駒大)

**一華五葉** ①(日)Ik-ke-go-ya. ①  
②存 ③元明(舊名元朝)説禪院(一)明和頃  
A.D.1761-1771)撰 ④(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑤(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑥(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑦(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑧(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑨(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑩(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑪(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑫(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑬(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑭(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑮(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑯(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑰(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑱(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑲(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ⑳(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉑(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉒(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉓(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉔(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉕(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉖(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉗(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉘(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉙(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉚(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉛(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉜(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉝(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉞(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㉟(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊱(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊲(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊳(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊴(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊵(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊶(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊷(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊸(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊹(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊺(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊻(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊼(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊽(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊾(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰 ㊿(参考) 龍谷日報  
A.D.1761-1771)撰

**一華碩田大禪師行實之狀**  
1501-1579)撰 ⑦(参考) 龍谷日報

①(日)Ik-ke-shōtan-dai-sen-jū-kyō-  
-jū-no-jō. ①存、續群書類第二  
九輯 ②(複製)周良(文龜元—天正七A.D.  
1501-1579)

**一卷傳** ①(日)Ik-kyō-shū-den. ①  
②信明(一)建長頃 A.D.1249-1255)記  
③(参考) 淨土真宗教典志第三

**一夏百條論議** ①(日)Ichikyo-  
-hyaku-jū-hō-ron-gi. ②二卷 ③存、續淨土宗  
全書第一四 ④良順述 ⑤水正一一(A.D.  
1515)七月

⑥本書は下野大徳圓通寺旭庵社良順が初心  
者のために永正十一年四月十五日から七月  
十五日に至る夏安居を利用して、淨土の宗  
義を講義したもので、上巻には宗名證據等  
以下有教無人事に至る四十五條を主として  
無量壽觀によりて説明し、佛の禮讃用不等  
の問題を論じ、下巻には正依中正經事以下  
同向益有無事に至る四十五條を觀無量壽  
經、阿彌陀經によりて説明したもので、以  
上p. 一夏九十日の講説は終つたが更に淨土  
布教元旨事以下續作樂生事に至る十條は三  
部經の義意に従つて追加講説して百條となし  
一夏百條論議と名づけたものである。著者  
良順は良忠門下に六波を生じた中、名越派  
の學匠であるが、本書は必ずしも名越の宗  
義に據ることなく、淨土門の通義によつて  
述べてゐる。

⑦寛文一三刊(正大、一五五四・六六)(龍大、  
二六八四・一四、研賞) (高瀬水敏)

名所行録(名所書)諸書所見(月年の刊行) (書考參書釋註)諸本(説解書内) 代年作者(著者) 録存(録色) (古書名題) 號略字數







〔第四〕 菩薩見實三昧經。賢劫經。華手經。大灌頂經。菩薩瓔珞經。佛名經。月燈三昧經。十住經。觀佛三昧經。五千五百佛名經。大方廣十輪經。大方廣報恩經。寶雲經。金光明經。大寶經。密迹金剛力士經。菩薩處胎經。大集賢護菩薩經。大方等陀羅尼經。

〔第五〕 海龍王經。央掘魔羅經。觀藥法行經。七佛神呪經。菩薩本行經。稱揚諸佛功德經。力莊嚴三昧經。須臾天子經。般舟三昧經。等日菩薩所問經。超日明三昧經。月上女經。中陰經。須彌藏經。佛華嚴入如來不思議境界經。請佛要集經。文殊師利佛土讚淨經。灌首菩薩無上清淨分衛經。大乘同性經。阿闍佛國經。蓮華面經。蓮華經。孔雀王神呪經。發覺淨心經。無上依經。移蓮經。未曾有經。不思議功德經。大吉義呪經。菩薩夢經。文殊問經。密迹金剛力士經。東方最勝燈王如來經。成其光明定意經。太子須太摩經。太子高幢經。須臾經。金色王經。獨脫自誓三昧經。摩訶摩耶經。如來方便善巧呪經。勝鬘經。須摩提經。梵天首意經。月明菩薩經。滅十方冥經。出生菩提心經。普門品經。心明經。不思議光菩薩所說經。文殊師利問菩薩經。德光太子經。施燈功德經。菩薩阿色欲經。人本欲生經。不決定入印經。魔逆經。濟諸方等學經。菩薩行五十緣身經。彌勒菩薩所問本願經。堅固女經。演道俗經。寶網經。百佛名經。觀無量壽經。不空罽索經。觀藥王藥上二菩薩經。請觀音經。十一面觀世音經。觀世音菩薩授記經。度母經。度子經。溫室洗浴來付

經。四不可得經。諸德福田經。虛空藏菩薩所問持驗經。菩薩投身飼虎起塔因緣經。須菩提菩薩供養經。維摩經。天王太子詳經。阿闍陀鼓音聲陀羅尼經。八陽神呪經。幻土仁賢經。後出阿闍陀經。

〔第六〕 妙法蓮華經。

〔第七〕 正法華經。華嚴經。大悲分陀利經。大方等大集菩薩念佛三昧經。念佛三昧經。佛伽阿跋多羅寶經。入楞伽經。大薩遮尼乾子經。菩薩行方便境界神通變化經。大般泥洹經。大寶經。虛空藏經。阿耨末羅。無盡意經。寶女經。菩薩淨行經。無量壽子經。佛說阿彌陀經。持世經。弘道廣嚴三昧經。阿闍世王經。普超三昧經。阿闍世王經。等集衆德三昧經。集一切福德經。廣博嚴淨不退轉經。阿惟越致遮經。勝思惟梵天所問經。思益梵天所問經。持心梵天所問經。度世經。漸佛經。十住經。如來興顯經。羅摩經。菩薩本業經。請菩薩求本業經。摩訶訶無雜變化經。寶如來三昧經。四童子經。方等觀世音經。哀泣經。慧上菩薩問大菩薩經。文殊師利現寶藏經。

〔第八〕 維摩詰經。維摩詰經(佛法普入法門三昧經)。寶迅王菩薩所問經。大莊嚴法門經。順護方便經。樂律塔莊嚴方便經。大雲輪請雨經。大雲請雨經。大方等大雲請雨經。德護長者經。月光童子經。申日經。善思童子經。大方等頂王經。法鏡經。都伽長者所問經。都伽越問菩薩行經。無量清淨平等覺經。阿闍陀經。無量壽經。虛空淨淨經。虛空藏菩薩經。虛空藏菩薩神呪經。彌勒成佛經。彌勒來時經。無量壽佛經。藥師

本願經。正悲敬經。離垢施女經。無垢施菩薩分別應時經。無畏德女經。阿闍世王女阿術達菩薩經。尊勝菩薩陀羅尼經。第一義法勝經。大威燈光仙人問經。他施菩薩本起經。菩薩童子經。了本生死經。宿得經。無所希望經。象鼻經。一切法高王經。佛遺日摩尼寶經。胎藏經。無垢賢女經。無量門微密持經。阿闍世法陀羅尼經。舍利弗陀羅尼經。一向出生菩薩經。前世三轉經。太子顯護經。善法方便陀羅尼經。金剛秘密善門陀羅尼經。華積陀羅尼經。解脫經。放鉢經。拔除經。孔雀王呪經。兜沙經。優婆塞戒經。佛藏經。大方廣三戒經。寶嚴經。梵網經。菩薩藏經。法律三昧經。菩薩內戒經。淨業障經。文殊淨律經。

〔第九〕 大智度論。

〔第一〇〕 般若燈論。大莊嚴論。攝大乘論。十住毘婆沙論。大乘莊嚴論。十地論。地持論。菩薩善戒經。菩提資糧論。寶性論。佛阿毘曇。百論。發菩提心論。三具足論。寶髻菩薩經論。十二門論。緣生論。

〔第一一〕 正法念經。中阿含經。增一阿含經。雜阿含經。

〔第一二〕 長阿含經。別譯阿含經。寶曇經。起世經。雜寶藏經。菩薩經。修行道地經。生經。捨持人經。中本起經。興起行經。達摩多羅經。義足經。毘耶問經。那先比丘經。

〔第一三〕 般泥洹經。五百弟子自說本起經。信度因緣經。善女祇城經。虛處經。修行本起經。胎胎經。過去佛分衛經。大迦葉本起經。婦人過華經。請意長者子所問經。四自

便經。七女經。所欲救患經。遺教經。佛意轉者經。優填王經。佛入涅槃金剛力士哀戀經。佛滅度後金棺葬送經。見正經。摩訶迦葉度賢女經。中心經。龍王兄弟經。沙易比丘功德經。樹提佛經。虛至長者經。燈指因緣經。陳王經。五王經。水羅王經。佛大僧自愛經。輪轉五道罪福報應經。未生怨經。十八泥犁經。泥犁經。罪業報應教化地獄經。迦那城說法沒毒傷經。過去現在因果經。太子本起瑞應經。修行本起經。阿闍若智經法經。摩登伽經。舍頭誦經。律及經。大般涅槃經。佛般泥洹經。善法義經。梵網六十二見經。寂志果經。梵志阿跋經。七佛父母姓字經。梵字顯顯同種尊經。阿闍問事佛古因緣。阿闍分別經。罪福報應經。藥報別經。五母子經。阿闍連經。玉耶經。五闍盆經。雜藏經。唱鳴王經。力士移山經。大愛道般泥洹經。波斯匿王太后崩崩土欲身經。四諦經。闍羅王五天使者經。長壽王經。阿那律八念經。摩訶羅經。毗訶和經。梵摩喻經。鷄鳴經。雜阿含經。七處三觀經。比丘施經。馬有八難覺人經。

〔第一四〕 四分律。

〔第一五〕 十誦律。僧祇律。五分律。

〔第一六〕 善見律。鼻奈耶律。摩得勒伽律。毘尼母律。薩婆多毘尼尼婆沙。大愛道比丘尼經。大比丘三千威儀經。優婆塞五戒相經。優婆塞五戒威儀經。舍利弗問經。或消災經。解脫戒本。僧祇戒本。四分戒本。十誦戒本。比丘尼別勝。四分比丘尼戒本。僧祇比丘尼戒本。十誦比丘尼戒本。

名所行發(名)摩(者)所(所) 月年(の)刊(刊) (請考多書釋法)清本(清) 說解(の)内(内) 代年(の)作(作) 著(著) 缺(缺) 數(數) 名(名) 名(名) 號(號) 字(字)

沙彌戒儀。沙彌尼戒。沙彌尼戒。

〔第一七〕 阿毘曇毘婆沙論。迦梅延阿毘曇。舍利弗阿毘曇。俱舍論。出曜論。

〔第一八〕 成實論。神變沙阿毘曇論。解脫道論。雜阿毘曇論。立世阿毘曇論。聲要須索所集論。法勝阿毘曇論。四諦論。阿毘曇心論。分別功德論。甘露味阿毘曇論。時支佛因緣論。三法度論。十八部論。明了論。隨相論。

〔第一九〕 佛本行集經。撰集百緣經。

〔第二〇〕 陀羅尼集經。六度集經。佛本行讚經。付法藏經。佛所行讚。治師病經。要經。禪要法。禪法要解。治師病經。要法。百喻集。菩薩本緣集。四阿含集抄。法句經。菩薩寶印經。菩薩寶印經。字經抄。思惟略要經。佛醫經。分別業報略集。龍樹爲師陀伽王說法要偈。無明羅刹經。四十二章經。寶頭盧爲優陀延王說法經。寶頭盧爲王說法經。阿育王太子法益摩目因緣經。馬鳴菩薩傳。婆伽婆豆傳。

〔第二一〕 大菩薩藏經。大乘十輪經。無垢稱經。解深密經。分別緣起經。能斷金剛般若經。菩薩戒本。稱讚淨土經。佛地經。示教勝軍王經。如來記法住經。六門陀羅尼經。般若心經。

〔第二二〕 瑜伽師地論。

〔第二三〕 顯揚聖教論。對法論。攝大乘論。廣百論。佛地經論。掌珍論。王法正理論。大乘成實論。正理門論。大乘五蘊論。

〔第二四〕 阿毘達磨俱舍論。

〔第二五〕 阿毘達磨正理論。(辻森要修)

一切經音義 ○(日)Sangyō-shū

〔第一一八〕 大般若波羅蜜多經

〔第一九〕 放光般若經(支應)。摩訶般若波羅蜜經(支應)。光讚般若經(支應)。長安品

〔第一一五〕 大寶積經。

〔第一一六〕 大方廣三戒經。無量清淨平等覺經。阿闍陀經(支應)。無量壽經(支應)。阿闍世王經(支應)。大集十法經。普門品經(支應)。胎胎經。文殊師利佛土嚴淨經(支應)。大聖文殊師利佛行功德經。法鏡經(支應)。都伽越問菩薩行經(支應)。幻土仁賢經(支應)。決定毘尼經。再譯三十五佛名經。發覺淨心經。須摩提女經。須摩提菩薩經。阿闍世王女阿術達菩薩經。得無垢女經。優填王經(支應)。文殊師利所說不思議境界經。太子顯護經(支應)。太子和休經。大乘顯護經。聖上菩薩問大善觀經(支應)。大方等要經。彌勒菩薩所問本願經。佛遺日摩尼寶經(支應)。摩訶衍寶嚴經。勝鬘經(支應)。毘耶問經(支應)。大方等大集經(支應)。大集日藏分經(支應)。大集月藏分經(支應)。

〔第一一七〕 如幻三昧經。善住意天子經。太子顯護經(支應)。太子和休經。大乘顯護經。聖上菩薩問大善觀經(支應)。大方等要經。彌勒菩薩所問本願經。佛遺日摩尼寶經(支應)。摩訶衍寶嚴經。勝鬘經(支應)。毘耶問經(支應)。大方等大集經(支應)。大集日藏分經(支應)。大集月藏分經(支應)。

〔第一一八〕 大乘大集地藏十輪經。

〔第一一九〕 大方廣十輪經。大集須彌藏經。大集大虛空藏經。虛空淨經(支應)。虛空藏菩薩經(支應)。虛空藏菩薩神呪經(支應)。虛空藏菩薩能滿諸願求聞持法經。觀虛空藏菩薩經。虛空藏菩薩問七佛陀羅尼呪經。菩薩念佛三昧經(支應)。大方等大集菩薩念佛三昧經。般舟三昧經。大集賢護菩薩經。無量壽子經(支應)。大集賢護王經。大寶經。阿耨末羅經。寶女所問經。無盡意經。自在王菩薩經(支應)。寶迅王菩薩所問經(支應)。菩薩經(支應)。

〔第二一〇〕 寶星陀羅尼經。大方廣佛華嚴經(支應)。

〔第二一一〕 新譯大方廣佛華嚴經(梵苑)。

〔第二一二〕 信力入印法門經。度諸佛境界智光嚴經。佛華嚴經入如來德智不思議境界經。大方廣入如來智德不思議經。大方廣如來不思議境界經。大方廣佛華嚴經不思議佛境界分經。金剛覺菩薩修行分經。大方廣佛華嚴經修善分。莊嚴菩提心經。大方廣賢菩薩所說經。大方廣菩薩十地經。請菩薩求佛本業經。菩薩本業經(支應)。大方廣佛華嚴經四十二字門經。菩薩十住行道經。菩薩十住經(支應)。顯無邊佛土功德經(無音)。佛說兜沙經(支應)。漸德經(支應)。十住經(支應)。等日菩薩所問經(支應)。如來興顯經(支應)。度世經(支應)。羅摩伽經(支應)。大方廣佛華嚴經攝入法界品經。四童子經。大慈經梵天品。方廣大莊嚴經。

〔第二一二六〕 大般涅槃經。大般涅槃

名所行發(名)摩(者)所(所) 月年(の)刊(刊) (請考多書釋法)清本(清) 說解(の)内(内) 代年(の)作(作) 著(著) 缺(缺) 數(數) 名(名) 名(名) 號(號) 字(字)











施護譯とは大體に於て似て居るが、幾分の異りがある。右の三本の中では、原文に忠實であるや否やの問題を別とすれば、不空の目譯が讀者から一般に喜ばれるであらうと思はれる。

一切如來眞實攝大藥現證三昧大教王經

○(日) I-te-ai-yo-tai-shin-jien-sho-dai-jō-gen-shō-sam-mai-dai-kyō-shō (支) I-te-ai-yo-tai-shin-jien-shō-dai-jō-gen-shō-sam-mai-dai-kyō-shō (梵) Sarvathā Gatatrāsamgraha. (藏) De-bhin-gees-pa thams-cad-kyi de-kho-na-rid bdegs-pa. 現證三昧大教王經 三十卷 存。大正一八・三四一No. 853。縮成一・二、北一六・三。北1311補正。南1335寶雲。元1236寶雲。明北1013成川。南1493宣至。天1316寶雲。至75清至。明南934如松。N. 1017。○宋施護(太平興國五A. D. 980)譯。

○(金剛經) 金剛經の大本は、十萬偈ありて、十八會に於て説かれたのであるが、今經は十八會中の初會の説で、四千偈あると言はれて居る。十八會指歸に依れば、初會の一切如來眞實攝大教王會に於て、金剛界・降三世・遍調伏・一切義成就の四大品が説かれたことに成つて居る。

一切如來眞實攝大藥現證三昧大教王經

○(大綱) 金剛經の大本は、十萬偈ありて、十八會に於て説かれたのであるが、今經は十八會中の初會の説で、四千偈あると言はれて居る。十八會指歸に依れば、初會の一切如來眞實攝大教王會に於て、金剛界・降三世・遍調伏・一切義成就の四大品が説かれたことに成つて居る。

三三品に九分あり、四曼が二回に現はれてあるが、是は現圖の九會曼荼羅の中で降三世會と降三世三昧耶會との二會に相當する。(註) 今經は、金剛頂經大本の初會の全體であつて、金剛頂部の經典としては、可なりな調ふた者であるが、入唐八家の請求ではないから、會東兩密に於て、重要視されてゐない。四大品中の金剛界品に相當する三卷の金剛頂經並に同經の梵本から金剛智三藏に依つて略抄して翻譯された所の略出念誦經四卷が重用視されて居る。今經の四大品には成身會・三昧耶會・供養會・四印會の五會が明してあるだけであるが、十八會指歸に於ては、この五會の外に一印會を加つて、六會が明されて居る。(神林隆淨) 註 ○(日) I-te-ai-yo-tai-shin-jien-shō-dai-kyō-shō (支) I-te-ai-yo-tai-shin-jien-shō-dai-kyō-shō (梵) Sarvathā Gatatrāsamgraha. (藏) De-bhin-gees-pa thams-cad-kyi de-kho-na-rid bdegs-pa. 現證三昧大教王經 三十卷 存。大正一八・三四一No. 853。縮成一・二、北一六・三。北1311補正。南1335寶雲。元1236寶雲。明北1013成川。南1493宣至。天1316寶雲。至75清至。明南934如松。N. 1017。○宋施護(太平興國五A. D. 980)譯。

一切如來眞實攝大藥現證三昧大教王經

○(大綱) 金剛經の大本は、十萬偈ありて、十八會に於て説かれたのであるが、今經は十八會中の初會の説で、四千偈あると言はれて居る。十八會指歸に依れば、初會の一切如來眞實攝大教王會に於て、金剛界・降三世・遍調伏・一切義成就の四大品が説かれたことに成つて居る。

て一百八名だけ文字通りに列記されて居る場合は、殆んど無いと言つても宜い程であるが、今も此の例に洩れない。佛頂輪王とあるけれども、例の五佛頂若しくは八佛頂等に關係して居るのではなく、單に佛陀釋尊を指して居るに過ぎない。(神林隆淨) 一切如來大教王經 ○(日) I-te-ai-yo-tai-shin-jien-shō-dai-kyō-shō (支) I-te-ai-yo-tai-shin-jien-shō-dai-kyō-shō (梵) Sarvathā Gatatrāsamgraha. (藏) De-bhin-gees-pa thams-cad-kyi de-kho-na-rid bdegs-pa. 現證三昧大教王經 三十卷 存。大正一八・三四一No. 853。縮成一・二、北一六・三。北1311補正。南1335寶雲。元1236寶雲。明北1013成川。南1493宣至。天1316寶雲。至75清至。明南934如松。N. 1017。○宋施護(太平興國五A. D. 980)譯。

一切如來眞實攝大藥現證三昧大教王經

○(大綱) 金剛經の大本は、十萬偈ありて、十八會に於て説かれたのであるが、今經は十八會中の初會の説で、四千偈あると言はれて居る。十八會指歸に依れば、初會の一切如來眞實攝大教王會に於て、金剛界・降三世・遍調伏・一切義成就の四大品が説かれたことに成つて居る。

剛手光明灌頂總勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品の文、及び甘露軍荼利菩薩供養念誦儀軌の文が引用されて居る。○(同本) 次に本書と同種にして而も實修に適用する様に作られたものが、同全集にある一切如來金剛次第觀念であるが、前者の資料に依つて、後者の修法の次第が作られたものである。○(尊像) 十二臂の大勝金剛(一名大轉輪王とも云ふ)が、此の修法次第の本尊と成つて居る。三井寺に唐本の像があると言はれて居るが、この尊像は稀有であるから、經世の珍寶である。(神林隆淨) 一切如來大秘密王未曾有最上微妙大曼拏羅經 ○(日) I-te-ai-yo-tai-shin-jien-shō-dai-kyō-shō (支) I-te-ai-yo-tai-shin-jien-shō-dai-kyō-shō (梵) Sarvathā Gatatrāsamgraha. (藏) De-bhin-gees-pa thams-cad-kyi de-kho-na-rid bdegs-pa. 現證三昧大教王經 三十卷 存。大正一八・三四一No. 853。縮成一・二、北一六・三。北1311補正。南1335寶雲。元1236寶雲。明北1013成川。南1493宣至。天1316寶雲。至75清至。明南934如松。N. 1017。○宋施護(太平興國五A. D. 980)譯。

○(相應行曼拏羅供養用品) ○(灌頂用品) ○(阿闍梨品) ○(護摩法用品) ○(先法攝受弟子品) ○(鈴杵相分出生供養用品) ○(造塔功德品) ○(各品の内容) 一、相應行曼拏羅供養用品、先づ如來説法の場所として、切利天大善法堂を挙げ、總衆として、切利天大善法堂十六菩薩、圓智三昧金剛母等の四族と金剛聚又神通菩薩等の四大神通菩薩と、金剛樂菩薩等の八大秘密化身菩薩など、唐譯の密部經に於ては、其名稱も知られて無い諸尊が列擧してある。會座には金剛手菩薩が居つて、世界に對して曼拏羅(Mandalā)を作ることにして、地を選擇すること、又地には幾種あるか、曼拏羅に幾種あるか等の二十六個の疑問を出して、世尊の教を請ふて居る。それに對して世尊は、造曼拏羅者の屬する種族に依つて、異なる地相を請ぶ可きこと、即ち刹帝利姓は赤色の地を求め、婆羅門姓は、白色の地を求め、毘舍族は深黄色の地を、首陀は黒色の地を求むることが示され、又香氣に依つて地を擇べば、刹帝利の地は蓮華香、婆羅門の地は、青蓮華香、毘舍の地は女蘭の香、首陀の地は雌黃の香ありと言はれて居る。又地の味に依つて、その地の所有者が四姓中の何れであるかを知ることが出来ることとされて居る。即ち刹帝利の地は、其の味は鹹の如く、復甘味あり、婆羅門の地は、其の味は酸、毘舍の地はその味甜、首陀の地はその味苦澁とあり、又曼拏羅に於ては、四門あり、其の願求する

目的に依つて、東西南北の各四門に於て、持誦作法を爲すことに成つて居る。若し大地主を求め、制成就を求め、修羅宮に入り、乃至安樂及び解脱を求むる爲めには、東門に於て持誦作法し、若し一切人の愛重と子孫の隆盛と、財穀豐富と、息災安樂とを求むる者は、西門に於て持誦作法を爲す可きであると言はれて居る。その他阿闍梨は、三白食を爲す可きことが示されて居る。三白食とは乳・糞・糞米飯である。此の他に護摩(Homa)に關し、爐の形状・色等が息災・智慧等の修法の種類に依つて異なることが詳細に説かれて居る。二、灌頂品、灌頂入壇には、種姓の別なく、國の内外を問はず、皆悉く引入す可きことを示し、阿闍梨は瓶經瓶・端正圓滿にして、慈悲心と清淨心とあり、信實にして偽り無く、諸根を降伏し、少食少欲にして、大辯才を具し、深智あり、言語は善軟にして、復清淨、性懷情ならず、好んで布施し、妬なく長なく、我慢を遠離して、常に大阿闍梨及び衆賢聖を供養することを楽しみ、復能く眞如の法を演説し、常に眞言の行を修じ、己の美を稱せず、恒に他の徳を讃じ、諸の惡地に於て、所作悉く圓滿し、諸の弟子に對して、亦兼説することなき等、此の如き諸徳を具へて、始て眞の阿闍梨耶であることと見做されて居る。次に弟子が阿闍梨耶に對して布施すること、阿闍梨耶が弟子を曼拏羅に引入すること、弟子を加持し、金剛杵を授け灌頂を興へ、無上正等覺を得たことを弟子に暗示し

五佛灌頂並に五佛聖灌頂を授け、かくて弟子は大上人若しくは阿闍梨耶の稱號を得ることが述べて居る。三、阿闍梨品、阿闍梨耶が弟子から受けた供養物の處分方法に就て、先づ述べて居る。阿闍梨耶は供養物を受け已つて、之を三分し、第一分を三寶に奉じ、第二分を婆羅門・外道尼乾子(Nirgranthaputra)等に施與し、第三分を又分つて二分分とし、半分を阿闍梨耶の同様に與へ、残り半分を阿闍梨耶が自ら用ふる。又前の三寶の分を三分と爲し、一は佛、二は法、三は僧、此の如く分賦して之を用ふ。佛の分は佛像及び塔廟等を造り、法の分は如來の一切の經法を書寫することに用ひ、僧の分は種々の飲食を造つて、衆僧に供することと成つて居る。次に眞言の阿闍梨耶は、大悲心を具して一切の婆羅門・外道・尼乾子等を慈念し、眞實言を以て勸諭開發して、甚深秘密の法を信ぜしめ、同學を誘致せず、堅く五戒を持し、甚深の十波羅密を行じて、大智を圓滿し、又有情を救度して、一切の罪障を除滅し、又自ら殺生並に安樂を遠離して、自ら酒を飲まず、亦他人に勸めない。何となれば飲酒は一切の過失の根本であるからである。阿闍梨耶が若し俗間の典籍文字、歌詠を好み、若しくは我執・人執を讚歎すれば、決定して地獄惡趣に墮すと明して居る。次に眞言行菩薩に關して、次の如く述べて居る。菩薩行者は戒法を奉持し、菩薩道を行じ、深信堅固にして、相應即ち佛の















き、其の他慈恩の西方要決及び大般若經理... 絶分述謂は、是れ慈恩の所造に非ざるの説... 師の入門細注を採り用ゆる、又注意すべき... ことに属する。正理第二の下、又、問答を... 設くること十一番、成唯識論要及び因明... 入正理論を引き、立量堂々、誠に見るべ... きものが存する。本書の末の諸語に「徳治... 二年九月十七日、於新羅院一編」等あり。古... 本草書不見解之問、文字不審也。以脚... 本具可三校合一而已。三論宗沙門方國。同... 年十二月二十五日、一校之次加書點了と見... へ、此の本現に南都東大寺に歸せられ、... 京都龍谷大學圖書館に其の寫本を蔵する。

一 乘佛性究竟論

○(日) Ichijō... bus-shū-ku-kyō-ton. (支) Ichijō... hōng-chū-hing-tun. ④全六卷中第三卷... 存餘同。⑤存、出讀一九五・四〇廣法寶遠... ⑥永超の東城傳燈目錄卷下、安論の三論宗... 章疏等に依ると、「一乘佛性究竟論六卷より成... 實述と見えて、即ち本書は一部六卷より成... りしものと考へられるが、惜しい成既に散... 佚に歸して、僅に第三卷を存するに過ぎな... い。水超及び安論の目錄に依ると、大安寺... 慶俊に「一乘佛性究竟論」六卷の著ありと... 傳へ、即ち本書を疏釋したものと考へられ... るが、これ亦同じ散佚に歸して、其の殘缺... をする見ざるを得ざるを遺憾とする。著者法... 寶は、俗姓・鄭貫は元より示寂年月をも詳か... にしない。涅槃を以て宗とし、又、支非三

藏の神足であつて、佛授記寺に住した。性... 實に於て人に下らず、三藏、初め大毘婆沙... 論を撰するや、非想見惑の義を清淨す... ると、三藏、別に十六字を以て論中に加へ... て其の難辭を述べた。實、三藏に謂て曰く、... 此の二句四句梵本の有無如何と。三藏曰く、... 善義意を以て情を酌みて作れるのみと。實... 曰く、師凡語を以て聖言量を増加すべきや... と。是れより三藏の門に無依無頼するに至... った。支非譯の俱舍論を疏釋して三十卷を... 成し、大慈恩寺普光の俱舍論記三十卷と併... せて、世に光寶二記と稱せられ、俱舍論研... 究の指針に供せられる。特に六離合釋義に... 至りては、俱舍宗の法義一に實師の義を以... て定章とせられる。則天武后の長安三年、... 福先寺及び西明寺に於て、義淨三藏の譯場... に預り、法藏・勝莊等の諸徳と遊義の任に... 當つた。傳は宋高僧傳第四・六傳傳第二十... 三卷に見え。本書撰述の年時は奉化でな... いが、以上の紀傳に據りて、唐の中宗(AD... 684-705)睿宗(AD.710-712)玄宗(AD... 713-755)の三代を通ずる間と考へ得る。一... 部六卷の内容は、今日之れを明かにする由... も無いが、其の初部分は、悉く俱舍論疏... 第一に、五門の分別を説くもの、第一初... 轉法輪時、第二修行次第、第三起起因緣、... 第四部執先後の四門と其の内容趣旨を同じ... したものでないかと考へる。現存第三... 卷の内容は、一乘密意章第六、佛性同異章... 第七の二門より成る。即ち悉くは十門分別... 中の第六・第七の二門を存し、前五門は前二... 卷の所明、第八以下の三門は後の三卷の内

は華嚴第二疏至相智覺の上足、華嚴宗の... 高祖賢首大師法藏と同學であつて、海東新... 羅國華嚴宗の初祖である。新羅高林府の... 人、姓は金氏、武徳八年、廿九歳にして京... 師皇廟寺に於て、落髮受具した。永徳元年... (AD.659)元徳と共に唐に入り揚州に止... るや、相智覺と名をとり、篤く講して高内に... 留まらした。龍朔元年(AD.661)終南山... に登り、至相智覺に謁し、即ち就きて攝... 論・地論及び華嚴の妙旨を學んだ。賢首大師... 法藏と同學したのはこの時のことである。... 既にして本國の丞相金欽純の唐に因る、... や、高宗將に大學して東征せんとす、即ち... 欽純等密に海を誘ひて逃れ、咸亨元年(又... は二年、AD.670-671)新羅に還つた。事... 天徳に達し、神印大徳明即に命じて、假りに... 密法を授けしを禮はしむるに、本國... 即ち危難を免るゝことを得た。儀鳳元年... (AD.676)大伯山に歸り、朝旨を奉じて浮... 石寺を創し、大に華嚴の宗を宣揚した。同... 學の賢首が、撰玄記・五教章等を撰するや、... 惡難なる書を撰して其の副本を送つて來... た。消息文は義天の圓宗文類に收められて... 居る。大伯山の浮石寺、伽耶山の海印寺等... の十大刹を創設し、世壽七十八歳を以て、... 長安二年(AD.702)示寂した。著作には本... 書の外、法界略疏、括盡一乘福要、千歳龜... 鏡等が存する。傳は新羅の崔致遠の撰せる... 本傳の外、三國遺事第三、第四、宋高僧傳... 第四等に見える。一部の所明は、法性圓融... 無二相(中略)舊來不動名爲佛の七百三十... 句二百一十字を、一字一字直線に依りて連

容を爲し、並に散佚に歸したものであらう。  
一乘密意章は、華嚴講大業論に依りて乘の... 三義を説きては、性・行・果の三義の名義を... 辨し、辨中邊論に依りて、乘に五義あり、... 一に出離を體と爲す、二に眞如なり、三に... 願望を因と爲す、四に引出すが故に。三... に衆生を攝と爲す、根性の如く攝して果に... 至らしむるが故に。四に無上菩提を果と爲... す、究竟して此の果に至るが故に。五に三... 義を障と爲す、此の三義を除きて四義を成... ずるが故にと辨じ、又、乘の種別を分ちて、... 乘に八法あり、人に大乘人あり小乘人あり、... 法に方便乘法あり正乘法あり。方便乘を轉... し正乘を修治するが故に救濟乘と名く。又、... 二種あり。一に了義一乘、二に密意一乘な... り。又、二種あり。一に定性の菩薩の爲め... 一乘と説き、二に不定性の聲聞菩薩の爲... めに一乘と説くと示し、斯くて、法華・涅槃... の二經及び佛性論に據りて、此等の經論に... 準するに、一乘を究竟と爲し、三乘を方便... と爲すと辨し、次に問答を設けて、解深密... 經には、密意を以て一乘を説くと云ひ、華... 譯講大業論には、不定性の爲めに諸佛一乘... を説くと云ふ、その意如何と問ひ、答ふる... に、凡そ一乘に二あり。一に密意一乘、二... に究竟一乘なり。深密・攝論等は是れ密意一... 乘、法華經等は是れ究竟二乘なり、此れを... 釋するに二門の分別あり。一に遠異、二に... 兩文を引きて對顯する是れなりとし、遠異... の下、凡そ九あり。一に存三藏二の異、... 二に說時前後の異、三に說位不同の異、四... に彼同道同の異、五に分同全同の異、六に

結せしめて五十四個の眞角を持たしめた正... 方形の印影を以てあらはし、其の文を釋す... るに、一に總して印の意を釋し、二に別し... て印相を解するの二門を開き、別して印相... を解するの明し、更に一に印の文相を説き、... 二に字相を明し、三に文意を釋するの三門... を分ちて、二百一十字の要義を釋するに、華... 嚴一乘の深旨を同顯する。印を以てあらは... すのは、釋迦牟尼佛一化の教所攝の器・衆... 生・智正覺の三種世間は海印三昧より流出... 顯現せる一時現現の法門なることを示さん... が爲めであり、印文唯一道あるは、如來の一... 音を表せんがため、雲遊屈曲有るは衆生の... 機欲不同なることをあらはさんがため、... 前者は一乘教、後者は三乘教に當る。一... 道始終有ること無きは、善巧無方にして法界... に應稱し、十世相應圓融滿足することを顯... 示せんが爲め、四角四面なるは四攝四無... 量法を彰す。前者は圓教の義、後者は三乘... に約して、因果不同なることを顯し、字... 相多きは、三乘の根欲差別不同なること... をあらはさんがためである。法性圓融無二... 相乃至「舊來不動名爲佛」の「法」佛の始... 終の二字を當中に安置するは、因果の兩位... は法性家内の眞實の徳用にして性中道に在... ることを表す。而して本書は是れを釋す... るに、天親論主の十地經論に依りて、六相... の方便を以て釋顯する。蓋し六相圓融の妙... 義は、甚くところ、十地經論を所宗とする... 地論家の教相に在りて、其の祖後諸大覺等... 慧光に其の端を發し、遺意・聖裕・彰潤・智

有會無會の異、七に合三圓一の異、八に爲... 人勝劣の異、九に說義不同の異これなりと... し、華嚴・法華・涅槃・深密・大集十輪・勝天王... 般若・仁王般若・華嚴論等を引きて、詳細... に之れを釋する。引文對顯の下は、解深密... 經の二文、顯揚聖教論の六義一乘の文に依... り、佛光大般若經、出生菩提心經、大威徳... 陀羅尼經及び華嚴講大業論並に無性講大業... 論の文を引きて密意一乘の經論の文を明か... にし、次に勝鬘經の「二乘入一乘、一乘即大... 乘」の文及び法華經の「十方世界中唯一乘... 法無二亦無三除佛方便説」の文及及び法華... 經の「一切衆生皆歸一導師」の文及び法華... 論の六種授記の文等、總じて究竟一乘の七... 文を引き、大般若經、十法經並に法華論、... 華嚴講大業論の文を引きて之れを説明し、... 以て究竟一乘の經論の明文を攝示する。佛... 性同異章は、初めに華嚴講大業論に依りて、... 法界の五義を示し、究竟一乘實性論に十義... ありと云ひ、華嚴・楞伽・勝鬘・如來藏・大般若... 若・菩薩地持・菩薩戒等の諸經、起信・瑜... 伽・佛性等諸論諸説の義を和會して佛性の... 義を明かにし、更に四番の問答を設け、廣... く華嚴・涅槃・法華・勝鬘・如來藏・無上依・楞... 伽・密嚴・須眞天子所問・菩薩藏等諸經地持... 等の諸經、起信・瑜伽・莊嚴・佛性・乘唐攝論... 實性等の諸論に依りて、和會釋顯する。本書... の原本は田中伯僧家珍藏、其の別天文字を... 使用するものあるに依りて、著者自筆の原... 本が、然らざれば、撰者の時代を去ること遠... からざる時代の古寫たることを知り得る。  
吾が學界の影響一般に就ては、大安寺慶俊

僧都の記六卷の作ありし事實に徴して、そ... の大なるものありしことを推定し得る。  
⑦(參考) 東城傳燈目錄卷下、請宗章疏錄... 第一  
一 乘佛性究竟論記 ○(日) Ichijō... bus-shū-ku-kyō-ton. ④全六卷中第三卷... 存餘同。⑤存、出讀一九五・四〇廣法寶遠... ⑥永超の東城傳燈目錄卷下、安論の三論宗... 章疏等に依ると、「一乘佛性究竟論六卷より成... 實述と見えて、即ち本書は一部六卷より成... りしものと考へられるが、惜しい成既に散... 佚に歸して、僅に第三卷を存するに過ぎな... い。水超及び安論の目錄に依ると、大安寺... 慶俊に「一乘佛性究竟論」六卷の著ありと... 傳へ、即ち本書を疏釋したものと考へられ... るが、これ亦同じ散佚に歸して、其の殘缺... をする見ざるを得ざるを遺憾とする。著者法... 寶は、俗姓・鄭貫は元より示寂年月をも詳か... にしない。涅槃を以て宗とし、又、支非三

一 乘法界圖記

○(日) Ichijō... kat-en-ki. (支) Ichijō... kat-en-ki. ④全六卷中第三卷... 存餘同。⑤存、出讀一九五・四〇廣法寶遠... ⑥永超の東城傳燈目錄卷下、安論の三論宗... 章疏等に依ると、「一乘佛性究竟論六卷より成... 實述と見えて、即ち本書は一部六卷より成... りしものと考へられるが、惜しい成既に散... 佚に歸して、僅に第三卷を存するに過ぎな... い。水超及び安論の目錄に依ると、大安寺... 慶俊に「一乘佛性究竟論」六卷の著ありと... 傳へ、即ち本書を疏釋したものと考へられ... るが、これ亦同じ散佚に歸して、其の殘缺... をする見ざるを得ざるを遺憾とする。著者法... 寶は、俗姓・鄭貫は元より示寂年月をも詳か... にしない。涅槃を以て宗とし、又、支非三

一 乘法界圖記 ○(日) Ichijō... kat-en-ki. (支) Ichijō... kat-en-ki. ④全六卷中第三卷... 存餘同。⑤存、出讀一九五・四〇廣法寶遠... ⑥永超の東城傳燈目錄卷下、安論の三論宗... 章疏等に依ると、「一乘佛性究竟論六卷より成... 實述と見えて、即ち本書は一部六卷より成... りしものと考へられるが、惜しい成既に散... 佚に歸して、僅に第三卷を存するに過ぎな... い。水超及び安論の目錄に依ると、大安寺... 慶俊に「一乘佛性究竟論」六卷の著ありと... 傳へ、即ち本書を疏釋したものと考へられ... るが、これ亦同じ散佚に歸して、其の殘缺... をする見ざるを得ざるを遺憾とする。著者法... 寶は、俗姓・鄭貫は元より示寂年月をも詳か... にしない。涅槃を以て宗とし、又、支非三

一 乘法界圖記 ○(日) Ichijō... kat-en-ki. (支) Ichijō... kat-en-ki. ④全六卷中第三卷... 存餘同。⑤存、出讀一九五・四〇廣法寶遠... ⑥永超の東城傳燈目錄卷下、安論の三論宗... 章疏等に依ると、「一乘佛性究竟論六卷より成... 實述と見えて、即ち本書は一部六卷より成... りしものと考へられるが、惜しい成既に散... 佚に歸して、僅に第三卷を存するに過ぎな... い。水超及び安論の目錄に依ると、大安寺... 慶俊に「一乘佛性究竟論」六卷の著ありと... 傳へ、即ち本書を疏釋したものと考へられ... るが、これ亦同じ散佚に歸して、其の殘缺... をする見ざるを得ざるを遺憾とする。著者法... 寶は、俗姓・鄭貫は元より示寂年月をも詳か... にしない。涅槃を以て宗とし、又、支非三

一 乘法界圖記 ○(日) Ichijō... kat-en-ki. (支) Ichijō... kat-en-ki. ④全六卷中第三卷... 存餘同。⑤存、出讀一九五・四〇廣法寶遠... ⑥永超の東城傳燈目錄卷下、安論の三論宗... 章疏等に依ると、「一乘佛性究竟論六卷より成... 實述と見えて、即ち本書は一部六卷より成... りしものと考へられるが、惜しい成既に散... 佚に歸して、僅に第三卷を存するに過ぎな... い。水超及び安論の目錄に依ると、大安寺... 慶俊に「一乘佛性究竟論」六卷の著ありと... 傳へ、即ち本書を疏釋したものと考へられ... るが、これ亦同じ散佚に歸して、其の殘缺... をする見ざるを得ざるを遺憾とする。著者法... 寶は、俗姓・鄭貫は元より示寂年月をも詳か... にしない。涅槃を以て宗とし、又、支非三

は、事に即する攝法の分齊「無量劫劫即一念、一念即是無量劫、九世十世互相即、仍不離無一隔別成」の四句は、世時に約して攝法の分齊を示し「初發心時便正覺、生死涅槃常共和」の二句は、位に約して攝法の分齊を示し、最後の「理事冥然無分別、十佛善賢大人境」の二句は、總じて上意を論ずる。「即入三摩印三昧中、雲出如意不思議、兩寶生滿虛空、衆生隨得利益」等の四句の利他行に約するの下は解し易い。「是故行者還本際、回心空寂」必不不得、無緣善巧提如意、歸家隨分得寶藏、以陀羅尼無盡寶、莊嚴法界寶莊嚴、窮坐寶中道床、寶來不動名爲佛」の八句は、一に修行の方便を明し、二に得利益を明す。文は解し易い。文章を解し畢りて後、更に十九番の問答を施設して圓教の深旨を明す。一に能詮法問答。二に證法問答。三に證法問答。この下寶首大師の華嚴五教章卷中、明す三性同異義と略ぼその意を同じくする。三に證分緣起差別問答。四に以自所證爲衆生說、與未不、異尋常差別問答。五に前後兩義差別問答。この下解法・行法の十佛を辨ずる。六に具辨有情善來成佛問答。七に歸惑問答。八に十玄緣起問答。以下十番に涉りて、寶首大師の五教章卷中、明す十玄緣起無碍法門義とその所説を大同にし、僅かに十玄門の次第を異にするに止まる。蓋し同じくその師智徳に承くることろの法門であらう。本書卷末に云ふ「一乘法界圖、合詩一印、依華嚴經及十地論、表二圓教宗要、總章元年七月十五日記、問、何

故不著通者名字、答、表二緣生諸法無有主故。又問、何故在年月日、答、示一切諸法依緣生故。又問、緣從何處來、答、從無明心中心來。無明心從何處來、答、從無始無明來。無始無明從何處來、答、從一如來。如如在何處、如如在自法性、法性以何爲相、以無分別爲相。是故一切尋常在「中道」無非無分別、以此義故、文首詩、法性圓融無二相(乃至)寶來不動名爲佛。意在於此。以て本書撰述の年時と、その趣旨を明かにし得られる。總章元年撰述尙在唐中、この年十月智顗示寂。恐くはその願下に於ての撰述であらう。本書の撰述に「華嚴宗香象大師末葉非人釋迦法師之執筆也。建曆二年三月三日始許於高山寺、以法勝寺同本二校、貫穴八呼」と見える。原本京都府尾尾高山寺法鼓台堂所藏。明慧上人の遺本の一に屬する。(今津洗稿) (大正四・五・七・一六・一七・一八・一九・二〇) (参考) 諸宗章疏卷第二、華嚴宗經論章疏目錄、奈良朝現在一切經目錄卷五(今津洗稿)

一乘要決 (日) Ichijō-yōketsu. 三卷。大正七四・三二七・三三〇。大日本佛教全集第三十二、惠心僧都全集第二〇。源信(天眞一)寛仁元。A. D. 905-1017。述。天台宗義に立脚して法華の一乘思想を強調し、一切衆生に佛性の遍通することを闡明し、法相三乘家に於ける五性各別説を破明せしめて、巻頭序文に於て撰述の動機、趣意、及びその内容一般を明かにして居る。即ち寛弘四年の歳十月病中に在りて、手を交しうし佛意を了せざらんことを歎じ、乃ち人をして經論章疏を尋らしめ亦自ら思擇し、自他の偏執を捨て、權智實智の深奥を探れる結果、遂に一乘眞實五乘方便の義を得たることを叙べ、總じて八門を以てその要を記すことを告げて居る。即ち上中下三卷八門を以て之を分別せる中、第一法華に依て一乘を立つるに就て、初めに法華經の十文を出だし、次に問答料簡を加へて一乘眞實の旨を明し、第二に餘經の二乗作佛の文を引くに就て、廣く諸經に貫つて具さに十九文を拾ひ、第三に無餘界の題心を辨ずるに、先づ教證理證併せて十六文を掲げ、次に料簡を加へて二乘の題心は界内外に通ずる旨を成す。第四に一切衆生有性成佛の文を引くに、初め法寶の引據となせる六經二論を出だし、次に作者自ら十二文を擧げて悉有佛性の義理を成じ、第五に定性二乘の永成の計を破するに就て、初めに經要、次に義要略略を引き、而して後に自ら八證を掲げ、第六には無性有情の執を述するに先づ經要を引き、次に究竟論、初足、義要略略等の所説を掲げ、最後に自ら亦八文を引きて之を論じ、第七に佛性の差別を辨ずるに就ては、初め法相宗の法爾無漏の種子を破斥し、次に瑜伽の眞如所緣々の種子を研詳し、更に法寶の三番の佛性を論辨し、而して後に正に天台の三因佛性を明す。第八に教の權實を辨せんとし、先づ法華の實教を明し、次に深奥の

了義教を明し、第三に餘教の一乘を辨じて、遂に法華の一乘常住佛性を以て究竟眞實なることを闡明し強調せられて居る。(参考) 東城傳燈目錄卷下、本朝台祖撰述書目、山家祖德撰述書目集卷下。(高橋弘) 一乘略觀 (日) Ichijō-rakkan. 一卷。圓珍(弘仁五)寛平三。A. D. 811-801。説寛平四、年七八歳。述。平安末期寫。寶壽院、特・一六。一乘儀軌 (日) Ichijō-gi. 一卷。存。一乘儀軌(一)成儀軌(一)一文。存。一乘儀軌(二)成儀軌(二)一文。存。一乘儀軌(三)成儀軌(三)一文。存。一乘儀軌(四)成儀軌(四)一文。存。一乘儀軌(五)成儀軌(五)一文。存。一乘儀軌(六)成儀軌(六)一文。存。一乘儀軌(七)成儀軌(七)一文。存。一乘儀軌(八)成儀軌(八)一文。存。一乘儀軌(九)成儀軌(九)一文。存。一乘儀軌(十)成儀軌(十)一文。存。一乘儀軌(十一)成儀軌(十一)一文。存。一乘儀軌(十二)成儀軌(十二)一文。存。一乘儀軌(十三)成儀軌(十三)一文。存。一乘儀軌(十四)成儀軌(十四)一文。存。一乘儀軌(十五)成儀軌(十五)一文。存。一乘儀軌(十六)成儀軌(十六)一文。存。一乘儀軌(十七)成儀軌(十七)一文。存。一乘儀軌(十八)成儀軌(十八)一文。存。一乘儀軌(十九)成儀軌(十九)一文。存。一乘儀軌(二十)成儀軌(二十)一文。存。一乘儀軌(二十一)成儀軌(二十一)一文。存。一乘儀軌(二十二)成儀軌(二十二)一文。存。一乘儀軌(二十三)成儀軌(二十三)一文。存。一乘儀軌(二十四)成儀軌(二十四)一文。存。一乘儀軌(二十五)成儀軌(二十五)一文。存。一乘儀軌(二十六)成儀軌(二十六)一文。存。一乘儀軌(二十七)成儀軌(二十七)一文。存。一乘儀軌(二十八)成儀軌(二十八)一文。存。一乘儀軌(二十九)成儀軌(二十九)一文。存。一乘儀軌(三十)成儀軌(三十)一文。存。一乘儀軌(三十一)成儀軌(三十一)一文。存。一乘儀軌(三十二)成儀軌(三十二)一文。存。一乘儀軌(三十三)成儀軌(三十三)一文。存。一乘儀軌(三十四)成儀軌(三十四)一文。存。一乘儀軌(三十五)成儀軌(三十五)一文。存。一乘儀軌(三十六)成儀軌(三十六)一文。存。一乘儀軌(三十七)成儀軌(三十七)一文。存。一乘儀軌(三十八)成儀軌(三十八)一文。存。一乘儀軌(三十九)成儀軌(三十九)一文。存。一乘儀軌(四十)成儀軌(四十)一文。存。一乘儀軌(四十一)成儀軌(四十一)一文。存。一乘儀軌(四十二)成儀軌(四十二)一文。存。一乘儀軌(四十三)成儀軌(四十三)一文。存。一乘儀軌(四十四)成儀軌(四十四)一文。存。一乘儀軌(四十五)成儀軌(四十五)一文。存。一乘儀軌(四十六)成儀軌(四十六)一文。存。一乘儀軌(四十七)成儀軌(四十七)一文。存。一乘儀軌(四十八)成儀軌(四十八)一文。存。一乘儀軌(四十九)成儀軌(四十九)一文。存。一乘儀軌(五十)成儀軌(五十)一文。存。一乘儀軌(五十一)成儀軌(五十一)一文。存。一乘儀軌(五十二)成儀軌(五十二)一文。存。一乘儀軌(五十三)成儀軌(五十三)一文。存。一乘儀軌(五十四)成儀軌(五十四)一文。存。一乘儀軌(五十五)成儀軌(五十五)一文。存。一乘儀軌(五十六)成儀軌(五十六)一文。存。一乘儀軌(五十七)成儀軌(五十七)一文。存。一乘儀軌(五十八)成儀軌(五十八)一文。存。一乘儀軌(五十九)成儀軌(五十九)一文。存。一乘儀軌(六十)成儀軌(六十)一文。存。一乘儀軌(六十一)成儀軌(六十一)一文。存。一乘儀軌(六十二)成儀軌(六十二)一文。存。一乘儀軌(六十三)成儀軌(六十三)一文。存。一乘儀軌(六十四)成儀軌(六十四)一文。存。一乘儀軌(六十五)成儀軌(六十五)一文。存。一乘儀軌(六十六)成儀軌(六十六)一文。存。一乘儀軌(六十七)成儀軌(六十七)一文。存。一乘儀軌(六十八)成儀軌(六十八)一文。存。一乘儀軌(六十九)成儀軌(六十九)一文。存。一乘儀軌(七十)成儀軌(七十)一文。存。一乘儀軌(七十一)成儀軌(七十一)一文。存。一乘儀軌(七十二)成儀軌(七十二)一文。存。一乘儀軌(七十三)成儀軌(七十三)一文。存。一乘儀軌(七十四)成儀軌(七十四)一文。存。一乘儀軌(七十五)成儀軌(七十五)一文。存。一乘儀軌(七十六)成儀軌(七十六)一文。存。一乘儀軌(七十七)成儀軌(七十七)一文。存。一乘儀軌(七十八)成儀軌(七十八)一文。存。一乘儀軌(七十九)成儀軌(七十九)一文。存。一乘儀軌(八十)成儀軌(八十)一文。存。一乘儀軌(八十一)成儀軌(八十一)一文。存。一乘儀軌(八十二)成儀軌(八十二)一文。存。一乘儀軌(八十三)成儀軌(八十三)一文。存。一乘儀軌(八十四)成儀軌(八十四)一文。存。一乘儀軌(八十五)成儀軌(八十五)一文。存。一乘儀軌(八十六)成儀軌(八十六)一文。存。一乘儀軌(八十七)成儀軌(八十七)一文。存。一乘儀軌(八十八)成儀軌(八十八)一文。存。一乘儀軌(八十九)成儀軌(八十九)一文。存。一乘儀軌(九十)成儀軌(九十)一文。存。一乘儀軌(九十一)成儀軌(九十一)一文。存。一乘儀軌(九十二)成儀軌(九十二)一文。存。一乘儀軌(九十三)成儀軌(九十三)一文。存。一乘儀軌(九十四)成儀軌(九十四)一文。存。一乘儀軌(九十五)成儀軌(九十五)一文。存。一乘儀軌(九十六)成儀軌(九十六)一文。存。一乘儀軌(九十七)成儀軌(九十七)一文。存。一乘儀軌(九十八)成儀軌(九十八)一文。存。一乘儀軌(九十九)成儀軌(九十九)一文。存。一乘儀軌(一百)成儀軌(一百)一文。存。一乘儀軌(一百零一)成儀軌(一百零一)一文。存。一乘儀軌(一百零二)成儀軌(一百零二)一文。存。一乘儀軌(一百零三)成儀軌(一百零三)一文。存。一乘儀軌(一百零四)成儀軌(一百零四)一文。存。一乘儀軌(一百零五)成儀軌(一百零五)一文。存。一乘儀軌(一百零六)成儀軌(一百零六)一文。存。一乘儀軌(一百零七)成儀軌(一百零七)一文。存。一乘儀軌(一百零八)成儀軌(一百零八)一文。存。一乘儀軌(一百零九)成儀軌(一百零九)一文。存。一乘儀軌(一百一十)成儀軌(一百一十)一文。存。一乘儀軌(一百一十一)成儀軌(一百一十一)一文。存。一乘儀軌(一百一十二)成儀軌(一百一十二)一文。存。一乘儀軌(一百一十三)成儀軌(一百一十三)一文。存。一乘儀軌(一百一十四)成儀軌(一百一十四)一文。存。一乘儀軌(一百一十五)成儀軌(一百一十五)一文。存。一乘儀軌(一百一十六)成儀軌(一百一十六)一文。存。一乘儀軌(一百一十七)成儀軌(一百一十七)一文。存。一乘儀軌(一百一十八)成儀軌(一百一十八)一文。存。一乘儀軌(一百一十九)成儀軌(一百一十九)一文。存。一乘儀軌(一百二十)成儀軌(一百二十)一文。存。一乘儀軌(一百二十一)成儀軌(一百二十一)一文。存。一乘儀軌(一百二十二)成儀軌(一百二十二)一文。存。一乘儀軌(一百二十三)成儀軌(一百二十三)一文。存。一乘儀軌(一百二十四)成儀軌(一百二十四)一文。存。一乘儀軌(一百二十五)成儀軌(一百二十五)一文。存。一乘儀軌(一百二十六)成儀軌(一百二十六)一文。存。一乘儀軌(一百二十七)成儀軌(一百二十七)一文。存。一乘儀軌(一百二十八)成儀軌(一百二十八)一文。存。一乘儀軌(一百二十九)成儀軌(一百二十九)一文。存。一乘儀軌(一百三十)成儀軌(一百三十)一文。存。一乘儀軌(一百三十一)成儀軌(一百三十一)一文。存。一乘儀軌(一百三十二)成儀軌(一百三十二)一文。存。一乘儀軌(一百三十三)成儀軌(一百三十三)一文。存。一乘儀軌(一百三十四)成儀軌(一百三十四)一文。存。一乘儀軌(一百三十五)成儀軌(一百三十五)一文。存。一乘儀軌(一百三十六)成儀軌(一百三十六)一文。存。一乘儀軌(一百三十七)成儀軌(一百三十七)一文。存。一乘儀軌(一百三十八)成儀軌(一百三十八)一文。存。一乘儀軌(一百三十九)成儀軌(一百三十九)一文。存。一乘儀軌(一百四十)成儀軌(一百四十)一文。存。一乘儀軌(一百四十一)成儀軌(一百四十一)一文。存。一乘儀軌(一百四十二)成儀軌(一百四十二)一文。存。一乘儀軌(一百四十三)成儀軌(一百四十三)一文。存。一乘儀軌(一百四十四)成儀軌(一百四十四)一文。存。一乘儀軌(一百四十五)成儀軌(一百四十五)一文。存。一乘儀軌(一百四十六)成儀軌(一百四十六)一文。存。一乘儀軌(一百四十七)成儀軌(一百四十七)一文。存。一乘儀軌(一百四十八)成儀軌(一百四十八)一文。存。一乘儀軌(一百四十九)成儀軌(一百四十九)一文。存。一乘儀軌(一百五十)成儀軌(一百五十)一文。存。一乘儀軌(一百五十一)成儀軌(一百五十一)一文。存。一乘儀軌(一百五十二)成儀軌(一百五十二)一文。存。一乘儀軌(一百五十三)成儀軌(一百五十三)一文。存。一乘儀軌(一百五十四)成儀軌(一百五十四)一文。存。一乘儀軌(一百五十五)成儀軌(一百五十五)一文。存。一乘儀軌(一百五十六)成儀軌(一百五十六)一文。存。一乘儀軌(一百五十七)成儀軌(一百五十七)一文。存。一乘儀軌(一百五十八)成儀軌(一百五十八)一文。存。一乘儀軌(一百五十九)成儀軌(一百五十九)一文。存。一乘儀軌(一百六十)成儀軌(一百六十)一文。存。一乘儀軌(一百六十一)成儀軌(一百六十一)一文。存。一乘儀軌(一百六十二)成儀軌(一百六十二)一文。存。一乘儀軌(一百六十三)成儀軌(一百六十三)一文。存。一乘儀軌(一百六十四)成儀軌(一百六十四)一文。存。一乘儀軌(一百六十五)成儀軌(一百六十五)一文。存。一乘儀軌(一百六十六)成儀軌(一百六十六)一文。存。一乘儀軌(一百六十七)成儀軌(一百六十七)一文。存。一乘儀軌(一百六十八)成儀軌(一百六十八)一文。存。一乘儀軌(一百六十九)成儀軌(一百六十九)一文。存。一乘儀軌(一百七十)成儀軌(一百七十)一文。存。一乘儀軌(一百七十一)成儀軌(一百七十一)一文。存。一乘儀軌(一百七十二)成儀軌(一百七十二)一文。存。一乘儀軌(一百七十三)成儀軌(一百七十三)一文。存。一乘儀軌(一百七十四)成儀軌(一百七十四)一文。存。一乘儀軌(一百七十五)成儀軌(一百七十五)一文。存。一乘儀軌(一百七十六)成儀軌(一百七十六)一文。存。一乘儀軌(一百七十七)成儀軌(一百七十七)一文。存。一乘儀軌(一百七十八)成儀軌(一百七十八)一文。存。一乘儀軌(一百七十九)成儀軌(一百七十九)一文。存。一乘儀軌(一百八十)成儀軌(一百八十)一文。存。一乘儀軌(一百八十一)成儀軌(一百八十一)一文。存。一乘儀軌(一百八十二)成儀軌(一百八十二)一文。存。一乘儀軌(一百八十三)成儀軌(一百八十三)一文。存。一乘儀軌(一百八十四)成儀軌(一百八十四)一文。存。一乘儀軌(一百八十五)成儀軌(一百八十五)一文。存。一乘儀軌(一百八十六)成儀軌(一百八十六)一文。存。一乘儀軌(一百八十七)成儀軌(一百八十七)一文。存。一乘儀軌(一百八十八)成儀軌(一百八十八)一文。存。一乘儀軌(一百八十九)成儀軌(一百八十九)一文。存。一乘儀軌(一百九十)成儀軌(一百九十)一文。存。一乘儀軌(一百九十一)成儀軌(一百九十一)一文。存。一乘儀軌(一百九十二)成儀軌(一百九十二)一文。存。一乘儀軌(一百九十三)成儀軌(一百九十三)一文。存。一乘儀軌(一百九十四)成儀軌(一百九十四)一文。存。一乘儀軌(一百九十五)成儀軌(一百九十五)一文。存。一乘儀軌(一百九十六)成儀軌(一百九十六)一文。存。一乘儀軌(一百九十七)成儀軌(一百九十七)一文。存。一乘儀軌(一百九十八)成儀軌(一百九十八)一文。存。一乘儀軌(一百九十九)成儀軌(一百九十九)一文。存。一乘儀軌(二百)成儀軌(二百)一文。存。一乘儀軌(二百零一)成儀軌(二百零一)一文。存。一乘儀軌(二百零二)成儀軌(二百零二)一文。存。一乘儀軌(二百零三)成儀軌(二百零三)一文。存。一乘儀軌(二百零四)成儀軌(二百零四)一文。存。一乘儀軌(二百零五)成儀軌(二百零五)一文。存。一乘儀軌(二百零六)成儀軌(二百零六)一文。存。一乘儀軌(二百零七)成儀軌(二百零七)一文。存。一乘儀軌(二百零八)成儀軌(二百零八)一文。存。一乘儀軌(二百零九)成儀軌(二百零九)一文。存。一乘儀軌(二百一十)成儀軌(二百一十)一文。存。一乘儀軌(二百一十一)成儀軌(二百一十一)一文。存。一乘儀軌(二百一十二)成儀軌(二百一十二)一文。存。一乘儀軌(二百一十三)成儀軌(二百一十三)一文。存。一乘儀軌(二百一十四)成儀軌(二百一十四)一文。存。一乘儀軌(二百一十五)成儀軌(二百一十五)一文。存。一乘儀軌(二百一十六)成儀軌(二百一十六)一文。存。一乘儀軌(二百一十七)成儀軌(二百一十七)一文。存。一乘儀軌(二百一十八)成儀軌(二百一十八)一文。存。一乘儀軌(二百一十九)成儀軌(二百一十九)一文。存。一乘儀軌(二百二十)成儀軌(二百二十)一文。存。一乘儀軌(二百二十一)成儀軌(二百二十一)一文。存。一乘儀軌(二百二十二)成儀軌(二百二十二)一文。存。一乘儀軌(二百二十三)成儀軌(二百二十三)一文。存。一乘儀軌(二百二十四)成儀軌(二百二十四)一文。存。一乘儀軌(二百二十五)成儀軌(二百二十五)一文。存。一乘儀軌(二百二十六)成儀軌(二百二十六)一文。存。一乘儀軌(二百二十七)成儀軌(二百二十七)一文。存。一乘儀軌(二百二十八)成儀軌(二百二十八)一文。存。一乘儀軌(二百二十九)成儀軌(二百二十九)一文。存。一乘儀軌(二百三十)成儀軌(二百三十)一文。存。一乘儀軌(二百三十一)成儀軌(二百三十一)一文。存。一乘儀軌(二百三十二)成儀軌(二百三十二)一文。存。一乘儀軌(二百三十三)成儀軌(二百三十三)一文。存。一乘儀軌(二百三十四)成儀軌(二百三十四)一文。存。一乘儀軌(二百三十五)成儀軌(二百三十五)一文。存。一乘儀軌(二百三十六)成儀軌(二百三十六)一文。存。一乘儀軌(二百三十七)成儀軌(二百三十七)一文。存。一乘儀軌(二百三十八)成儀軌(二百三十八)一文。存。一乘儀軌(二百三十九)成儀軌(二百三十九)一文。存。一乘儀軌(二百四十)成儀軌(二百四十)一文。存。一乘儀軌(二百四十一)成儀軌(二百四十一)一文。存。一乘儀軌(二百四十二)成儀軌(二百四十二)一文。存。一乘儀軌(二百四十三)成儀軌(二百四十三)一文。存。一乘儀軌(二百四十四)成儀軌(二百四十四)一文。存。一乘儀軌(二百四十五)成儀軌(二百四十五)一文。存。一乘儀軌(二百四十六)成儀軌(二百四十六)一文。存。一乘儀軌(二百四十七)成儀軌(二百四十七)一文。存。一乘儀軌(二百四十八)成儀軌(二百四十八)一文。存。一乘儀軌(二百四十九)成儀軌(二百四十九)一文。存。一乘儀軌(二百五十)成儀軌(二百五十)一文。存。一乘儀軌(二百五十一)成儀軌(二百五十一)一文。存。一乘儀軌(二百五十二)成儀軌(二百五十二)一文。存。一乘儀軌(二百五十三)成儀軌(二百五十三)一文。存。一乘儀軌(二百五十四)成儀軌(二百五十四)一文。存。一乘儀軌(二百五十五)成儀軌(二百五十五)一文。存。一乘儀軌(二百五十六)成儀軌(二百五十六)一文。存。一乘儀軌(二百五十七)成儀軌(二百五十七)一文。存。一乘儀軌(二百五十八)成儀軌(二百五十八)一文。存。一乘儀軌(二百五十九)成儀軌(二百五十九)一文。存。一乘儀軌(二百六十)成儀軌(二百六十)一文。存。一乘儀軌(二百六十一)成儀軌(二百六十一)一文。存。一乘儀軌(二百六十二)成儀軌(二百六十二)一文。存。一乘儀軌(二百六十三)成儀軌(二百六十三)一文。存。一乘儀軌(二百六十四)成儀軌(二百六十四)一文。存。一乘儀軌(二百六十五)成儀軌(二百六十五)一文。存。一乘儀軌(二百六十六)成儀軌(二百六十六)一文。存。一乘儀軌(二百六十七)成儀軌(二百六十七)一文。存。一乘儀軌(二百六十八)成儀軌(二百六十八)一文。存。一乘儀軌(二百六十九)成儀軌(二百六十九)一文。存。一乘儀軌(二百七十)成儀軌(二百七十)一文。存。一乘儀軌(二百七十一)成儀軌(二百七十一)一文。存。一乘儀軌(二百七十二)成儀軌(二百七十二)一文。存。一乘儀軌(二百七十三)成儀軌(二百七十三)一文。存。一乘儀軌(二百七十四)成儀軌(二百七十四)一文。存。一乘儀軌(二百七十五)成儀軌(二百七十五)一文。存。一乘儀軌(二百七十六)成儀軌(二百七十六)一文。存。一乘儀軌(二百七十七)成儀軌(二百七十七)一文。存。一乘儀軌(二百七十八)成儀軌(二百七十八)一文。存。一乘儀軌(二百七十九)成儀軌(二百七十九)一文。存。一乘儀軌(二百八十)成儀軌(二百八十)一文。存。一乘儀軌(二百八十一)成儀軌(二百八十一)一文。存。一乘儀軌(二百八十二)成儀軌(二百八十二)一文。存。一乘儀軌(二百八十三)成儀軌(二百八十三)一文。存。一乘儀軌(二百八十四)成儀軌(二百八十四)一文。存。一乘儀軌(二百八十五)成儀軌(二百八十五)一文。存。一乘儀軌(二百八十六)成儀軌(二百八十六)一文。存。一乘儀軌(二百八十七)成儀軌(二百八十七)一文。存。一乘儀軌(二百八十八)成儀軌(二百八十八)一文。存。一乘儀軌(二百八十九)成儀軌(二百八十九)一文。存。一乘儀軌(二百九十)成儀軌(二百九十)一文。存。一乘儀軌(二百九十一)成儀軌(二百九十一)一文。存。一乘儀軌(二百九十二)成儀軌(二百九十二)一文。存。一乘儀軌(二百九十三)成儀軌(二百九十三)一文。存。一乘儀軌(二百九十四)成儀軌(二百九十四)一文。存。一乘儀軌(二百九十五)成儀軌(二百九十五)一文。存。一乘儀軌(二百九十六)成儀軌(二百九十六)一文。存。一乘儀軌(二百九十七)成儀軌(二百九十七)一文。存。一乘儀軌(二百九十八)成儀軌(二百九十八)一文。存。一乘儀軌(二百九十九)成儀軌(二百九十九)一文。存。一乘儀軌(三百)成儀軌(三百)一文。存。一乘儀軌(三百零一)成儀軌(三百零一)一文。存。一乘儀軌(三百零二)成儀軌(三百零二)一文。存。一乘儀軌(三百零三)成儀軌(三百零三)一文。存。一乘儀軌(三百零四)成儀軌(三百零四)一文。存。一乘儀軌(三百零五)成儀軌(三百零五)一文。存。一乘儀軌(三百零六)成儀軌(三百零六)一文。存。一乘儀軌(三百零七)成儀軌(三百零七)一文。存。一乘儀軌(三百零八)成儀軌(三百零八)一文。存。一乘儀軌(三百零九)成儀軌(三百零九)一文。存。一乘儀軌(三百一十)成儀軌(三百一十)一文。存。一乘儀軌(三百一十一)成儀軌(三百一十一)一文。存。一乘儀軌(三百一十二)成儀軌(三百一十二)一文。存。一乘儀軌(三百一十三)成儀軌(三百一十三)一文。存。一乘儀軌(三百一十四)成儀軌(三百一十四)一文。存。一乘儀軌(三百一十五)成儀軌(三百一十五)一文。存。一乘儀軌(三百一十六)成儀軌(三百一十六)一文。存。一乘儀軌(三百一十七)成儀軌(三百一十七)一文。存。一乘儀軌(三百一十八)成儀軌(三百一十八)一文。存。一乘儀軌(三百一十九)成儀軌(三百一十九)一文。存。一乘儀軌(三百二十)成儀軌(三百二十)一文。存。一乘儀軌(三百二十一)成儀軌(三百二十一)一文。存。一乘儀軌(三百二十二)成儀軌(三百二十二)一文。存。一乘儀軌(三百二十三)成儀軌(三百二十三)一文。存。一乘儀軌(三百二十四)成儀軌(三百二十四)一文。存。一乘儀軌(三百二十五)成儀軌(三百二十五)一文。存。一乘儀軌(三百二十六)成儀軌(三百二十六)一文。存。一乘儀軌(三百二十七)成儀軌(三百二十七)一文。存。一乘儀軌(三百二十八)成儀軌(三百二十八)一文。存。一乘儀軌(三百二十九)成儀軌(三百二十九)一文。存。一乘儀軌(三百三十)成儀軌(三百三十)一文。存。一乘儀軌(三百三十一)成儀軌(三百三十一)一文。存。一乘儀軌(三百三十二)成儀軌(三百三十二)一文。存。一乘儀軌(三百三十三)成儀軌(三百三十三)一文。存。一乘儀軌(三百三十四)成儀軌(三百三十四)一文。存。一乘儀軌(三百三十五)成儀軌(三百三十五)一文。存。一乘儀軌(三百三十六)成儀軌(三百三十六)一文。存。一乘儀軌(三百三十七)成儀軌(三百三十七)一文。存。一乘儀軌(三百三十八)成儀軌(三百三十八)一文。存。一乘儀軌(三百三十九)成儀軌(三百三十九)一文。存。一乘儀軌(三百四十)成儀軌(三百四十)一文。存。一乘儀軌(三百四十一)成儀軌(三百四十一)一文。存。一乘儀軌(三百四十二)成儀軌(三百四十二)一文。存。一乘儀軌(三百四十三)成儀軌(三百四十三)一文。存。一乘儀軌(三百四十四)成儀軌(三百四十四)一文。存。一乘儀軌(三百四十五)成儀軌(三百四十五)一文。存。一乘儀軌(三百四十六)成儀軌(三百四十六)一文。存。一乘儀軌(三百四十七)成儀軌(三百四十七)一文。存。一乘儀軌(三百四十八)成儀軌(三百四十八)一文。存。一乘儀軌(三百四十九)成儀軌(三百四十九)一文。存。一乘儀軌(三百五十)成儀軌(三百五十)一文。存。一乘儀軌(三百五十一)成儀軌(三百五十一)一文。存。一乘儀軌(三百五十二)成儀軌(三百五十二)一文。存。一乘儀軌(三百五十三)成儀軌(三百五十三)一文。存。一乘儀軌(三百五十四)成儀軌(三百五十四)一文。存。一乘儀軌(三百五十五)成儀軌(三百五十五)一文。存。一乘儀軌(三百五十六)成儀軌(三百五十六)一文。存。一乘儀軌(三百五十七)成儀軌(三百五十七)一文。存。一乘儀軌(三百五十八)成儀軌(三百五十八)一文。存。一乘儀軌(三百五十九)成儀軌(三百五十九)一文。存。一乘儀軌(三百六十)成儀軌(三百六十)一文。存。一乘儀軌(三百六十一)成儀軌(三百六十一)一文。存。一乘儀軌(三百六十二)成儀軌(三百六十二)一文。存。一乘儀軌(三百六十三)成儀軌(三百六十三)一文。存。一乘儀軌(三百六十四)成儀軌(三百六十四)一文。存。一乘儀軌(三百六十五)成儀軌(三百六十五)一文。存。一乘儀軌(三百六十六)成儀軌(三百六十六)一文。存。一乘儀軌(三百六十七)成儀軌(三百六十七)一文。存。一乘儀軌(三百六十八)成儀軌(三百六十八)一文。存。一乘儀軌(三百六十九)成儀軌(三百六十九)一文。存。一乘儀軌(三百七十)成儀軌(三百七十)一文。存。一乘儀軌(三百七十一)成儀軌(三百七十一)一文。存。一乘儀軌(三百七十二)成儀軌(三百七十二)一文。存。一乘儀軌(三百七十三)成儀軌(三百七十三)一文。存。一乘儀軌(三百七十四)成儀軌(三百七十四)一文。存。一乘儀軌(三百七十五)成儀軌(三百七十五)一文。存。一乘儀軌(三百七十六)成儀軌(三百七十六)一文。存。一乘儀軌(三百七十七)成儀軌(三百七十七)一文。存。一乘儀軌(三百七十八)成儀軌(三百七十八)一文。存。一乘儀軌(三百七十九)成儀軌(三百七十九)一文。存。一乘儀軌(三百八十)成儀軌(三百八十)一文。存。一乘儀軌(三百八十一)成儀軌(三百八十一)一文。存。一乘儀軌(三百八十二)成儀軌(三百八十二)一文。存。一乘儀軌(三百八十三)成儀軌(三百八十三)一文。存。一乘儀軌(三百八十四)成儀軌(三百八十四)一文。存。一乘儀軌(三百八十五)成儀軌(三百八十五)一文。存。一乘儀軌(三百八十六)成儀軌(三百八十六)一文。存。一乘儀軌(三百八十七)成儀軌(三百八十七)一文。存。一乘儀軌(三百八十八)成儀軌(三百八十八)一文。存。一乘儀軌(三百八十九)成儀軌(三百八十九)一文。存。一乘儀軌(三百九十)成儀軌(三百九十)一文。存。一乘儀軌(三百九十一)成儀軌(三百九十一)一文。存。一乘儀軌(三百九十二)成儀軌(三百九十二)一文。存。一乘儀軌(三百九十三)成儀軌(三百九十三)一文。存。一乘儀軌(三百九十四)成儀軌(三百九十四)一文。存。一乘儀軌(三百九十五)成儀軌(三百九十五)一文。存。一乘儀軌(三百九十六)成儀軌(三百九十六)一文。存。一乘儀軌(三百九十七)成儀軌(三百九十七)一文。存。一乘儀軌(三百九十八)成儀軌(三百九十八)一文。存。一乘儀軌(三百九十九)成儀軌(三百九十九)一文。存。一乘儀軌(四百)成儀軌(四百)一文。存。一乘儀軌(四百零一)成儀軌(四百零一)一文。存。一乘儀軌(四百零二)成儀軌(四百零二)一文。存。一乘儀軌(四百零三)成儀軌(四百零三)一文。存。一乘儀軌(四百零四)成儀軌(四百零四)一文。存。一乘儀軌(四百零五)成儀軌(四百零五)一文。存。一乘儀軌(四百零六)成儀軌(四百零六)一文。存。一乘儀軌(四百零七)成儀軌(四百零七)一文。存。一乘儀軌(四百零八)成儀軌(四百零八)一文。存。一乘儀軌(四百零九)成儀軌(四百零九)一文。存。一乘儀軌(四百一十)成儀軌(四百一十)一文。存。一乘儀軌(四百一十一)成儀軌(四百一十一)一文。存。一乘儀軌(四百一十二)成儀軌(四百一十二)一文。存。一乘儀軌(四百一十三)成儀軌(四百一十三)一文。存。一乘儀軌(四百一十四)成儀軌(四百一十四)一文。存。一乘儀軌(四百一十五)成儀軌(四百一十五)一文。存。一乘儀軌(四百一十六)成儀軌(四百一十六)一文。存。一乘儀軌(四百一十七)成儀軌(四百一十七)一文。存。一乘儀軌(四百一十八)成儀軌(四百一十八)一文。存。一乘儀軌(四百一十九)成儀軌(四百一十九)一文。存。一乘儀軌(四百二十)成儀軌(四百二十)一文。存。一乘儀軌(四百二十一)成儀軌(四百二十一)一文。存。一乘儀軌(四百二十二)成儀軌(四百二十二)一文。存。一乘儀軌(四百二十三)成儀軌(四百二十三)一文。存。一乘儀軌(四百二十四)成儀軌(四百二十四)一文。存。一乘儀軌(四百二十五)成儀軌(四百二十五)一文。存。一乘儀軌(四百二十六)成儀軌(四百二十六)一文。存。一乘儀軌(四百二十七)成儀軌(四百二十七)一文。存。一乘儀軌(四百二十八)成儀軌(四百二十八)一文。存。一乘儀軌(四百二十九)成儀軌(四百二十九)一文。存。一乘儀軌(四百三十)成儀軌(四百三十)一文。存。一乘儀軌(四百三十一)成儀軌(四百三十一)一文。存。一乘儀軌(四百三十二)成儀軌(四百三十二)一文。存。一乘儀軌(四百三十三)成儀軌(四百三十三)一文。存。一乘儀軌(四百三十四)成儀軌(四百三十四)一文。存。一乘儀軌(四百三十五)成儀軌(四百三十五)一文。存。一乘儀軌(四百三十六)成儀軌(四百三十六)一文。存。一乘儀軌(四百三十七)成儀軌(四百三十七)一文。存。一乘儀軌(四百三十八)成儀軌(四百三十八)一文。存。一乘儀軌(四百三十九)成儀軌(四百三十九)一文。存。一乘儀軌(四百四十)成儀軌(四百四十)一文。存。一乘儀軌(四百四十一)成儀軌(四百四十一)一文。存。一乘儀軌(四百四十二)成儀軌(四百四十二)一文。存。一乘儀軌(四百四十三)成儀軌(四百四十三)一文。存。一乘儀軌(四百四十四)成儀軌(四百四十四)一文。存。一乘儀軌(四百四十五)成儀軌(四百四十五)一文。存。一乘儀軌(四百四十六)成儀軌(四百四十六)一文。存。一乘儀軌(四百四十七)成儀軌(四百四十七)一文。存。一乘儀軌(四百四十八)成儀軌(四百四十八)一文。存。一乘儀軌(四百四十九)成儀軌(四百四十九)一文。存。一乘儀軌(四百五十)成儀軌(四百五十)一文。存。一乘儀軌(四百五十一)成儀軌(四百五十一)一文。存。一乘儀軌(四百五十二)成儀軌(四百五十二)一文。存。一乘儀軌(四百五十三)成儀軌(四百五十三)一文。存。一乘儀軌(四百五十四)成儀軌(四百五十四)一文。存。一乘儀軌(四百五十五)成儀軌(四百五十五)一文。存。一乘儀軌(四百五十六)成儀軌(四百五十六)一文。存。一乘儀軌(四百五十七)成儀軌(四百五十七)一文。存。一乘儀軌(四百五十八)成儀軌(四百五十八)一文。存。一乘儀軌(四百五十九)成儀軌(四百五十九)一文。存。一乘儀軌(四百六十)成儀軌(四百六十)一文。存。一乘儀軌(四百六十一)成儀軌(四百六十一)一文。存。一乘儀軌(四百六十二)成儀軌(四百六十二)一文。存。一乘儀軌(四百六十三)成儀軌(四百六十三)一文。存。一乘儀軌(四百六十四)成儀軌(四百六十四)一文。存。一乘儀軌(四百六十五)成儀軌(四百六十五)一文。存。一乘儀軌(四百六十六)成儀軌(四百六十六)一文。存。一乘儀軌(四百六十七)成儀軌(四百六十七)一文。存。一乘儀軌(四百六十八)成儀軌(四百六十八)一文。存。一乘儀軌(四百六十九)成儀軌(四百六十九)一文。存。一乘儀軌(四百七十)成儀軌(四百七十)一文。存。一乘儀軌(四百七十一)成儀軌(四百七十一)一文。存。一乘儀軌(四百七十二)成儀軌(四百七十二)一文。存。一乘儀軌(四百七十三)成儀軌(四百七十三)一文。存。一乘儀軌(四百七十四)成儀軌(四百七十四)一文。存。一乘儀軌(四百七十五)成儀軌(四百七十五)一文。存。一乘儀軌(四百七十六)成儀軌(四百七十六)一文。存。一乘儀軌(四百七十七)成儀軌(四百七十七)一文。存。一乘儀軌(四百七十八)成儀軌(四百七十八)一文。存。一乘儀軌(四百七十九)成儀軌(四百七十九)一文。存。一乘儀軌(四百八十)成儀軌(四百八十)一文。存。一乘儀軌(四百八十一)成儀軌(四百八十一)一文。存。一乘儀軌(四百八十二)成儀軌(四百八十二)一文。存。一乘儀軌(四百八十三)成儀軌(四百八十三)一文。存。一乘儀軌(四百八十四)成儀軌(四百八十四)一文。存。一乘儀軌(四百八十五)成儀軌(四百八十五)一文。存。一乘儀軌(四百八十六)成儀軌(四百八十六)一文。存。一乘儀軌(四百八十七)成儀軌(四百八十七)一文。存。一乘儀軌(四百八十八)成儀軌(四百八十八)一文。存。一乘儀軌(四百八十九)成儀軌(四百八十九)一文。存。一乘儀軌(四百九十)成儀軌(四百九十)一文。存。一乘儀軌(四百九十一)成儀軌(四百九十一)一文。存。一乘儀軌(四百九十二)成儀軌(四百九十二)一文。存。一乘儀軌(四百九十三)成儀軌(四百九十三)一文。存。一乘儀軌(四百九十四)成儀軌(四百九十四)一文。存。一乘儀軌(四百九十五)成儀軌(四百九十五)一文。存。一乘儀軌(四百九十六)成儀軌(四百九十六)一文。存。一乘儀軌(四百九十七)成儀軌(四百九十七)一文。存。一乘儀軌(四百九十八)成儀軌(四百九十八)一文。存。一乘儀軌(四百九十九)成儀軌(四百九十九)一文。存。一乘儀軌(五百)成儀軌(五百)一文。存。一乘儀軌(五百零一)成儀軌(五百零一)一文。存。一乘儀軌(五百零二)成儀軌(五百零二)一文。存。一乘儀軌(五百零三)成儀軌(五百零三)一文。存。一乘儀軌(五百零四)成儀軌(五百零四)一文。存。一乘儀軌(五百零五)成儀軌(五百零五)一文。存。一乘儀軌(五百零六)成儀軌(五百零六)一文。存。一乘儀軌(五百零七)成儀軌(五百零七)一文。存。一乘儀軌(五百零八)成儀軌(五百零八)一文。存。一乘儀軌(五百零九)成儀軌(五百零九)一文。存。一乘儀軌(五百一十)成儀軌(五百一十)一文。存。一乘儀軌(五百一十一)成儀軌(五百一十一)一文。存。一乘儀軌(五百一十二)成儀軌(五百一十二)一文。存。一乘儀軌(五百一十三)成儀軌(五百一十三)一文。存。一乘儀軌(五百一十四)成儀軌(五百一十四)一文。存。一乘儀軌(五百一十五)成儀軌(五百一十五)一文。存。一乘儀軌(五百一十六)成儀軌(五百一十六)一文。存。一乘儀軌(五百一十七)成儀軌(五百一十七)一文。存。一乘儀軌(五百一十八)成儀軌(五百一十八)一文。存。一乘儀軌(五百一十九)成儀軌(五百一十九)一文。存。一乘儀軌(五百二十)成儀軌(五百二十)一文。存。一乘儀軌(五百二十一)成儀軌(五百二十一)一文。存。一乘儀軌(五百二十二)成儀軌(五百二十二)一文。存。一乘儀軌(五百二十三)成儀軌(五百二十三)一文。存。一乘儀軌(五百二十四)成儀



金剛と名くるを、二、諸戒不同決は小乘大乘、共と別、願持と逆持の別を、三、受戒灌頂決は受戒の後に灌頂するは灌頂、受灌同時は實灌を、四、凡位即等覺決は受灌の儀式と受灌を、五、正像木攝化決は正像には善業を末法には惡業を戒とするを、六、梵網塔中二種相承決は梵網相承と雪山塔中相承とを、七、因分果分勝考決は梵網の因分戒と塔中の果分戒とを比較し、八、一心金剛攝受折伏決は正像を攝する善業の戒と、像木折伏の惡業の戒を、九、圓戒非戒決は金剛戒體は三學中の戒に非ざるを、十、果戒當住決は本果久遠の當戒は梵網令那も塔中釋迦も説かず、善業本佛に至つて初めて顯はるゝを説く。

受戒灌頂、惡業戒、梵網戒と法華戒とを區別して後者を優勝とし、果戒は自行防非の修行でないなどといふは、中古天台の本覺思想に屬するもので、到底最後之作とは考へられない。卷首の緣起に「一心金剛戒は兩宗の派あり。一には密教の金剛、二には今家の金剛なり」といふに依れば、東密に對立する意義をもつが、義疏は承和元年に入寂したから、この緣起も偽作である。蓋し南北朝頃のものであらう。

①刊本(各六、餘大・一九〇三)(大野法道) **一心金剛戒體決** ①(B) Ie-shin-kon-to-katai-keitsu. ①卷 ②存、廣身法功能鈔之内 ③義疏(天應元)天長一〇 A. D. 781-813 ④寫本(京大・藏・一六・二二)

**一心金剛戒體秘決** ①(B) Ie-shin-

Longchuan's Introduction. ②卷 ③存 傳教大師全集第四 ④最澄(神護景雲元)弘仁一三 A. D. 791-2 ⑤唐貞元二一(A. D. 805)三月三日

⑥圓頓戒の緣起たる一心金剛戒に關する道灌の口決を録した形で、題下に「沙門最澄傳授」とあり、奥に「延暦廿四年大唐貞元二十一年春三月三日台州臨海龍興寺淨土院に於て書す。本朝天台後學最澄判」とある。内容は上卷に正依法華傳授梵網、一心金剛戒の體、自性本具戒と成儀受得戒、圓戒の法體行相、梵網四分戒、善量果分戒、唯授一人の傳戒、圓頓三聖淨戒の三意たる傳授・發得・性得、性德本有の金剛の三業と本地三身を、下卷に衆生即佛、理即の戒行、本具六即、種熟說、一得永不失、正像木に被る善惡平等の戒、犯戒なき善戒と如来藏戒、外道乃至如來の五種戒、圓戒の内外遺漏、五道の衆生を所被とす、諸法實相の妙解の上の受戒を記す。

所説すべし日本天台の本覺思想の最高峰である。十界自位所造の善惡は、其まゝ全體に覺悟にして而も等覺ならざるものなし。それ此の如くんば九界の有情は本來善業戒を持す、何ぞ持不持を問はんや、善惡惡業持戒戒戒、若し能く其時に宜しければ皆是れ等覺、金剛の戒體なり」といふを基調とし、衆生の現相を全肯定していかなる所作も悉く戒行を成すものであり、一切の動作も皆無作三身の成儀であると説く。かかる思想は支那には加論最澄に見るべからざるものであるばかりでなく、本書は龜山帝の皇子

良助法親王(仁安一)の圓頓戒風韻口決、及び無名の同名の書と内容に於て多く共通するものがあるに依るに、蓋し南北朝時代のものではあらう。

①寫本(正大、一四八・二〇〇)刊本(各六、餘大・一九〇三)(哲・ろ・一・右・三〇)(大野法道)

**一心根本不退集** ①(B) Ie-shin-kon-to-katai-keitsu. ①卷 ②缺

③存、淨土真宗聖教目錄

**一心三觀** ①(B) Ie-shin-sang-kan. ①卷 ②存 ③延喜九刊(正大、一三五・六七)寬延三祐光寬(正大、一三三・七四)寫本(正大、一三五・六八)(各六、餘大・四九四)

**一心三觀集註** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu. ①卷 ②存 ③京大、Waseda-univ. ④一卷 ⑤存 ⑥京大、日大(二四四)

**一心三觀集要** ①(B) Ie-shin-sang-kan-essays. ①卷 ②存、淨土地觀要門集要之内 ③京大、藏・二二・一〇〇

**一心三觀相承論** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu-kyō. ①卷 ②存 ③圓仁(延暦一三)貞觀六 A. D. 791-805 ④寫本(一三) ⑤各六、餘大・三三三(八)

**一心三觀枕草紙** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu-makura. ①卷 ②存 ③Ie-shin-sang-kan-shu-makura-shu. 枕草紙 ④一卷 ⑤存 ⑥源信(天慶五)寬仁元 A. D. 942-1017 ⑦寫本三篇 ⑧各六、餘大・二九三(三)

**一心三觀文** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu-mon. 天台法華宗壇智一心三觀文、壇智一心三觀文 ②存、天台小部集釋第四

圓仁(延暦一三)貞觀六 A. D. 791-805)述 ①一部の大綱凡そ二段に分る。即ち初めに一心三觀圓融三諦の法門の由來相承を説いて、北齊の慧文禪師が初め大藏經中龍樹の中觀論を感得し、その因緣所生法即空假中の文に至つて不二法門に入り、而してその必要を以て南岳慧思禪師に傳へ、一轉して天台智顛に及ぶや即ちこの兩法門を同説せられしことを説き、爾來草安より以下圓仁に至る支那日本の相承を叙べる。次に壇智の一心三觀を説いて、一心の中の前念、後念の妄念を觀ずるに非ざる無きを述べ、而して三諦三觀は只これ不思議俱體俱用の法なる旨を示してある。

かくて本書は、天台の三觀三諦の法門の由來相承を示し、一心三觀の必要を説いて以て圓仁これを慧亮に付與せる形式に成れる短篇であつて、終りに「于時仁壽三年歲次癸酉三月二十一日甲午、入唐求學沙門圓仁謹付慧亮大律師」とあり、且つ從來廣く圓仁の作として行はるゝも、恐らくは後人の偽作となすべきものである。(附錄八)

**一心三觀枕** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu. ①卷 ②存、大日本佛教全集第一二四天台小部集釋天台小部集釋(文政一)刊(第一、天台小部集釋(敬光校正)第一五〇)源信(天慶五)寬仁元 A. D. 942-1017 ⑦源信(天慶五)寬仁元 A. D. 942-1017 ⑧天台宗の大事は圓融三諦の法門に過ぎることなきを述べて、一心三觀の要義を説けるもので、終りに山王利生の法門これに過ぎずと稱し、穴貫々々不可許といつて、

甚しく嚴重するの態度を示してある。蓋し傳(て)これを深信の作と稱するも、勿論後世の偽撰であらう。

①(參考) 諸宗章疏錄第二 (附錄八) **一心自覺頌** ①(B) Ie-shin-ji-kaku-shu. ②存、興教大師全集、密嚴諸經第八 ③覺經(嘉保二)康治二 A. D. 1095-1143 ④寫本

①興教大師の撰述されたものには、本書の外に「自覺」月輪經頌「秘密莊嚴經第一心頌」無相經頌等現在存在するが、その内容は全體同様のものである。本書はその名の示す如く一心を自覺することを勸誡したもので五字一句で百四句から成つてゐる。惟ふに佛教の目的は所説一心を自覺するに在るので、弘法大師の聖語の如く、佛法も眞如も迷悟も明暗も外界に存在せず一心の中に具足する。故に凡聖は一心の方向によつて定まるものなれば「諸佛は一心を悟り、衆生は萬境に迷す云々」といふ。從つて「一念自覺すれば本來涅槃」であるとの立場から一心の源底に徹し、一心所具の五智三密の體性を顯揚成就することが眞實密教の特色にして獨り七宗の外に超勝する所以であると闡述したものである。而して我等をして一心を自覺せしむるに就て、秘密傳燈の照傳教弘法の先德等が慇懃に遺教を垂れたことを述べ、人天を度せんせば先づ自己を度するの必要なる所以をば「聖向他度を度る、凡意ぞ自行を先とせざらん」と述べたのである。

①(參考) 諸宗章疏錄第三 (岡田製昌)

Longchuan's Introduction. ②卷 ③存 傳教大師全集第四 ④最澄(神護景雲元)弘仁一三 A. D. 791-2 ⑤唐貞元二一(A. D. 805)三月三日

⑥圓頓戒の緣起たる一心金剛戒に關する道灌の口決を録した形で、題下に「沙門最澄傳授」とあり、奥に「延暦廿四年大唐貞元二十一年春三月三日台州臨海龍興寺淨土院に於て書す。本朝天台後學最澄判」とある。内容は上卷に正依法華傳授梵網、一心金剛戒の體、自性本具戒と成儀受得戒、圓戒の法體行相、梵網四分戒、善量果分戒、唯授一人の傳戒、圓頓三聖淨戒の三意たる傳授・發得・性得、性德本有の金剛の三業と本地三身を、下卷に衆生即佛、理即の戒行、本具六即、種熟說、一得永不失、正像木に被る善惡平等の戒、犯戒なき善戒と如来藏戒、外道乃至如來の五種戒、圓戒の内外遺漏、五道の衆生を所被とす、諸法實相の妙解の上の受戒を記す。

所説すべし日本天台の本覺思想の最高峰である。十界自位所造の善惡は、其まゝ全體に覺悟にして而も等覺ならざるものなし。それ此の如くんば九界の有情は本來善業戒を持す、何ぞ持不持を問はんや、善惡惡業持戒戒戒、若し能く其時に宜しければ皆是れ等覺、金剛の戒體なり」といふを基調とし、衆生の現相を全肯定していかなる所作も悉く戒行を成すものであり、一切の動作も皆無作三身の成儀であると説く。かかる思想は支那には加論最澄に見るべからざるものであるばかりでなく、本書は龜山帝の皇子

良助法親王(仁安一)の圓頓戒風韻口決、及び無名の同名の書と内容に於て多く共通するものがあるに依るに、蓋し南北朝時代のものではあらう。

①寫本(正大、一四八・二〇〇)刊本(各六、餘大・一九〇三)(哲・ろ・一・右・三〇)(大野法道)

**一心根本不退集** ①(B) Ie-shin-kon-to-katai-keitsu. ①卷 ②缺

③存、淨土真宗聖教目錄

**一心三觀** ①(B) Ie-shin-sang-kan. ①卷 ②存 ③延喜九刊(正大、一三五・六七)寬延三祐光寬(正大、一三三・七四)寫本(正大、一三五・六八)(各六、餘大・四九四)

**一心三觀集註** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu. ①卷 ②存 ③京大、Waseda-univ. ④一卷 ⑤存 ⑥京大、日大(二四四)

**一心三觀集要** ①(B) Ie-shin-sang-kan-essays. ①卷 ②存、淨土地觀要門集要之内 ③京大、藏・二二・一〇〇

**一心三觀相承論** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu-kyō. ①卷 ②存 ③圓仁(延暦一三)貞觀六 A. D. 791-805 ④寫本(一三) ⑤各六、餘大・三三三(八)

**一心三觀枕草紙** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu-makura. ①卷 ②存 ③Ie-shin-sang-kan-shu-makura-shu. 枕草紙 ④一卷 ⑤存 ⑥源信(天慶五)寬仁元 A. D. 942-1017 ⑦寫本三篇 ⑧各六、餘大・二九三(三)

**一心三觀文** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu-mon. 天台法華宗壇智一心三觀文、壇智一心三觀文 ②存、天台小部集釋第四

圓仁(延暦一三)貞觀六 A. D. 791-805)述 ①一部の大綱凡そ二段に分る。即ち初めに一心三觀圓融三諦の法門の由來相承を説いて、北齊の慧文禪師が初め大藏經中龍樹の中觀論を感得し、その因緣所生法即空假中の文に至つて不二法門に入り、而してその必要を以て南岳慧思禪師に傳へ、一轉して天台智顛に及ぶや即ちこの兩法門を同説せられしことを説き、爾來草安より以下圓仁に至る支那日本の相承を叙べる。次に壇智の一心三觀を説いて、一心の中の前念、後念の妄念を觀ずるに非ざる無きを述べ、而して三諦三觀は只これ不思議俱體俱用の法なる旨を示してある。

かくて本書は、天台の三觀三諦の法門の由來相承を示し、一心三觀の必要を説いて以て圓仁これを慧亮に付與せる形式に成れる短篇であつて、終りに「于時仁壽三年歲次癸酉三月二十一日甲午、入唐求學沙門圓仁謹付慧亮大律師」とあり、且つ從來廣く圓仁の作として行はるゝも、恐らくは後人の偽作となすべきものである。(附錄八)

**一心三觀枕** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu. ①卷 ②存、大日本佛教全集第一二四天台小部集釋天台小部集釋(文政一)刊(第一、天台小部集釋(敬光校正)第一五〇)源信(天慶五)寬仁元 A. D. 942-1017 ⑦源信(天慶五)寬仁元 A. D. 942-1017 ⑧天台宗の大事は圓融三諦の法門に過ぎることなきを述べて、一心三觀の要義を説けるもので、終りに山王利生の法門これに過ぎずと稱し、穴貫々々不可許といつて、

①(參考) 諸宗章疏錄第二 (附錄八) **一心自覺頌** ①(B) Ie-shin-ji-kaku-shu. ②存、興教大師全集、密嚴諸經第八 ③覺經(嘉保二)康治二 A. D. 1095-1143 ④寫本

①興教大師の撰述されたものには、本書の外に「自覺」月輪經頌「秘密莊嚴經第一心頌」無相經頌等現在存在するが、その内容は全體同様のものである。本書はその名の示す如く一心を自覺することを勸誡したもので五字一句で百四句から成つてゐる。惟ふに佛教の目的は所説一心を自覺するに在るので、弘法大師の聖語の如く、佛法も眞如も迷悟も明暗も外界に存在せず一心の中に具足する。故に凡聖は一心の方向によつて定まるものなれば「諸佛は一心を悟り、衆生は萬境に迷す云々」といふ。從つて「一念自覺すれば本來涅槃」であるとの立場から一心の源底に徹し、一心所具の五智三密の體性を顯揚成就することが眞實密教の特色にして獨り七宗の外に超勝する所以であると闡述したものである。而して我等をして一心を自覺せしむるに就て、秘密傳燈の照傳教弘法の先德等が慇懃に遺教を垂れたことを述べ、人天を度せんせば先づ自己を度するの必要なる所以をば「聖向他度を度る、凡意ぞ自行を先とせざらん」と述べたのである。

①(參考) 諸宗章疏錄第三 (岡田製昌)

**一心目行記** ①(B) Ie-shin-ji-gyō-ki. ①卷 ②缺 ③圓仁(延暦一三)貞觀六 A. D. 791-805 ④(參考) 本朝合願撰述密部書目、山家祖德撰述諸目集卷上

**一心自受頌** ①(B) Ie-shin-ji-jo-shū. ①卷 ②缺 ③覺經(嘉保二)康治二 A. D. 1095-1143 ④(參考) 諸宗章疏錄第三

**一心章講義** ①(B) Ie-shin-jo-kyō. ①卷 ②存 ③寫本(龍大、二二四三七六)

**一心常安** ①(B) Ie-shin-jo-an. ①卷 ②存、近世佛敎集説之内 ③知足庵記 ④大正五刊 ⑤圖書刊行會

**一心專念事** ①(B) Ie-shin-jo-zen-nen-jō. ①卷 ②存 ③開華院法住(明治七) A. D. 1845 ④寫本(各六、餘大・二二六)

**一心二種正因虛實對辨** ①(B) Ie-shin-jo-ni-shū-shō-shū-kyō-ji-shū-shō-ten. ①卷 ②存 ③龍城(一文化)一〇 A. D. 1813 ④(龍大、一七九・一一)

**一心二種正因虛實對辨** ①(B) Ie-shin-jo-ni-shū-shō-shū-kyō-ji-shū-shō-ten. ①卷 ②存 ③龍城(一文化)一〇 A. D. 1813 ④(龍大、一七九・一一)

**一心二門大意** ①(B) Ie-shin-jo-ni-shū-shō-shū-kyō-ji-shū-shō-ten. ①卷 ②存、出版 起信論(一)三門大意 ③一巻 ④存、出版 一・二一・三 ⑤附智論(大同四)開皇一七 A. D. 538-597 ⑥(參考) 華嚴宗經論

章疏目錄

**一心本來抄並法語** ①(B) Ie-shin-jo-ni-shū-shō-shū-kyō-ji-shū-shō-ten. ①卷 ②存 ③寫本(各六、餘大・二二六)

**一心妙法教** ①(B) Ie-shin-jo-ni-shū-shō-shū-kyō-ji-shū-shō-ten. ①卷 ②存 ③有吾無我(延慶三)水徳元 A. D. 1310-1381 ④(參考) 柏堂共編(參考) 日本佛林撰述書目 ⑤安永九刊 ⑥各六、餘大・二八五七(正六、一八四・一四)

**一心六阿彌陀女人悟道經** ①(B) Ie-shin-jo-ni-shū-shō-shū-kyō-ji-shū-shō-ten. ①卷 ②存 ③文化三寫(正六、一五五・三)

**一身阿彌陀補任次第** ①(B) Ie-shin-jo-ni-shū-shō-shū-kyō-ji-shū-shō-ten. ①卷 ②存、大日本佛教全集第一二三興福寺叢書第一 ③宗性記

①一身阿彌陀は皇族若しくは攝關家出の貴介公子を擧げて補任し、當時一人に限られて居たので、一身阿彌陀と名けたのである。天祿四年に圓融天皇詔して、慈恩僧正を擧げて一身阿彌陀に任じたのが始である。本書は一身阿彌陀の補任次第を記したもので、尊稱(慈恩)を最初に一百一名を列してゐる。最初の三十人は僧位と出身を記し、以下は補任年月を注してある。列名の上部に山、寺、仁、東大と記して所属の地を示してゐる。

**一身四面大日之尊** ①(B) Ie-shin-jo-ni-shū-shō-shū-kyō-ji-shū-shō-ten. ①卷 ②存 ③徳川時代寫 ④(寶龜院)傳

圓仁(延暦一三)貞觀六 A. D. 791-805)述 ①一部の大綱凡そ二段に分る。即ち初めに一心三觀圓融三諦の法門の由來相承を説いて、北齊の慧文禪師が初め大藏經中龍樹の中觀論を感得し、その因緣所生法即空假中の文に至つて不二法門に入り、而してその必要を以て南岳慧思禪師に傳へ、一轉して天台智顛に及ぶや即ちこの兩法門を同説せられしことを説き、爾來草安より以下圓仁に至る支那日本の相承を叙べる。次に壇智の一心三觀を説いて、一心の中の前念、後念の妄念を觀ずるに非ざる無きを述べ、而して三諦三觀は只これ不思議俱體俱用の法なる旨を示してある。

かくて本書は、天台の三觀三諦の法門の由來相承を示し、一心三觀の必要を説いて以て圓仁これを慧亮に付與せる形式に成れる短篇であつて、終りに「于時仁壽三年歲次癸酉三月二十一日甲午、入唐求學沙門圓仁謹付慧亮大律師」とあり、且つ從來廣く圓仁の作として行はるゝも、恐らくは後人の偽作となすべきものである。(附錄八)

**一心三觀枕** ①(B) Ie-shin-sang-kan-shu. ①卷 ②存、大日本佛教全集第一二四天台小部集釋天台小部集釋(文政一)刊(第一、天台小部集釋(敬光校正)第一五〇)源信(天慶五)寬仁元 A. D. 942-1017 ⑦源信(天慶五)寬仁元 A. D. 942-1017 ⑧天台宗の大事は圓融三諦の法門に過ぎることなきを述べて、一心三觀の要義を説けるもので、終りに山王利生の法門これに過ぎずと稱し、穴貫々々不可許といつて、

①(參考) 諸宗章疏錄第二 (附錄八) **一心自覺頌** ①(B) Ie-shin-ji-kaku-shu. ②存、興教大師全集、密嚴諸經第八 ③覺經(嘉保二)康治二 A. D. 1095-1143 ④寫本

①興教大師の撰述されたものには、本書の外に「自覺」月輪經頌「秘密莊嚴經第一心頌」無相經頌等現在存在するが、その内容は全體同様のものである。本書はその名の示す如く一心を自覺することを勸誡したもので五字一句で百四句から成つてゐる。惟ふに佛教の目的は所説一心を自覺するに在るので、弘法大師の聖語の如く、佛法も眞如も迷悟も明暗も外界に存在せず一心の中に具足する。故に凡聖は一心の方向によつて定まるものなれば「諸佛は一心を悟り、衆生は萬境に迷す云々」といふ。從つて「一念自覺すれば本來涅槃」であるとの立場から一心の源底に徹し、一心所具の五智三密の體性を顯揚成就することが眞實密教の特色にして獨り七宗の外に超勝する所以であると闡述したものである。而して我等をして一心を自覺せしむるに就て、秘密傳燈の照傳教弘法の先德等が慇懃に遺教を垂れたことを述べ、人天を度せんせば先づ自己を度するの必要なる所以をば「聖向他度を度る、凡意ぞ自行を先とせざらん」と述べたのである。

①(參考) 諸宗章疏錄第三 (岡田製昌)

**一尊集** ①(B) Ie-shin-jo-shū. ①卷 ②存、弘仁一五(弘仁)一五三三 A. D. 814-891 ③一説寛平四年七八家撰 ④(參考) 本朝合願撰述密部書目

**一節集** ①(B) Ie-shin-jo-shū. ①卷 ②存 ③清代編心田撰 ④(參考) 撰述書目

**一先和尚閉夢錄** ①(B) Ie-shin-jo-shū. ①卷 ②存 ③(參考) 撰述書目

**一闡提往生義** ①(B) Ie-shin-jo-shū. ①卷 ②存、十二部集、眞宗小部集 ③僧壽(享保八)天明三 A. D. 1723-1783 ④先(經論)の文を引き、次に眞宗の教義に立つて、一闡提の往生を説ける小篇である。⑤寫本(龍大、一〇三・六)寫本(龍大、一五〇・一五五)

**一闡提目錄** ①(B) Ie-shin-jo-shū. ①卷 ②存、最澄(神護景雲元)弘仁一三 A. D. 791-805 ③(參考) 本朝合願撰述密部書目

**一闡提文** ①(B) Ie-shin-jo-shū. ①卷 ②存、最澄(神護景雲元)弘仁一三 A. D. 791-805 ③(參考) 本朝合願撰述密部書目、山家祖德撰述諸目集卷上

**一多證文義概** ①(B) Ie-shin-jo-shū. ①卷 ②存 ③(參考) 眞宗全書刊行決定書目

**一多證文略釋** ①(B) Ie-shin-jo-shū. ①卷 ②存 ③(參考) 眞宗全書刊行決定書目

①(參考) 諸宗章疏錄第三 (岡田製昌)

○(参考) 真宗全書刊行決定書目  
**一 多説文録** ○(日) Itō-takashi-mon-  
 roku. ① 1巻 ② 存 ③ 興隆(寶曆一〇一  
 天保一三 A. D. 1780-1842) ④ (参考)  
 真宗全書刊行決定書目  
**一 睡篇** ○(日) Jichi-ta-ken. 編界紅  
 雪一睡篇 ① 1巻 ② 存 ③ 寶隆(享  
 保五刊) ④ (谷大、餘大・三〇七五)  
**一 大事因縁生死事** ○(日) Jichi-  
 dai-ji-tan-en-ahō-jū-no-koto. ① 1巻 ②  
 存 ③ 寫本(高、大、寄・一・六四)  
**一 代肝心抄** ○(日) Jichi-tai-kan-  
 jin-shū. 顯心念佛略記、一念頌決 ① 1巻  
 ② 存、大日本佛教全書第二八智證大師全集  
 第四 ③ 圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814-  
 891) ④ 説寛平四年七八歳(説)  
 ○先づ生死流轉の根本は元初の一念に依る  
 ことを叙べて、元初の一念とは即ち迷初の  
 一念あり、迷初の一念とは本覺の理を障  
 ゆる元品無明であるとする。即ちこの無明  
 煩惱ありて、法性の覺性を覆ひ生死の闇雲  
 を起すことを明し、轉じてこの一念の中に  
 十界の依正あることを説いて、眞妄兩面の  
 深觀を示し三諦一念三千觀を教へ、而して  
 更に念佛思想を強調する。即ち十重五逆の  
 人も一念の理觀に依つて極樂に往生すべ  
 きと明けて、以て理觀の十念即ちこれ決定  
 往生樂なりと答へ、十念とは十界皆佛法な  
 りと了達する心なりと説いてある。  
 由来本書は、亦一に觀心念佛略記とも名  
 くることができ、初の題下及び本文末尾に依つて  
 知ることができ、而してその所く名くると

以のものも、理觀十念を以て決定往生樂な  
 りと説く本書の内容に照應して之を背き得  
 る。然るに従來、本書と全くその内容を同  
 じくして而も一念頌決と題し、前唐院(圓  
 仁)御作、都半覺題記と題する一本ありて、  
 現に日本大藏(天台宗編教藏二)に收載せ  
 られて居る。而巳ならずまた別に、都半覺  
 題記と題する一念頌決一巻ありて本書の鈔  
 註と略と全文を同じうし、以て甚しき混雜  
 を來してある。蓋し本書の作者に就いて、朝  
 幸はこれを圓珍の作に非ざるべしと稱し、  
 敬彦は却つてこれに與せざるが如く、古來  
 學者の異説あるを免れざる所であるが、恐  
 らくはこれ圓珍の作にあらず、また勿論圓  
 仁の所述にも非ずして、後人の偽作となす  
 べきであらう。  
 ○(参考) 山家祖徳撰述諸目集卷上  
**一 代經律論釋法數** ○(日) Jichi-  
 dai-kyō-ritsu-ron-shū-hō-shū. 大藏法  
 數 ① 六十九巻 ② 存 ③ 反照(寛  
 元刊) ④ 正、大、一〇・一九・一〇一・九七、  
 一〇一・一七(京大、藏・二・一・一)  
**一 代經論總釋** ○(日) Jichi-dai-kyō-  
 ron-shū-shaku. ① 1巻 ② 缺 ③ 千光述  
 ○(参考) 日本釋林撰述諸目集  
**一 代經論總釋** ○(日) Jichi-dai-kyō-  
 ron-shū-shaku. ① 1巻 ② 缺 ③ 榮西(永  
 治元—建保三 A. D. 1141-1215) 撰 ○(參  
 考) 山家祖徳撰述諸目集卷下  
**一 代決疑集** ○(日) Jichi-dai-kyō-  
 ge-ta-shū. ① 1巻 ② 存 ③ 良源(延喜二二—

寛和元 A. D. 915—925) 記 寫本(正、大、一  
 三七・九(京大、日大末・二五九) 永應二刊  
 (龍大、二六五・二) (谷大、餘大・二八一  
 五) (實、八・左・一五)  
**一 代五時記** ○(日) Jichi-dai-go-  
 ji. ① 十八巻 ② 存 ③ 日朝(應永二九—明  
 應九 A. D. 1432-1500) 述 ④ 明曆二刊  
 ○(立、大、A. O. 四・三四—三六)  
**一 代五時圖** ○(日) Jichi-dai-go-  
 ji-ezu. ① 1巻 ② 存、日蓮聖人御遺文 ③ 日蓮(貞應元  
 一弘安五 A. D. 1232-1280) 記 ④ 文應元  
 (A. D. 1250) ○(中山法華經寺藏)  
**一 代五時之圖** ○(日) Jichi-dai-go-  
 ji-ezu. ① 1巻 ② 存 ③ 足利時代寫  
 ○(寶龜院、相)  
**一 代聖教諸宗一覽** ○(日) Jichi-  
 dai-shō-kyō-shō-shū-tō-kan. ① 1巻 ② 存  
 ○大石日應著 ③ 大正一〇刊 ○(正  
 大、一八七・七) ○(東京正宗會本部)  
**一 代聖教大意** ○(日) Jichi-dai-shō-  
 kyō-tai-gei. ① 1巻 ② 存、原文  
 對開口語譯日蓮上人全集第六日蓮聖人御遺  
 文 ③ 日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1232-  
 1280) 述 ④ 正、貞應元(A. D. 1258)  
 ○日蓮が釋尊一代の聖教の大意を天台の教  
 判に依つて概説し、法華經のみが一切衆生  
 皆成佛の教であることを説いた書であ  
 る。先づ諸通別圓の化法四教を教理行果の  
 四法に分つて可なり詳説し、次に五時を説  
 いて法華以前の四十二年の聖教は法華經に  
 引入するの方便であること、法華經は  
 十界の一切衆生のために説いた經に二業も

善人も惡人も愚人も女人も畜生も、一切を  
 成佛させる經であること、他經に部分的  
 には成佛を許してあるが、其は法華經の一  
 念三千から同會せられなくては實効がない  
 ことを明し、最後に法華經は自力行、聖道  
 門、難行道であると誤解する者が多いが、  
 さすがに法然上人や慧心僧都らは法華經を  
 必ずしも難行や難行道に入れなかつた程  
 で、斯かる誤解は全く後人の邪説であると  
 斷じてある。  
**一 代心地抄** ○(日) Jichi-dai-shin-  
 shō. ① 1巻 ② 存 ③ 皇覺(天仁頃? A. D. 1108  
 一1109) 撰 ○(参考) 山家祖徳撰述諸目  
 集卷下  
**一 代說法大意和歌** ○(日) Jichi-  
 dai-setsu-ō-tai-ka. ① 1巻 ② 存  
 ○天保四刊 ○(龍大、二〇五四・一)  
**一 代要義** ○(日) Jichi-dai-yō-gei. ①  
 1巻或三巻 ② 缺 ③ 圓仁(延暦一三—貞觀  
 六 A. D. 791-856) 述 ○(参考) 山家祖徳  
 撰述諸目集卷上、書乘撰述諸目集  
**一 談解頤** ○(日) Jichi-dan-ka-ri.  
 ① 1巻 ② 存 ③ 鈴木意正著 ④ (参考)  
 大日本佛教全書續刊決定書目  
**一 時觀** ○(日) Jichi-cho-kan. ①  
 1巻 ② 存 ③ 寫本(高、大、寄・一・六九) 實  
 院(撰)  
**一 極碎瓦** ○(日) Jichi-kyū-sai-ka.  
 ① 1巻 ② 存 ③ 文棟(皇朝)享保五—文化一  
 ○ A. D. 1730-1813) 述 ④ 天保一四刊 ○

○(龍大) (谷大、餘大・三〇三四)  
**一 天四海五大洲大日蓮** ○(日)  
 Iten-shi-kai-go-dai-ohō-dai-nitchi-ten.  
 ① 1巻 ② 存 ③ 大村應太郎著 ④ 昭和三  
 刊 ○京都教文社  
**一 燈挑記** ○(日) Itō-tō-ki. ① 1巻  
 ② 存 ③ 月波道印(一延寶八 A. D. 1689) 記  
 ○(参考) 撰述諸目集  
**一 道義** ○(日) Jichi-dō-gei. (支) Ji-tō-  
 gei. ① 1巻 ② 缺 ③ 新編(元應) 眞  
 平三九 A. D. 617) 述 ○(参考) 東城  
 傳燈目録卷下、諸宗章疏卷第一、華嚴宗經  
 論章疏目録  
**一 道義五門分解** ○(日) Jichi-dō-  
 gei-go-mon-bun-ge. (支) Ji-tō-gei-go-mon-  
 bun-ge. ① 1巻 ② 缺 ③ (参考) 奈  
 良朝現在一切經疏目録 3144  
**一 道義五門分解章** ○(日) Jichi-dō-  
 gei-go-mon-bun-ge-shō. (支) Ji-tō-gei-go-  
 me-tō-gei-shō. ① 1巻 ② 缺  
 ○(参考) 奈良朝現在一切經疏目録 3143  
**一 道章** ○(日) Jichi-dō-shō. (支) Ji-  
 tō-shō. ① 1巻 ② 缺 ③ 新編  
 元應(眞平三九 A. D. 617) 述 ○(参考)  
 東城傳燈目録卷下、諸宗章疏卷第一、華嚴宗  
 經論章疏目録、奈良朝現在一切經疏目録 3143  
**一 得篇** ○(日) Itō-toku-hen. ① 1巻  
 ② 存 ③ (参考) 撰述諸目集  
**一 德養齋** ○(日) Itō-kyō-kan-  
 dan. ① 1巻 ② 存 ③ 中島親房(高永元—  
 大正一三 A. D. 1848-1923) 著 ④ 明治四五  
 刊 ○(正、大、一五五八・三九)

**一日法事結願** ○(日) Jichi-itchi-  
 itchi-hōshi-ketsu-gan. ① 1巻 ② 缺 ③ 最澄  
 (神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767-823) 撰  
 ○(参考) 山家祖徳撰述諸目集卷上  
**一如上人御拜送之式** ○(日) Jichi-  
 nyō-shō-nin-gō-shō-sō-no-shiki. ① 1巻  
 ② 存 ③ 寫本(龍大、一〇四・二七)  
**一如袖下** ○(日) Jichi-nyō-sode-  
 shita. ① 1巻 ② 存 ③ (参考) 淨土眞宗  
 教典卷第二 寫本(龍大)  
**一念覺得集** ○(日) Jichi-nen-itchi-  
 shū. ① 1巻 ② 存 ③ 淨土眞宗教目録  
**一念覺知有無篇** ○(日) Jichi-nen-  
 kaku-chi-ū-mu-hen. ① 1巻 ② 存、南宮  
 小部集第一 ③ 鬼木沃州(一明治一三 A. D.  
 1884) 編 ④ 寫本(龍大、一〇四・二七)  
**一念覺不論** ○(日) Jichi-nen-itchi-  
 ron. ① 1巻 ② 存 ③ 太藤順海(慶應元  
 一—大正八 A. D. 1865-1919) 述 ④ 明治四五  
 刊 ○(谷大、宗洋・二九〇) (龍大、研眞)  
**一念歸命安心問答** ○(日) Jichi-  
 nen-ki-myō-an-jin-ūn-wa. ① 1巻 ② 存  
 ○(参考) 慶應院藏(一文政五 A. D. 1823) 述  
 ○寫本(谷大、宗大・八五九)  
**一念歸命義** ○(日) Jichi-nen-ki-  
 myō-gei. ① 1巻 ② 存 ③ 同華院法住(一明  
 治七 A. D. 1874) 述 ④ 明治四二寫(谷大、  
 宗大・二二一四)  
**一念歸命掬源記** ○(日) Jichi-nen-  
 ki-myō-ki-gūgen-ki. ① 1巻 ② 存 ③ 道  
 隱(貞保元—文化一〇 A. D. 1741-1813) 記  
 ○寫本(龍大、一五〇二・八四) (谷大、宗大、  
 宗大・二二一四)

**一念歸命要論** ○(日) Jichi-nen-ki-  
 myō-yō-ron. ① 1巻 ② 存 ③ 松原深明述  
 ○明治三三刊 ○(龍大、一五〇二・八五) (谷  
 大、宗大・二〇三三)  
**一念歸命蘭菊** ○(日) Jichi-nen-ki-  
 myō-ran-ku. ① 1巻 ② 存 ③ 妙音院了  
 詳(天明八一—天保一三 A. D. 1798-1842) 述  
 ○(参考) 真宗大系刊行決定書目  
**一念義停止起請文** ○(日) Jichi-  
 nen-gei-ishi-ki-shō-mon. ① 1巻 ② 存  
 ○源空(長承二—建曆二 A. D. 1131-1212)  
 撰 ○明治三九刊 ○(龍大、二〇四二・一一)  
**一念義破文** ○(日) Jichi-nen-gei-  
 wa. ① 1巻 ② 存 ③ 大正二寫 ④ (谷大、  
 宗大・一九三〇)  
**一念業成多念報恩問答** ○(日)  
 Jichi-nen-gei-ō-kan-nō-ō-mō-mon-wa. ①  
 1巻 ② 存 ③ 寫本(龍大、一五〇二・六五)  
**一念三千大寶珠圖解** ○(日) Jichi-  
 nen-san-tai-hōshū-tō-gei. ① 1巻 ② 存  
 ○(谷大、餘大・二五七七) (立、大、A. O. 四・三  
 〇〇)

**一念三千台當異目** ○(日) Jichi-  
 nen-san-tai-dai-tō-an-iki. ① 1巻 ② 存  
 ○寫本(立、大、D. O. 三・一八) ○(宗學全  
 書刊行會)  
**一念三千等御書** ○(日) Jichi-nen-  
 san-san-ō-go-shō. ① 1巻 ② 存 ③ 日  
 蓮(元龜三—寛永一九 A. D. 1572-1642) 撰  
 ○延寶九刊 ○(谷大、餘大・二四九七) (谷  
 大、A. O. 四・六六)  
**一念三千覆法** ○(日) Jichi-nen-san-  
 ten-fū-hō. ① 1巻 ② 存、大日本佛教全  
 書第二四天台小部集、天台小部集(教  
 光校正)第二、天台小部集(文政刊)第八  
 ○圓仁(延暦一三—貞觀六 A. D. 794-864)  
 述  
 ○本書は日本天台の教旨を以て一念三千觀  
 の要を説けるもの、之に教行證の三重あ  
 ることを明し、第二行門の一念三千觀にま  
 た常用、別時、臨終の三種の一念三千觀あ  
 ることを述べる。而して行分の一念三千觀  
 の下に、その本尊を觀音とすることを述べ、  
 以て彌陀觀音の同異を辨ずるが如く、  
 また臨終の一念三千觀を説いて、即ち命終  
 に臨んで専心妙法蓮華經を唱ふることなり  
 とせるが如く、紙數僅かに六葉に過ぎざる  
 短簡なれども、日本天台の思想史上注目す  
 べき文字を以て満たされて居る。  
 由来本書は、その題目の下に「入唐沙門  
 圓仁述」の撰者存すれども、その内容より  
 見て到底これを圓仁の作とすべからざ  
 り。蓋し本書は、古來最澄の作と傳ふる修  
 禪寺相傳私注(恐らくは偽作)下巻の心境義



その點をとつて御門事とされたのであるが、今釋意までも同じだと云ふわけではないから、その一部の組織及び釋義の始終も自ら彼とは異つてゐる。先づ今抄は一念をひがごとと思ふまじき事と、多念をひがごとと思ふまじきこととの二段に分けて、その何れにも偏すべからざる旨が示されてある。初の方に全部にて十三文を出してあるが、分別事より抜き来たものは初後の三文のみで、中間の十文は新加のものである。これは宗祖が自己の宗義に基き成就の文の一念を信と見て釋成する爲めに新しく引釋されたものである。要するに此の一段は行一念信一念の二つを明されたものと云うてよい。即ち初十二文は十八願成就の信の一念成就の義を辯じた外なく、最後の一文は付屬の行の一念を明したものである。第二段多念の下には合計八文あるが此の方は多くは分別事より出されたもので、三文のみが新加である。八文、多少出沒はするが、其の釋意は、本願の十念を釋成する外はない。歸する所一部は、信の一念と行の一念と多念との證文を引き釋して「一念多念各一方に偏すべからざる由を闡明したる也」である。

有得聞の文(第一、第二、第十三は分別事の文、他は新加の文)  
 ①多念證文(一、大經十八願文。二、小經一日七日文。三、大經十七願文。四、一心專念の文。五、上盡一形の文。六、大經出世本懷の文。七、觀佛本願力の文。八、禮讚今信知の文(第一、第二、第四、第五、第八は分別事の文、他は新加の文))  
 ②(注釋) 記三卷(香月院深願作真宗全書) 記三卷(開悟院置作真宗大系)。要訣三卷(開悟院置作真宗大系)。略述一卷(古谷覺覺作刊)。講義一卷(藤田實成寫)。以上大谷派  
 ③(支雄作刊)。開思錄一卷(祐順作寫)。餘一卷(興隆作真宗全書)。丙辰記一卷(觀教作寫)。以上本願寺派  
 ④(觀教作寫)。以上本願寺派  
 ⑤(觀教作寫) 占部觀照作寫等  
 ⑥(觀教作寫) 高田顯智房寫本(高田本山藏) 稱名寺藏(高田顯智房寫本(高田本山藏)) (上杉謙岳)

一多念證文記 ①(日)Ichihara-shōmon-ki. ②三卷 ③存、真宗全書第四二 ④香月院深願(宣統二)文化一四 A. D. 1749-1817 ⑤文化一(A. D. 1818)  
 ⑥本書は觀覺聖人の著一多念證文を講解せしもの開記にして、時に深願師六十三歳、特に尊命を蒙り黒書院に於て講述せられたりといふ。支説として來意、大意、題號の三を辨じ、更に本文に入りて文々句々詳細に之を講じてゐる。聖人老後の御講述に感服して、師が其圓熟せる學識と周到なる講釋とによつて、一念成就の眞義を明せるところ、以て新書研究の指針となすべきである。  
 (大須賀秀道)

一多念證文記 ①(日)Ichihara-shōmon-ki. ②三卷 ③存、真宗大系第二二 ④開悟院置作(安永四)嘉永四 A. D. 1773-1821 ⑤  
 ⑥觀覺聖人の撰述せる一多念證文を解説せるもの。先づ來意・大意・題號・文解の四門を分ち、來意には一念多念の譯を繼とし二十一箇の經論釋を因として、一念多念の譯を讀め念佛往生の正意を闡明し給ふにありとし、更に一念義には幸四、多念義には越中の光明房及び隆寛を指定し、而も宗祖は隆寛の分別事に倣ふも證文に違へ給ふ所は、全く黒谷と聖覺とを相承せりと斷じてゐる。而も之を成立するに一理三證を以てし問答往復特に努めてゐる。次に大意には願成就に依りて平生業成の宗義を明すにありと見たるもの、著者平生の主張を窺ふに足るべし。されば本文の講釋また著者獨特の見解を出せるもの亦尠からず。  
 (大須賀秀道)

一多念證文口義 ①(日)Ichihara-shōmon-kōgi. ②一卷 ③存、開悟院置作(宣統二)文政四 A. D. 1749-1817 ④寫本(龍大)  
 一多念證文意章記 ①(日)Ichihara-shōmon-ichōshō. ②五卷 ③存、寬政二(二宮、研眞)  
 一多念證文講義 ①(日)Ichihara-shōmon-kyōgi. ②三卷 ③存、開悟院置作(安永四)嘉永四 A. D. 1773-1821 ④寫本(龍大、二八四)  
 一多念證文丙辰記 ①(日)Ichihara-shōmon-hachōshō. ②一卷 ③存、興隆(寶曆一〇)天保一三 A. D. 1769-1842 ④寫本(龍大、二三八・一九)  
 一多念證文聽記 ①(日)Ichihara-shōmon-choji-ki. ②一卷 ③存、開悟院置作(安永四)嘉永四 A. D. 1773-1821 ④寫本(龍大、二八四)  
 一多念證文丙辰記 ①(日)Ichihara-shōmon-hachōshō. ②一卷 ③存、興隆(寶曆一〇)天保一三 A. D. 1769-1842 ④寫本(龍大、二三八・一九)  
 一多念證文聞思錄 ①(日)Ichihara-shōmon-onshō. ②一卷 ③存、開悟院置作(安永四)嘉永四 A. D. 1773-1821 ④寫本(龍大、二八四)

二卷 ③存、④結敬述 ⑤寫本(龍大、二二三八・二二)  
 一多念證文要訣 ①(日)Ichihara-shōmon-yōketsu. ②一卷 ③存、真宗大系第二二 ④開悟院置作(宣統二)文政四 A. D. 1749-1817 ⑤寫本(龍大、二二三八・二二)  
 一多念證文略述 ①(日)Ichihara-shōmon-ryakusho. ②一卷 ③存、古谷覺覺(天保一四)大正三 A. D. 1843-1914 ④明治三六刊 ⑤各大本(一・一三)(龍大、三三八・二五)  
 一多念證文錄 ①(日)Ichihara-shōmon-rokusho. ②一卷 ③存、真宗大系第二二 ④開悟院置作(宣統二)文政四 A. D. 1749-1817 ⑤寫本(龍大、二二三八・二二)

一多念證文略述 ①(日)Ichihara-shōmon-ryakusho. ②一卷 ③存、古谷覺覺(天保一四)大正三 A. D. 1843-1914 ④明治三六刊 ⑤各大本(一・一三)(龍大、三三八・二五)  
 一多念證文錄 ①(日)Ichihara-shōmon-rokusho. ②一卷 ③存、真宗大系第二二 ④開悟院置作(宣統二)文政四 A. D. 1749-1817 ⑤寫本(龍大、二二三八・二二)

一多念證文講義 ①(日)Ichihara-shōmon-kyōgi. ②三卷 ③存、開悟院置作(安永四)嘉永四 A. D. 1773-1821 ④寫本(龍大、二二三八・二二)  
 一多念證文聞思錄 ①(日)Ichihara-shōmon-onshō. ②一卷 ③存、開悟院置作(安永四)嘉永四 A. D. 1773-1821 ④寫本(龍大、二二三八・二二)

一多念證文聞思錄 ①(日)Ichihara-shōmon-onshō. ②一卷 ③存、開悟院置作(安永四)嘉永四 A. D. 1773-1821 ④寫本(龍大、二二三八・二二)  
 一多念證文丙辰記 ①(日)Ichihara-shōmon-hachōshō. ②一卷 ③存、興隆(寶曆一〇)天保一三 A. D. 1769-1842 ④寫本(龍大、二三八・一九)

一多念證文丙辰記 ①(日)Ichihara-shōmon-hachōshō. ②一卷 ③存、興隆(寶曆一〇)天保一三 A. D. 1769-1842 ④寫本(龍大、二三八・一九)  
 一多念證文聞思錄 ①(日)Ichihara-shōmon-onshō. ②一卷 ③存、開悟院置作(安永四)嘉永四 A. D. 1773-1821 ④寫本(龍大、二二三八・二二)

名所行録(名書)清蔵所蔵 月年の刊行 講考多書釋註(書本) 説解書内 代年作撰 著書 録存 巻色(名書)名題 號字數

名所行録(名書)清蔵所蔵 月年の刊行 講考多書釋註(書本) 説解書内 代年作撰 著書 録存 巻色(名書)名題 號字數

義例の三門を示し、次に題號を釋し、科段をきり、隨文解釋をなしてゐる。

一 念多念文意

① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. 一念多念文意、一多念文。② 存、大正八三・六九四頁。2577、有朋堂文庫。③ 觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

④ 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

此書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

しく説明するのみであつて、その釋意から見るも亦その筆跡から見るも彼此全然異なることは注意すべき點である。

此の書につき惠空師は別に批評なき由であるが、先哲筆寫本の奥には「實曆年中に越後の願崇が一念多念文意と題して梓行す、その文意の中程ならざることを多し、後人の贋作なるべし、その文に窺ひて知るべし」とある。更に、假名聖教の關典録を見るに「實曆四年越後願崇所出ノ一念多念文意一巻アリ、文義ヤ、今ト不同、皆竊録ニ評シ之」とある。されば先哲筆寫より七年後に出版せし事を知る。先哲の寫本とこの願崇刊本とは同異不明なるも、宗祖の眞本に非らざることは確かで恐く同一ならんと考へらる。僧撰の管窺錄には「コノ書ハ、シキ贋物ナリ、大抵吾高祖ノ製作規模安國ニシテ、本邦諸師ノ中ノ西アルコトナシ。唯信文意、銘文、證文等、經釋ノ要文ヲ調釋シテマヘルモ、任放不屬ノ辭ヲ、縱橫無節ニシテ、ソノ端倪ヲハカリカサシ、コレ眞教熱練ノ士ノ、共ニシタルコト也、然レモコノ書ヲ同スルニ、區々タル註釋、世ノ返ニ章句ノ比ヒナルトコロ多シ、ソノ文義前後貫通セス、キレノナルトコロ多

九條は文書を以ての間に答を記し、次の一條は直接しての間に答へ、次二條は問者が歸宅後、更に使者を以て尋ねたに對し、次三條は更に又他日直接しての問答である。これらの中、始めの百廿九條は、かなり重複したもの。又は「灸治の時、物もうせず、そのおりの遺物もすつと申候は」の間に答へられたる如きものが少からずある。これは源上人が如何に一般世事に通じ、時人から敬虔なる信仰家としてばかりでなく如何なることも上人の知らぬこととはなく深く信ぜられてゐたことを物語るものである。この問答は恐らく今少し長文のものであつたかと思はれるが、今傳へられるところは極めて簡にして要を得たものであり、又此の問答往復は第一四四條の處に「建仁元年十二月十四日げざんにいりてとひまいらする事」とあるから、この年即ち上人六十八歳の頃に行はれたものである。

レ、亦大義ヲ譯タルトコロモ見ヘタリ、今ソノ尤キ者ヲツマンテコレヲ辨ゼン(中略)此間、ハケ處ノ疑義ニツキテ偽作ナルコトヲ辨ズ(一)上來略シテ辨スルコト如シ、コレニ依リテ知ル、決シテ贋物ナルコトヲ、更ニ勤(ヨ)シ」とある。其他、法要典據、教典志等にも偽作と決して、却つて先哲が眞本と同一に見誤りたるを評してゐる。尙妙音院了祥師の眞撰集(眞宗大系)第一卷には「先哲の眞宗眞撰集ヲ引テ云」として「一念多念文意」の一文を出してゐるが、これは今鈔の一部分であつてその全文でないことが知られる。

① 大谷文庫 (上杉鑒盛) ② 存、大正八三・六九四頁。2577、有朋堂文庫。③ 觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

① 念多念文意 ① (日) Jichi-onan-ki-nen-hon-i. ② 存、觀覽、永安三・弘長二 A. D. 1173-1253) 廣元三 (A. D. 1257) 淨土眞宗聖教日録、淨土眞宗聖教日録第一

リカタキ書ナリ。然レトモアシアシタ拜見セバ、十劫歸事ノ形ニ入ル可シ、ヨクヨク拜見スレバチチアアリカタキ御聖教ナリ。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。

此の書は淨土眞宗祖師聖人の眞撰たる一念多念文意即ち一念多念文意と同名のものにて全く眞作と認めらるゝものである。その體裁及び内容が能く似てゐるから誤られ易いが、今日は學者が研究の結果全く宗祖の眞撰と別視する様になつてゐる。



11 A.D. 1655-1725)註 ⑥安永五(A.D. 1786)  
 ⑦智眞(上人)が、弘安十年(A.D. 1827) 播磨國飾磨郡白濱村(舊は松原)にて作れる別願和讃を註解したるものである。一過上人別願和讃直説鈔に異り、總數八十六句(一過上人語彙卷上にある)のものを採る。先づ大に別ちて二となし、第一は題名を解し、第二は讃文を解する。次に讃文を解する中に序・正宗・流通の三段を置く。第一序分に四十四句を配し、前二十句は人道無常の相状を示すものとし、後の二十句は聖淨二門の迷執を斥くものとする。更に又前者を三分して、第一總じて色身を釋するもの二句、第二別して人命を釋するもの十四句、第三結して心の無常を示すもの四句とする。此の中第二別して人命を釋するものは、最初の二句を除きて六分し、第一入天は四趣に墮るを明し、第二三道の苦患を明し、第三眼根色境を明し、第四耳根聲境を明し、第五鼻舌二根を明し、第六反轉するものとして各二句を配して居る。次に後者を四分して、第一偏淺を述するもの四句、第二個執を破するもの四句、第三著相を述するもの十二句とする。此の中第一通途に約して三句を明すものは、更に之れを三分して、第一法身を明すもの四句、第二報身を明すもの四句、第三應身を明すもの四句として居る。

部分とする。之れを十分し、第一正しく偏に名號を動する由を擧げ、凡夫往生を明して疑滯を釋去するもの二句、第二引證するもの二句、第三行體を顯して修し易きを明すもの二句、第四行益を明すもの二句、第五往生は念の多少に依らず、佛名の功に由るを明すもの八句、第六重勸を明すもの四句、第七聖衆の來迎を明すもの十句、第八蓮華初開の相を明すもの四句、第九開法を明すもの二句、第十妙妙境界を明すもの二句とする。此の中第六以下を更に二乃至五分して居る。即ち第六重勸を明すもの二句を明し、第七所歸の名號を明し、第四正しく一期の終りを明すものとして各一句を配して居る。第七聖衆の來迎を明すものを五分して居る。第一土を顯し正を顯すもの一句、第二主伴を顯し依を顯すもの二句、第三佛現我前を明すもの一句、第四引導を明すもの二句、第五我往佛處を明すもの四句とする。第八蓮華初開の相を明すものを三分して、第一開敷を明すもの一句、第二階首を明すもの一句、第三見佛を明すもの二句とする。第九開法を明すものを二分し、第一如來講堂を明し、第二轉法輪心明すものとして各一句を配して居る。第十妙妙境界を明すものを三分し、第一理林を明し、第二樓閣を明し、第三見諸佛土を明すものとして二句を混配して居る。

第三流通分に四句を配して之れを四分し、第一住不退を明し、第二利他を明し、第三弘願を明し、第四總結して報恩を明すものとして各一句を配して居る。別願和讃古註(法爾撰)の簡約なるに比し、整備せられたるものと云ふべく、神勸念佛に準據した解釋として重視せられるものである。

⑧安永五(龍大、二六八・二五)(寺沼珠明) 一過上人法話 ①(日)Tsuetsunehiko ②(日)Tsuetsunehiko ③(日)Tsuetsunehiko ④(日)Tsuetsunehiko ⑤(日)Tsuetsunehiko ⑥(日)Tsuetsunehiko ⑦(日)Tsuetsunehiko ⑧(日)Tsuetsunehiko ⑨(日)Tsuetsunehiko ⑩(日)Tsuetsunehiko ⑪(日)Tsuetsunehiko ⑫(日)Tsuetsunehiko ⑬(日)Tsuetsunehiko ⑭(日)Tsuetsunehiko ⑮(日)Tsuetsunehiko ⑯(日)Tsuetsunehiko ⑰(日)Tsuetsunehiko ⑱(日)Tsuetsunehiko ⑲(日)Tsuetsunehiko ⑳(日)Tsuetsunehiko ㉑(日)Tsuetsunehiko ㉒(日)Tsuetsunehiko ㉓(日)Tsuetsunehiko ㉔(日)Tsuetsunehiko ㉕(日)Tsuetsunehiko ㉖(日)Tsuetsunehiko ㉗(日)Tsuetsunehiko ㉘(日)Tsuetsunehiko ㉙(日)Tsuetsunehiko ㉚(日)Tsuetsunehiko ㉛(日)Tsuetsunehiko ㉜(日)Tsuetsunehiko ㉝(日)Tsuetsunehiko ㉞(日)Tsuetsunehiko ㉟(日)Tsuetsunehiko ㊱(日)Tsuetsunehiko ㊲(日)Tsuetsunehiko ㊳(日)Tsuetsunehiko ㊴(日)Tsuetsunehiko ㊵(日)Tsuetsunehiko ㊶(日)Tsuetsunehiko ㊷(日)Tsuetsunehiko ㊸(日)Tsuetsunehiko ㊹(日)Tsuetsunehiko ㊺(日)Tsuetsunehiko ㊻(日)Tsuetsunehiko ㊼(日)Tsuetsunehiko ㊽(日)Tsuetsunehiko ㊾(日)Tsuetsunehiko ㊿(日)Tsuetsunehiko

太郎氏の有に歸し、昭和五年十二月十三日國寶の指定を受けるに至つた。安永五年、遊行五十三世如上人は其の詞書のみを出版して一部三冊とした。大日本佛教全書に收むる所は之れに依るのである。

第一巻は延應元年伊豫國の誕生より文永十年同國深寺に於ける十一不二の頃の感得まで首尾三十五年を亘る。第二巻は文永十年七月伊豫國菅生の岩屋に參詣の事より翌十一年紀伊國高野山に參詣の事まで。第三巻は文永十一年夏同國熊野の權現に參詣の事より建治二年九州に聖達上人を訪問の事まで兩三年に亘る。第四巻は建治二年筑前國一武家宅に於ける依法不依人の事より弘安二年近江國延曆寺東塔樓本の兵部督重豪の發心等まで兩三年に亘る。第五巻は弘安二年の冬、信濃國佐久郡の武士大井太郎の發心のことより弘安五年三月一日相模國鎌倉入りのことまで兩三年に亘る。第六巻は翌日片瀬に於いて斷食して別時する事より翌弘安六年尾張國笠津に到る事まで。第七巻は同年尾張美濃兩國の惡黨も立札して上人の遊行を障げざらした事より弘安七年五月二十二日山城國桂に到る等の事まで。第八巻は同年秋同國備前村に止まりし事より弘安九年大和國當麻寺に於て誓願傳文を

認むる事まで兩三年に亘る。第九巻は同年冬石清水八幡宮參詣の事より翌弘安十年播磨國松原に於て別願和讃を認むる事まで。第十巻は備中國經部に在りし事より正應二年伊豫國三島神社に於ける事まで兩三年に亘る。第十一巻は同年讃岐國善通寺に參詣の事より同年八月攝津國兵庫觀音堂に於て病を養ふの事まで。第十二巻は病床の事より八月二十三日示寂直後の事並びに本書圖撰作の事までを記して居る。

蓋本書に依れば、上人の一化十六年、遊行四十箇國に乗んとして往復履到り風雲を文となしなごも過難せず、群集と僧に在りながらも損壞せず、遊行教化の徹底した上人の行狀風格を記述して餘蘊なきに比しと云ふべきである。(寺沼珠明)

一 經千里 ①(日)Chih-ben-sen-ri ②(日)Chih-ben-sen-ri ③(日)Chih-ben-sen-ri ④(日)Chih-ben-sen-ri ⑤(日)Chih-ben-sen-ri ⑥(日)Chih-ben-sen-ri ⑦(日)Chih-ben-sen-ri ⑧(日)Chih-ben-sen-ri ⑨(日)Chih-ben-sen-ri ⑩(日)Chih-ben-sen-ri ⑪(日)Chih-ben-sen-ri ⑫(日)Chih-ben-sen-ri ⑬(日)Chih-ben-sen-ri ⑭(日)Chih-ben-sen-ri ⑮(日)Chih-ben-sen-ri ⑯(日)Chih-ben-sen-ri ⑰(日)Chih-ben-sen-ri ⑱(日)Chih-ben-sen-ri ⑲(日)Chih-ben-sen-ri ⑳(日)Chih-ben-sen-ri ㉑(日)Chih-ben-sen-ri ㉒(日)Chih-ben-sen-ri ㉓(日)Chih-ben-sen-ri ㉔(日)Chih-ben-sen-ri ㉕(日)Chih-ben-sen-ri ㉖(日)Chih-ben-sen-ri ㉗(日)Chih-ben-sen-ri ㉘(日)Chih-ben-sen-ri ㉙(日)Chih-ben-sen-ri ㉚(日)Chih-ben-sen-ri ㉛(日)Chih-ben-sen-ri ㉜(日)Chih-ben-sen-ri ㉝(日)Chih-ben-sen-ri ㉞(日)Chih-ben-sen-ri ㉟(日)Chih-ben-sen-ri ㊱(日)Chih-ben-sen-ri ㊲(日)Chih-ben-sen-ri ㊳(日)Chih-ben-sen-ri ㊴(日)Chih-ben-sen-ri ㊵(日)Chih-ben-sen-ri ㊶(日)Chih-ben-sen-ri ㊷(日)Chih-ben-sen-ri ㊸(日)Chih-ben-sen-ri ㊹(日)Chih-ben-sen-ri ㊺(日)Chih-ben-sen-ri ㊻(日)Chih-ben-sen-ri ㊼(日)Chih-ben-sen-ri ㊽(日)Chih-ben-sen-ri ㊾(日)Chih-ben-sen-ri ㊿(日)Chih-ben-sen-ri

①圓通、顯範、機意述 ②顯範應元(A.D. 1338) 機意述文(A.D. 1337) 法善師が深密經に依つて非有非無中道の義を示し給ひ、更に我法非有非無非無有離無故契中道と説かれたるも、後に中道は三性各別の中道か三性對望の中道かにつき、圓通、顯範、機意の三師が互に論議し、圓通は三性對望中道が難言一法中道に契稱するとし、顯範は一法中道を道理上より許すべきを論じて三乘對望一法中道なることを説き、機意は三性各別中道の非を明して三性對望一法中道は自宗至極の中道なりとし、護法善師の論文に不盡の疑遺れずと云ひて、明識の中道は三性對望中道なることを決擇せる三師の短論草を合して一帖としたものである。

③延文二寫 ④法隆寺藏 (橋本藏風) 一 峰双詠 ①(日)Hōshū-kyō ②(日)Hōshū-kyō ③(日)Hōshū-kyō ④(日)Hōshū-kyō ⑤(日)Hōshū-kyō ⑥(日)Hōshū-kyō ⑦(日)Hōshū-kyō ⑧(日)Hōshū-kyō ⑨(日)Hōshū-kyō ⑩(日)Hōshū-kyō ⑪(日)Hōshū-kyō ⑫(日)Hōshū-kyō ⑬(日)Hōshū-kyō ⑭(日)Hōshū-kyō ⑮(日)Hōshū-kyō ⑯(日)Hōshū-kyō ⑰(日)Hōshū-kyō ⑱(日)Hōshū-kyō ⑲(日)Hōshū-kyō ⑳(日)Hōshū-kyō ㉑(日)Hōshū-kyō ㉒(日)Hōshū-kyō ㉓(日)Hōshū-kyō ㉔(日)Hōshū-kyō ㉕(日)Hōshū-kyō ㉖(日)Hōshū-kyō ㉗(日)Hōshū-kyō ㉘(日)Hōshū-kyō ㉙(日)Hōshū-kyō ㉚(日)Hōshū-kyō ㉛(日)Hōshū-kyō ㉜(日)Hōshū-kyō ㉝(日)Hōshū-kyō ㉞(日)Hōshū-kyō ㉟(日)Hōshū-kyō ㊱(日)Hōshū-kyō ㊲(日)Hōshū-kyō ㊳(日)Hōshū-kyō ㊴(日)Hōshū-kyō ㊵(日)Hōshū-kyō ㊶(日)Hōshū-kyō ㊷(日)Hōshū-kyō ㊸(日)Hōshū-kyō ㊹(日)Hōshū-kyō ㊺(日)Hōshū-kyō ㊻(日)Hōshū-kyō ㊼(日)Hōshū-kyō ㊽(日)Hōshū-kyō ㊾(日)Hōshū-kyō ㊿(日)Hōshū-kyō

宗假名法典卷中、眞宗法要拾遺第一、和語眞宗法要、國文東方傳教叢書第一之一、華國文庫 ①源慶(長承二)建曆二 A.D. 1133 一 起請 ①(日)Kishō ②(日)Kishō ③(日)Kishō ④(日)Kishō ⑤(日)Kishō ⑥(日)Kishō ⑦(日)Kishō ⑧(日)Kishō ⑨(日)Kishō ⑩(日)Kishō ⑪(日)Kishō ⑫(日)Kishō ⑬(日)Kishō ⑭(日)Kishō ⑮(日)Kishō ⑯(日)Kishō ⑰(日)Kishō ⑱(日)Kishō ⑲(日)Kishō ⑳(日)Kishō ㉑(日)Kishō ㉒(日)Kishō ㉓(日)Kishō ㉔(日)Kishō ㉕(日)Kishō ㉖(日)Kishō ㉗(日)Kishō ㉘(日)Kishō ㉙(日)Kishō ㉚(日)Kishō ㉛(日)Kishō ㉜(日)Kishō ㉝(日)Kishō ㉞(日)Kishō ㉟(日)Kishō ㊱(日)Kishō ㊲(日)Kishō ㊳(日)Kishō ㊴(日)Kishō ㊵(日)Kishō ㊶(日)Kishō ㊷(日)Kishō ㊸(日)Kishō ㊹(日)Kishō ㊺(日)Kishō ㊻(日)Kishō ㊼(日)Kishō ㊽(日)Kishō ㊾(日)Kishō ㊿(日)Kishō

因勝(一寶曆頃 A.D. 1751-1763) 述 安永九刊 ①(龍大、二六八・二七四) 一 起請見聞 ①(日)Kishō-mi-ken ②(日)Kishō-mi-ken ③(日)Kishō-mi-ken ④(日)Kishō-mi-ken ⑤(日)Kishō-mi-ken ⑥(日)Kishō-mi-ken ⑦(日)Kishō-mi-ken ⑧(日)Kishō-mi-ken ⑨(日)Kishō-mi-ken ⑩(日)Kishō-mi-ken ⑪(日)Kishō-mi-ken ⑫(日)Kishō-mi-ken ⑬(日)Kishō-mi-ken ⑭(日)Kishō-mi-ken ⑮(日)Kishō-mi-ken ⑯(日)Kishō-mi-ken ⑰(日)Kishō-mi-ken ⑱(日)Kishō-mi-ken ⑲(日)Kishō-mi-ken ⑳(日)Kishō-mi-ken ㉑(日)Kishō-mi-ken ㉒(日)Kishō-mi-ken ㉓(日)Kishō-mi-ken ㉔(日)Kishō-mi-ken ㉕(日)Kishō-mi-ken ㉖(日)Kishō-mi-ken ㉗(日)Kishō-mi-ken ㉘(日)Kishō-mi-ken ㉙(日)Kishō-mi-ken ㉚(日)Kishō-mi-ken ㉛(日)Kishō-mi-ken ㉜(日)Kishō-mi-ken ㉝(日)Kishō-mi-ken ㉞(日)Kishō-mi-ken ㉟(日)Kishō-mi-ken ㊱(日)Kishō-mi-ken ㊲(日)Kishō-mi-ken ㊳(日)Kishō-mi-ken ㊴(日)Kishō-mi-ken ㊵(日)Kishō-mi-ken ㊶(日)Kishō-mi-ken ㊷(日)Kishō-mi-ken ㊸(日)Kishō-mi-ken ㊹(日)Kishō-mi-ken ㊺(日)Kishō-mi-ken ㊻(日)Kishō-mi-ken ㊼(日)Kishō-mi-ken ㊽(日)Kishō-mi-ken ㊾(日)Kishō-mi-ken ㊿(日)Kishō-mi-ken

一五〇・二五三・一五〇・二五〇(今同連音)  
**一枚起請論** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-gen-roku. 一枚起請文論 ②五卷 ③存 ④忠實(正保二)正徳元 A. D. 1615-1711) 述  
 ⑤本書は先づ大意として五重の意を明し、初重には安心起行此一紙に五種せりと書ふ意書の意。二重には滅後の邪義を防ぐが爲に記す所存一果と言ふ意書の意。三重には亦た爲防滅後之邪義と言ふ文句句を細釋して骨節の義を明し給へる立言の妙を論ず。四重は光明吉水兩祖一致の旨を述べて行者の信心を決定せしむ。五重は二祖同歸相承の宗義に信心を決定せしむべしと言ひ、而して日頃合宗の隆長開架が一枚起請但信抄を物せられしが、安心起行の易くすなはちして其批評なれば、初重の講解は彼に譲つて略す。著者附記して「今此論論、兼起三問辨三至マテ詳釋シテ、漸ク積テ五重ニ及リ」と、以て信阿老師年來の護法心積りて懇切なる勸導となると知るべきである。  
 ⑥水三刊 ⑦正大、一五四・二五七、一五二・二五六(高大、客・一・一八)(今同連音)  
**一枚起請鼓吹** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui. ②五卷 ③存 ④貞享三刊 ⑤正大、三 A. D. 1696- ) 述 ⑥貞享三刊 ⑦正大、一五四・二八七)  
**一枚起請鼓吹** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui. ②註一枚起請鼓吹 ③一卷 ④存 ⑤運筆堂印撰 ⑥明治二八刊 ⑦(高大、研説)  
**一枚起請櫻板聞書** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-gan-ki-sho. 一枚起請文櫻板聞書 ②一卷或三卷 ③存、淨土宗全書第九 ④國通(元禄九)明和七 A. D. 1696-1770) 述 ⑤寶曆二刊(高大、研説) ⑥明和元刊(高大、宗大・五三四) ⑦正大、一五四・二六五(京大、一・二六四・一・二)  
**一枚起請講解** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui. ②二卷 ③存 ④寫本(高大、二六八・二八七)  
**一枚起請講釋聞書** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-sho-ki-sho. 論入一枚起請講釋聞書 ②一卷 ③存 ④判本(高大) ⑤天保三刊 ⑥正大、一五四・二八七、一五二・二六八(二・七六)(京大、一・二六四・一・一〇)  
**一枚起請講說** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-sho. 一枚起請文講說 ②二卷 ③存、淨土宗全書第九 ④法洲(明和)二天保一〇刊 A. D. 1763-1839) 述 ⑤天保一〇刊(高大、宗大・五五四) ⑥明治一六寫(高大、宗大、一六六) ⑦正大、一五四・二六九(高大、二六八・二・一〇)  
**一枚起請骨目抄** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-hon-me. ②三卷 ③存 ④洞安(正保二)東水四 A. D. 1615-1707) 述 ⑤元禄二刊 ⑥正大、一五四・二七三(高大、二六八・二・八八)(高大、長保・二・二)(實・二・一・右・二)  
**一枚起請骨目抄驗非** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-hon-me-ken-hi. 骨目抄驗非 ②二卷 ③存 ④光徳堂(永徳元)元文四 A. D. 1653-1730) 述 ⑤享保五刊 ⑥(高大、研説)  
**一枚起請採要集** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-hon-me. 一枚起請採要集 ②一卷 ③存 ④榮田藤慶記 ⑤明治一七刊 ⑥(高大、宗大・七一六)(高大、研説)  
**一枚起請資講** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-hon-me. 御遺言資講 ②存、的門上人全集第四 ③的門(明治二二) A. D. 1890) 述  
 ④本書は遺言老人法言を師表と仰ぎ、的門の講説なるが故に、科語、講解ともに法言の講説を依用して、緣に因縁話を差し換へたるが如き點がある。著者の言に云へらく「文に對して義意を心得るに、大抵二途あり、文の儘に義を取ることを勿れ、文の儘に義を取らば、三世諸佛のあだなりと説きあり。又他の一は文は當體即義とて、文の如くに義を存せよと説くべし。如是二義矛盾ありて、文の儘に不取不取義事は、權乘不取の上で言ふ事なり。文の儘に義を取るは、實教了義大乘の上で云ふ事なり。此の二途の中今此の御遺言は、是れ實教の文の儘に心得る御法語なり。其故は、大師の御勸めの本願念佛淨土の眞門は願中の極、上乘の法門なれば、何んぞ文を離れて義を取らばならんや」と。案するに一枚起請は文の如く義を取れと云ふ義山、隆長、廣信等ありて、本書の發明にあらず。文を讀まば則ち意を得るが一枚起請の本格である。彼の應如の消息が眞宗の大をなすの基となるが如く、一枚起請に煩瑣なる説明を加へず平易簡明に辨じて、智無智、老幼男女に容易く領解せしむるを旨とすべきである。彼の櫻板聞書が、八門をあげて之を辨ぜしは、堂上の講業に妨げせんが爲めの講説、法言の講説の如きは、淨土對眞宗、西山の法義の同異を知らしむる者にして、香山の法義の要旨を知らしめんとする者ではない。若し善く大乘に之を領知せしめんと欲せば、義山、隆長、廣信の云ふが如く、極めて簡明に辨するを要する。著者の門は、行誦と同様に晩年布教方面に發展し、大原談義、選擇集、三部御宇鈔等に資講と題する解説書を書く。蓋し講説を資助する意であらう。一枚起請の解説も亦た遺言資講が本書ならん。更に竹園説と題する一小冊の講解あり。題して竹園説と云ひ「尊命の委く、護法の思召故なり」と冒頭に云へるが故に、宮家の尊命を受けて一枚起請を講説せしこと明らかである。而して「私は先哲の義を披草して、尊命を奉らん」と云ひ、其講解多く法言の講説に據る所ありて、資講の大意を叙する者の如くである。(今同連音)  
**一枚起請自得抄** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-hon-me. 一枚起請文自得抄 ②二卷 ③存 ④洞中述 ⑤享保四刊、元禄二刊 ⑥(高大、二六八・二・七七)  
**一枚起請邪調疏** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-ko-sui-hon-me. 一枚起請文邪調疏 ②二卷 ③存 ④大我(水六)天明二 A. D. 1791-1793) 述 ⑤宣延二刊 ⑥(高大、二六八・二・八〇)

**一枚起請釋疑** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-shaku-gi. ②一卷 ③存 ④超然述 ⑤水三刊 ⑥(高大、研説)  
**一枚起請拾遺抄** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho. ②三卷 ③存 ④聖教(中御門)代天 A. D. 1710-1735) 述 ⑤正徳元(A. D. 1711)  
 ⑥本書は西京淨圓寺の前任盤察が、正徳元年東漸大師の御説宣下の時、著作し刊行せる者なり。就に至りて子近頃、作三抄解者亦不鮮也、粗聞其書、頗有異香、然云不是、雖然如此、如予老耄、眼力衰微、僅見葉文、所以拾諸師之遺語、何爲略解、置之座右、備三自鏡、焉とあり。  
 ⑦正徳元刊 ⑧(高大、長保・一九)(高大、一六八・二・八〇)(正大、一五四・二五八)(立大、A 三〇・一三四)(實・二・一・右・三三)  
**一枚起請述議** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-gi. 一枚起請文述議 ②一卷 ③存 ④素信(元文二) A. D. 1717) 述 ⑤享保一四刊(高大、二六八・二・七八) ⑥安永七刊(正大、一五四・二六二)  
**一枚起請諸說辨** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-gi-sho-ten. 一枚起請諸說辨 ②一卷 ③存 ④論心(元保元)文化一〇 A. D. 1741-1743) 述 ⑤安永七刊 ⑥(高大、二六八・二・九四)(實・二・一・右・三三)  
**一枚起請抄海** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho. 一枚起請文抄海 ②一卷 ③存 ④南無(文禄元)寛文一一 A. D. 1693-1671) 述 ⑤(参考) 淨土眞宗教典第三 ⑥寛文一八刊 ⑦正大、一五四・二七〇(高大、二六八・二・八九)(立大、A 三〇・四二)(高大、客・一・一九)  
**一枚起請抄海講義** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho-ki-sho. 一枚起請文抄海講義 ②三卷 ③存 ④寛文一一(A. D. 1671) 述 ⑤(参考) 淨土眞宗教典第三 ⑥寛文一一刊 ⑦(高大、長保・二・三)(高大、二六八・二・九〇)(立大、A 三〇・二一九)  
**一枚起請抄** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho. ②一卷 ③存 ④講義(長一八一)元禄四 A. D. 1615-1691) 述 ⑤寛文一三刊 ⑥(高大、二二八・一〇六)  
**一枚起請新記** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho. 一枚起請文新記 ②一卷 ③存 ④超然述 ⑤水三刊 ⑥(参考) 淨土眞宗教典第三 ⑦寛文四刊(高大、宗大・一七三六) ⑧享保四刊(高大、二六八・二・九一)  
**一枚起請親聞錄** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho-ki-sho. 一枚起請親聞錄 ②一卷 ③存 ④首座(天和)三寛延元 A. D. 1653-1745) 述、海雲記  
 ⑤本書は元元年理珙座首が萬州の未盡の點を辨じて學徒に授けし者なるが、二三子の私録に依りて録出の海雲録し、尾州西蓮寺の吟説が指上木して逐く四方に傳ふる者である。本書に玄談四門あり。一起請の緣起、二古今の尊敬、三諸師の時評、四諸師の是非なり。古今の尊敬の下に聖賢の諸師をあげ、註疏時評の下に古今を通じて二十餘十餘卷の註釋書ありとなし、四師の注は依用し難しと言ふ。骨目抄抄海など宗意を知るに、本文の義にかなはず。但信抄は本文の解釋を略し、註疏も亦た本文を解せずして弊弊に涉ること多しと。本文註釋四師に成る。一に非本願念佛を論ず。二に本願念佛を示す。三に前に證して誓を立つ(此外以下)四に但信の正側を論ず(念佛を信せん以下)而して一向念佛すべしと證するの異目とする。  
 ⑥安永三刊 ⑦(高大、二六八・二・七九)(立大、A 三〇・一三二)(正大、一五四・二六四)  
**一枚起請寶言** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho. 一枚起請文寶言 ②一卷 ③存 ④講義(享保一)享保一四 A. D. 1731) 撰 ⑤元禄一五刊 ⑥(高大、二六八・二・九二)  
**一枚起請説** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho. 一枚起請文説 ②三卷 ③存 ④東津義士(寛文一一) A. D. 1799) 述 ⑤安永五刊 ⑥(高大、二二八・一〇七)(高大、京大、一・一〇・一・一八)  
**一枚起請但信抄** ①(日)Tch-i-mai-ki-sho-sho-ki-sho. 一枚起請文但信抄 ②二卷 ③存、淨土宗全書第九 ④隆長述 ⑤元禄九(A. D. 1690)八月  
 ⑥本書は天台宗の隆長阿闍梨が、深く生死無常の理に通じ、名利の爲めに惑されず、願密の願旨に達し、無論成就を勉めたる本に、自ら時機因縁を觀じて、心を西方の淨刹に廻らし、永く法然上人の一枚起請に歸して、自行化他、願行相續を以て、苦海を渡るの要務に備へられたのである。曾て古人の要請の修持に適切なを採り、亦た時論を折衷して、之を但信抄と題した。之を、忍讓師が、遺言談論に紹介せられしを以て、世人始めて此著あることを知り、その上梓を求めて已まず。隆長仍て之を上梓したものである。作者の跋に言はく、上人の一枚起請は、唯だ文の如く義を存すべし、如何んぞ其れ之を費せんと。然れども猶ほ求めること切なりしかば、自得但信の旨を叙すとあり。  
 ⑦本書は隨文解釋にして別に分科を立てず。上巻は「三心四修は皆南無阿闍梨佛にて往生するそと思ふ内に歸り候なり」の下に三心四修の解釋をあげ、その解釋が下巻の半ば以下に及ぶ。作者の言に「淨土家の意は、黒白を辨えず、おめく」と佛の本願を頼みて、平に念佛する人を好しとす。愚痴の凡夫悉く當機也」と。下巻に淨土の授機をあげ、又上巻に凡夫の易生を説きて、都率安樂の二の中に於て、純樂には十勝十易あり。往生證に云く「依て遺言生處、西方最可。歸云云。純樂世界は彌陀如来願所成の土なるが故に、莊嚴快樂餘の佛土に超えたり。又諸佛の功德は等しと雖も、因位の應願は彌陀願勝給へり。純樂は無漏無





一枚起請文仰信義略

一枚起請文仰信義略 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-shin-gi-yaku. 〇

一枚起請文概観書

一枚起請文概観書 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-gai-kan-sho. 〇

一枚起請文概観書 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-gai-kan-sho. 〇

一枚起請文概観書 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-gai-kan-sho. 〇

一枚起請文概観書 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-gai-kan-sho. 〇

一枚起請文講義

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

一枚起請文仰信義略

一枚起請文仰信義略 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-shin-gi-yaku. 〇

一枚起請文概観書

一枚起請文概観書 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-gai-kan-sho. 〇

一枚起請文講義

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

一枚起請文講義

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

一枚起請文講義

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

一枚起請文講義 〇(日)Ichimai-ki-sho-mun-kyo-kyougi. 〇

黒谷の本ならば、眞蹟と定まる所以なり」と。而して一枚起請は總稱別名、大師の御徳の顯はれなりと云ふ。次に第十八願が口稱を説く旨をあげて、如左辨ぜらる。

「若し本願が觀念なれば口稱に通せず、又口稱なれば觀念に通せず、是れ一願一體なる放なり。然るに本願口稱の義は上に述ぶるが如く、又相傳に同本異譯の平等覺經、寶積經、莊嚴經等、皆名號の顯あり。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>求<sup>レ</sup>他<sup>レ</sup>證<sup>レ</sup>云云。次に明名と高聲念佛とを説きて、「本願に乗じて往生遂ぐると云ふは、念佛を唱へねばならぬこと、其唱ふると云ふが、舌の動く位からは皆稱名念佛で、我が唱ふる聲の、我が耳に入る位からは高聲念佛なり。聲に出すことならぬ人は、心に六字を運ぶ念をなすも、稱名と云はるる、是を細意の念佛、意念の念佛と云ふべし、觀念念とは別なり、或は大病人人、或は病室の類ひ、或は君前の勤仕する人、或は深奥の席にある人などの事なり。大師此事を示し給ひて、口に唱へ心に念する、同じ名號なれば、いづれも往生の樂となるべし。但し佛の本願は稱名と立て給はる故に、聲に出すべしなり。經に令聲不絶具足十念と説き、釋には稱我名號下至十聲と列じ給へり」と。

本書の講解懇切丁寧なること概ね此の類である。(今同建書)

一枚起請文講録 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-kōroku. ②三卷 ③存 ④香嚴述 ⑤寫本(龍大、二二八・一四) 一枚起請文講録 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-kōroku. ②三卷 ③存 ④香嚴述 ⑤寫本(龍大、二二八・一四) 一枚起請文講録 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-kōroku. ②三卷 ③存 ④香嚴述 ⑤寫本(龍大、二二八・一四)

一枚起請文諸說辨斷 ①(日)Ichi-ki-shō-mon-jūshō-hen-dan. ②一卷 ③存 ④壽忍(寶水二、天明六A.D. 1765-1766)述 ⑤安永七刊 ⑥谷大、長保二(二、寛大、二六八・一五四・二六七、一五四・二六八) 一枚起請文拈海 ①(日)Ichi-ki-shō-mon-jūhai. ②一枚起請拈海 ③三卷 ④存 ⑤南楚(文祿元一寛文一、A.D. 1592-1671)述 ⑥(參考) ⑦寫本一八刊 一枚起請文拈海講義 ①(日)Ichi-ki-shō-mon-jūhaikōgi. ②一枚起請拈海講義 ③三卷 ④存 ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦寫本一八刊 一枚起請文鈔 ①(日)Ichi-ki-shō-mon-jūshō. ②一卷 ③南楚(文祿元一寛文一、A.D. 1592-1671)述 ④寛永八(A.D. 1631) ⑤(參考) ⑥淨土眞宗教典第三 ⑦三 一枚起請文拈海講義 ①(日)Ichi-ki-shō-mon-jūhaikōgi. ②一枚起請拈海講義 ③三卷 ④存 ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦寫本一八刊 一枚起請文說教 ①(日)Ichi-ki-shō-mon-jūshōkyō. ②一卷 ③存 ④香嚴院授(一、嘉永四A.D. 1851)述 ⑤明治四〇刊 ⑥谷大、宗洋(三四二) 一枚起請文但信抄 ①(日)Ichi-ki-shō-mon-jūshōshinshō. ②一枚起請但信抄 ③二卷 ④存 ⑤淨土宗全書第九 ⑥隆長述 ⑦元祿九(A.D. 1696)八月 ⑧(參考) ⑨淨土眞宗教典第三 ⑩(參考) ⑪(參考) ⑫(參考) ⑬(參考) ⑭(參考) ⑮(參考) ⑯(參考) ⑰(參考) ⑱(參考) ⑲(參考) ⑳(參考) ㉑(參考) ㉒(參考) ㉓(參考) ㉔(參考) ㉕(參考) ㉖(參考) ㉗(參考) ㉘(參考) ㉙(參考) ㉚(參考) ㉛(參考) ㉜(參考) ㉝(參考) ㉞(參考) ㉟(參考) ㊱(參考) ㊲(參考) ㊳(參考) ㊴(參考) ㊵(參考) ㊶(參考) ㊷(參考) ㊸(參考) ㊹(參考) ㊺(參考) ㊻(參考) ㊼(參考) ㊽(參考) ㊾(參考) ㊿(參考)

名所行數 (名所書) 著者所見 月年の刊行 (書考) 著者所見 著者 缺存 黄色 (名所) 名所 読字

土眞宗教典第三

一枚起請文聽記 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-ōki. ②一卷 ③存 ④行顯(一文久、A.D. 1863)述 ⑤寫本(龍大) 一枚起請文聽記 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-ōki. ②一卷 ③存 ④行顯(一文久、A.D. 1863)述 ⑤寫本(龍大) 一枚起請文添濁 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-tenjoku. ②一卷 ③存 ④謙芳(一、享保一四A.D. 1729)撰 ⑤(參考) ⑥淨土眞宗教典第三 ⑦享保一五刊 ⑧谷大、宗大(二七六七) 一枚起請文日講記 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-nikkōki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一九一八) 一枚起請文慶立鈔 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-ōki. ②一卷 ③存 ④寫本(龍大、一九一八) 一枚起請文備考 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-bōkō. ②一卷 ③存 ④松浦僧徒(天保一、一、大正一、A.D. 1841-1923)述 ⑤寫本(龍大、一〇三・七) 一枚起請文辟邪調疏 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-byakō-ka-jū-kun-shō. ①一枚起請調疏 ②一卷 ③大我(寶水六一、天明二、A.D. 1769-1782)述 ④(參考) ⑤淨土眞宗教典第三 一枚起請文丙子録 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-kei-shū-roku. ②一卷 ③存 ④芳英(寶洋一三、一文久、A.D. 1673-1828)撰 ⑤寫本(谷大、宗大、三六二) (龍大) 一枚起請文辨述 ①(日)Ichi-mai-ki-shō-mon-hen-jutsu. ②一卷 ③存 ④義山(慶安元一享保一、A.D. 1648-1717)述 ⑤(參考) ⑥(參考) ⑦(參考) ⑧(參考) ⑨(參考) ⑩(參考) ⑪(參考) ⑫(參考) ⑬(參考) ⑭(參考) ⑮(參考) ⑯(參考) ⑰(參考) ⑱(參考) ⑲(參考) ⑳(參考) ㉑(參考) ㉒(參考) ㉓(參考) ㉔(參考) ㉕(參考) ㉖(參考) ㉗(參考) ㉘(參考) ㉙(參考) ㉚(參考) ㉛(參考) ㉜(參考) ㉝(參考) ㉞(參考) ㉟(參考) ㊱(參考) ㊲(參考) ㊳(參考) ㊴(參考) ㊵(參考) ㊶(參考) ㊷(參考) ㊸(參考) ㊹(參考) ㊺(參考) ㊻(參考) ㊼(參考) ㊽(參考) ㊾(參考) ㊿(參考)

通切の註解書である。 名所行數 (名所書) 著者所見 月年の刊行 (書考) 著者所見 著者 缺存 黄色 (名所) 名所 読字



の貴重なる文献たるに止まらず、支那佛教史、日本文化史特に足利期の文化史上、見逃すべからざる史料価値を有することは、否定すべからざることに属する。善隣同實記に載むる「寶徳三年遣大明表」文に「日本國王區源義成、律東風に應ず、懸かに道を好むの君、中國に出づることを知る(中略)區源義成、飲んで先志を承け、細いで贈邦にしたり。守忍方に在り、専ら外衛を存す。想屬國處多くして職責を積みことあり。想せらるれば幸と爲すのみ。方に今尤忠孝老を以て専使と爲し、信芳員を以て副司と爲して、皇家の安否を問ひ奉り、兼ねて方物の不願を買す」云々と云ひ、美宗の答書に「皇帝日本國王源義成に勅諭す」と見ゆる、以て當代人心の傾向を知るに足るべしとするも、我が民族的自覺に訴へて、國史上許すべからざる心情態度と云はざるを得ざるを遺憾とする。寶徳三年遣唐使派遣の史實は、本書の如き第一史料を外にして、天龍藏志、大業院日記、武家年代記第三、後醍醐天皇三十七及び百八十六、續史冊抄第三十七等が存する。因みに云ふ、續史冊抄第一所載の本書談話には「賜贈軒横井時多珍藏」と見える。(今津洪世)

- 尹代往復書奥書 ①(日)In-ai-tai-yaku-sho-ku-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會
- 引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會
- 引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會
- 引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會
- 引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

①(各六、大、四六一)(京事) ②(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

①(各六、大、四六一)(京事) ②(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

引證十科 ①(日)In-sho-ju-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可折紙 ①(日)In-ka-ori-gami. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可口決 ①(日)In-ka-ku-kaiki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可加行日記 ①(日)In-ka-ke-ryo-hyoki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可加行表白 ①(日)In-ka-ke-ryo-hyoki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可作法口傳 ①(日)In-ka-ke-ryo-hyoki. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可次第 ①(日)In-ka-shi-dai. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可次第私 ①(日)In-ka-shi-dai-shi. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可次第並口訣 ①(日)In-ka-shi-dai-shi. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可道場圖 ①(日)In-ka-shi-dai-shi. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可道場圖 ①(日)In-ka-shi-dai-shi. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印可略授作法 ①(日)In-ka-ryaku-kyaku-ho. ①巻 ②存 ③寫本(大立大、D.O.二八六) ④宗學全書刊行會

印

①興隆より衰微に陥りし印信。②水和三寫  
 ③(寶藏院、撰)  
**印信** ①(日) In-jin. ②存 ③明覺  
 ④(高六、書一・七〇)  
**印信** ①(日) In-jin. 形引方印信 ②  
 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶藏院、併)  
**印信** ①(日) In-jin. 岩藏方印信 ②  
 ③存 ④足利中期寫 ⑤(金剛三昧  
 院、六五)  
**印信** ①(日) In-jin. 慈學院印信 ②  
 ③存 ④天文二二寫 ⑤(金剛三  
 昧院、八〇)  
**印信閉書** ①(日) In-jin. Kiki-gaki.  
 ②一帖 ③存 ④德川時代寫 ⑤(寶藏院、  
 小野)  
**印信口決** ①(日) In-jin. ko-keisu.  
 ②一巻 ③存 ④鎌倉初期寫(高六、書一・  
 七〇)足利時代寫(寶藏院、色)永祿年間寫  
 (金剛三昧院、五九)應永一四寫(金剛三昧  
 院、六三)文化一三寫(龍大、研佛)寶曆一三  
 寫(寶藏院、本)  
**印信口決** ①(日) In-jin. ko-keisu.  
 ②一巻 ③存 ④快全(一應永三 A. D.  
 1424)記 ⑤應永三寫 ⑥(寶藏院、撰)金  
 剛三昧院、四)  
**印信口決大事** ①(日) In-jin. ko-  
 keisu-dai-jū. ②一帖 ③存 ④德川時代寫  
 ⑤(寶藏院、)

⑥存、慈雲尊者全集第一六 ⑦慈雲(享保三  
 一文化元 A. D. 1718-1767)集 ⑧享保一六  
 寫 ⑨(各六、餘大・九二八)  
**印信小口訣** ①(日) In-jin. shō-kō-  
 keisu. ②一帖 ③存 ④成徳(永徳元一寶徳  
 三(A. D. 1381-1431) ⑤足利時代寫 ⑥  
 (寶藏院、色)  
**印信靜集** ①(日) In-jin. shizū. 覺濟  
 方印信靜集 ②一巻 ③存 ④(金剛三昧  
 院、六五)  
**印信大事** ①(日) In-jin. dai-jū. ②十  
 數結 ③存 ④德川中期寫 ⑤(金剛三昧  
 院、一〇〇)  
**印信大事傳授目録並傳授記**  
 ①(日) In-jin. dai-jū-den-jū-an-  
 narahin-den-jū-ki. ②存 ③足利時代寫  
 ④(金剛三昧院、三五)  
**印信大事等類聚** ①(日) In-jin. dai-  
 jū-tō-rui-gū. ②一帖 ③存 ④(寶水三寫  
 ⑤(金剛三昧院、七二))  
**印信三重三重傳法許可** ①(日)  
 In-jin-san-san-hon-den-hō-kyō-ka. ②一  
 巻 ③存 ④(享保三三明治一〇 A. D.  
 1803-1877) ⑤明治年間寫 ⑥(寶藏院、何)  
**印信類目録** ①(日) In-jin. rui-moku  
 toku. ②一巻 ③存 ④德川時代寫 ⑤  
 (寶藏院、西)  
**印圖** ①(日) In-za. ②二巻 ③存 ④  
 延寶七刊 ⑤(龍大、二六六・五八) ⑥(京大、  
 一五・四) ⑦(京大、印哲・〇・四八)  
**印圖集** ①(日) In-za-shū. ②二巻  
 ③存 ④(龍大、二六六・五八) ⑤(京大、  
 一五・四) ⑥(京大、印哲・〇・四八)

**印圖並手印圖** ①(日) In-za-naraba  
 shō-in-za. ②三巻 ③存 ④刊本(各  
 大、餘大・一九〇七)  
**印像** ①(日) In-za. ②一巻 ③存 ④  
 德川時代寫 ⑤(寶藏院)  
**印度アジャンタ窟院壁畫**  
 ①(日) In-dia-ajanta-kuwan-hakka.  
 ②三帖 ③存 ④(京大、印哲・D・IV・  
 11)  
**印度學** ①(日) In-dia-aku. 佛敎語  
 ②一巻 ③存、哲學部第五學年講義録之内  
 ④村上專精(嘉永四一昭和四 A. D. 1851-  
 1909)述 ⑤(高六、一・二七)  
**印度行程** ①(日) In-dia-ryō-ki.  
 ②一巻 ③存 ④明惠高橋(永安三一貞永元  
 A. D. 1171-1233)述 ⑤(參考) 大日本佛  
 敎全書刊行決定書II  
**印度窟院精華** ①(日) In-dia-kuwan  
 shō-hwa. ②一帖 ③存 ④石時光瑞  
 ⑤(大正八刊) ⑥(龍大、別號) ⑦(京大、印  
 哲・D・IV・一六)  
**印度古代哲學** ①(日) In-dia-ko-  
 dai-tetsu-gaku. ②一巻 ③存 ④中島弘  
 毅者 ⑤明治二刊 ⑥(帝國、一九・七)  
**印度古法典に於ける法源論**  
 ①(日) In-dia-ko-ko-hō-hen-an-  
 gen-ron. ②一巻 ③存 ④中野義昭者 ⑤昭  
 和五刊 ⑥(京大、印哲)  
**印度雜事** ①(日) In-dia-zasshi.  
 ②一巻 ③存 ④松本文三郎者 ⑤明治三六  
 刊 ⑥(京大、一・二七) ⑦(高六、一・二七)  
 (立大、B二・三・一三) ⑧(東京文藝館)

**印度支那日本淨土敎史** ①(日)  
 In-do-shin-an-nippon-jōdo-kyō-shi.  
 ②一巻 ③存、佐々木月樵全集 ④佐々木月  
 樵(一、大正一五 A. D. 1926)著  
**印度支那佛敎史要** ①(日) In-do-  
 shi-na-bok-kyō-shi-yō. ②一巻 ③存  
 ④(野野哲者) ⑤明治三九刊 ⑥(各六、餘洋・  
 二〇二) ⑦(正六、一〇三) ⑧(一五九、一〇三) ⑨  
 一五〇 ⑩(京大、一・二〇) ⑪(立大、B一六、  
 二〇) ⑫(東京鴻聖社)  
**印度支那佛敎史要** ①(日) In-do-  
 shi-na-bok-kyō-shi-yō. ②一巻 ③存  
 ④平安寺佛敎院 ⑤(大正一五刊) ⑥(龍大、  
 二九・一・一)  
**印度支那佛敎小史** ①(日) In-do-  
 shi-na-bok-kyō-shi-shi. ②一巻 ③存  
 ④(野野哲者) ⑤昭和三刊 ⑥(東京鴻聖社)  
**印度支那佛敎通史** ①(日) In-do-  
 shi-na-bok-kyō-shi-tō-shi. ②一巻 ③存  
 ④伊藤義賢者 ⑤明治四三刊 ⑥(龍大、二  
 九・一・一) ⑦(高六、一・一一)  
**印度支那密敎史** ①(日) In-do-shi-  
 na-bok-kyō-shi-mi. ②一巻 ③存 ④吉野  
 眞雄者 ⑤昭和四刊 ⑥(東京二松堂書店)  
**印度宗敎史** ①(日) In-do-shū-kyō-  
 shi. ②一巻 ③存 ④(明治正治者) ⑤明治  
 三〇刊 ⑥(立大、B二・三・八) ⑦(龍大、各六)  
 (正六) ⑧(東京金港堂)  
**印度宗敎史考** ①(日) In-do-shū-kyō-  
 shi-kō. ②一巻 ③存 ④(明治正治者)  
 ⑤(一) ⑥(二) ⑦(三) ⑧(四) ⑨(五) ⑩(六) ⑪(七) ⑫(八) ⑬(九) ⑭(一〇) ⑮(一一) ⑯(一二) ⑰(一三) ⑱(一四) ⑲(一五) ⑳(一六) ㉑(一七) ㉒(一八) ㉓(一九) ㉔(二〇) ㉕(二一) ㉖(二二) ㉗(二三) ㉘(二四) ㉙(二五) ㉚(二六) ㉛(二七) ㉜(二八) ㉝(二九) ㉞(三〇) ㉟(三一) ㊱(三二) ㊲(三三) ㊳(三四) ㊴(三五) ㊵(三六) ㊶(三七) ㊷(三八) ㊸(三九) ㊹(四〇) ㊺(四一) ㊻(四二) ㊼(四三) ㊽(四四) ㊾(四五) ㊿(四六) ㊿(四七) ㊿(四八) ㊿(四九) ㊿(五〇) ㊿(五一) ㊿(五二) ㊿(五三) ㊿(五四) ㊿(五五) ㊿(五六) ㊿(五七) ㊿(五八) ㊿(五九) ㊿(六〇) ㊿(六一) ㊿(六二) ㊿(六三) ㊿(六四) ㊿(六五) ㊿(六六) ㊿(六七) ㊿(六八) ㊿(六九) ㊿(七〇) ㊿(七一) ㊿(七二) ㊿(七三) ㊿(七四) ㊿(七五) ㊿(七六) ㊿(七七) ㊿(七八) ㊿(七九) ㊿(八〇) ㊿(八一) ㊿(八二) ㊿(八三) ㊿(八四) ㊿(八五) ㊿(八六) ㊿(八七) ㊿(八八) ㊿(八九) ㊿(九〇) ㊿(九一) ㊿(九二) ㊿(九三) ㊿(九四) ㊿(九五) ㊿(九六) ㊿(九七) ㊿(九八) ㊿(九九) ㊿(一〇〇)

印

尼沙土及哲學諸説。(イ)優波尼沙土時代の  
 哲學動興。(ロ)吠陀學派。(ハ)高麗の吠陀學  
 派。(ニ)優波尼沙土。(三)佛敎以前の輪廻説  
 と佛敎の輪廻説。(イ)精論。(ロ)吠陀論時  
 代。(ハ)優波尼沙土時代。(イ)僧法。(ロ)自餘  
 の哲學派。(ハ)摩訶法典の婆羅門敎。(イ)佛敎  
 (ニ)佛敎興隆の道徳的並宗教的意義。  
 (ロ)婆羅門敎の本義。(イ)婆羅門の出家生  
 活と教團。(ロ)佛敎及佛敎の婆羅門の傳來  
 (イ)佛敎の傳記。(五)佛敎の傳記。(イ)佛  
 敎の性質。(ロ)佛敎とキヤタイ族との類  
 似。(ハ)佛敎の材料並に事實。(六)佛敎と王  
 者との關係歴史。(イ)佛敎より阿育王に至  
 る摩揭陀國王統。(ロ)阿育王の事蹟。(ハ)阿育  
 王より迦膩色迦王に至る佛敎。(三)迦膩色迦  
 王以後八世紀迄の佛敎。(ハ)高麗以後の佛  
 敎。(七)佛敎後部に至る佛敎教會及敎理  
 史。(イ)佛敎教會の會議。(ロ)佛敎教會の分  
 裂及傳説。(ハ)佛敎より馬鳴に至る佛敎論發  
 達。(イ)馬鳴の大莊嚴論。(ハ)大乘佛敎の起源  
 (ハ)印度佛敎史附論。(イ)佛敎建築。(ロ)佛  
 敎佛敎史。(ハ)パリー語の性質。(イ)西蔵佛敎  
 史。(ハ)南北佛敎の經典。(九)印度敎時代。  
 (イ)佛敎の聖典。(ロ)波羅尼の言語學的哲  
 學と宗教。(ハ)印度敎者佛敎の宇宙形  
 態論。(イ)印度敎の根本制度習慣。(ロ)フーマ  
 ヲフヤ派に於ける神人の關係。  
 ①明治三刊 ②(立大、B一六・五・B二  
 三) ③(各六、餘大) ④(京大、印哲) ⑤(京大、  
 印哲) ⑥(日) In-do-shū-kyō-shi  
 ⑦(日) In-do-shū-kyō-shi ⑧(長各郡

陸海) ⑨(明治一三) ⑩(昭和六 A. D. 1879-1913)  
 著 ⑪(大正四刊) ⑫(京大、一・二七) ⑬(一  
 五) ⑭(高六、一・二七) ⑮(一) ⑯(一) ⑰(一)  
**印度宗敎論** ①(日) In-do-shū-kyō-  
 ron. ②一巻 ③存 ④手島文著者(一) ⑤(明和  
 六 A. D. 1811) ⑥(大正一三刊) ⑦(京大、中  
 外出版株式會社)  
**印度聖蹟誌** ①(日) In-do-shū-ki.  
 ②一巻 ③存 ④(江部義圓者) ⑤(明治  
 四三刊) ⑥(龍大、二九七) ⑦(各六、餘洋・  
 二七四)  
**印度藏志** ①(日) In-do-zōshi.  
 ②一巻 ③存、平田篤風全集第一三 ④(平田  
 篤風(安永五一天保一四 A. D. 1776-1843)  
 述)  
 ⑤本書は平田篤風が一切經を讀破し、印  
 度の風俗、印度の世界觀、婆羅門の敎義、  
 釋尊一代の敎説、小乘分派の歴史及び其の  
 變遷等を論じ、大乘佛敎は後世附加の説な  
 りといふ大乘非佛説にもふれて居る。天保  
 十一年十一月(A. D. 1840) 越前永平寺五  
 十七代安濟齋園師範齋庵高岡和尙は、篤風  
 が僧侶なら讀む者の辭い一切經を讀破して  
 破して諸宗の宗源を究め佛敎の眞髓は佛の  
 見性成佛にありとして釋に歸入せしめんと  
 した篤信者で、摩訶居士、蘇東坡居士にも比  
 す可きだとして居士の二字を贈る旨を本書  
 に序して賞讃して居る。この序は當時書を  
 以て鳴つた福井鐵徳寺十六代覺心院和尙  
 が書いて篤風に贈つて居る。篤風は大乗居  
 士と稱した。然し本書を始めとして諸書に  
 於いて篤風が佛敎及び釋に對した所論は萬

佛和尙の見解とは正反對の結果を示して居  
 る。彼の出定笑話、悟道辯等を見て解る  
 様に彼の神道の立場より佛道を嘆ひ、佛道  
 を破斥したのがある。三度び經を讀破し、佛  
 論注疏抄録せざるなれど、彼が破馬に乗  
 つて破を逐ふの筆法で、一切經を引用し  
 るので論難し筆舌を吐き鋭鋒を刺す有  
 りである。本書に於ては諸所の批評に其の  
 片鱗を見せ居る。篤風全集に載むるもの  
 は、二十五卷中の卷一至卷八、卷二十一至  
 二十三の十一巻を載せて居る。卷一至三は  
 印度國俗品と題して支那の西域記などより  
 印度の土俗風習を述べ、卷四至八は大千世  
 界品と題して長阿含世記經を採り諸阿含の  
 異本を參照採りて須彌山説の世界觀に言  
 及し、卷二十一至二十三は印度佛通品と題  
 して部派佛敎の變遷を八宗綱要をも引用し  
 て詳論して居る。本書の外に拾遺とも稱す  
 べき印度藏志未定稿十巻がある。  
 ⑥(寫本) ⑦(龍大、六一・一) ⑧(京大、一・二六) ⑨  
 ⑩(立大、B二・三・一三) ⑪(東京文藝館)  
**印度藏志未定稿** ①(日) In-do-zō-  
 shi-undei-kō. ②十巻 ③存、平田篤風全  
 集第一五  
 ④本書は印度藏志拾遺とも稱す可きもの  
 で、印度藏志に編入される性質のものであ  
 る。其の列次を見るに、卷一に世間成就品、  
 卷二に起世本帳品、卷三に佛世系品、卷  
 四に佛生養育品、卷五に遊園生品、卷六  
 に發心出家品、卷七に求道樂行品、卷八に  
 佛像品、卷九に大本經等を引用して佛の本  
 敎説に言及し、卷十に、大會經等を引用

して婆羅門の事などに及んで居る。即ち印  
 度に於て説かれたる世界の生成、佛の行業、  
 その敎説等を採り、所謂、大乘諸經は皆  
 是れ後世實僧の所作なりと論じて居る。  
 (大久保聖瑞)  
**印度藏志略** ①(日) In-do-zō-shi-  
 ryaku. ②二巻 ③存、平田篤風(安永五  
 一天保一四 A. D. 1776-1843)述 ④(明治一  
 三刊) ⑤(正六、一〇九) ⑥(帝國、一五・  
 五二) ⑦(一五〇)  
**印度哲學** ①(日) In-do-tetsu-gaku.  
 ②一巻 ③存、哲學部講義録之内  
 ④村上專精(嘉永四一昭和四 A. D. 1851-  
 1929)著 ⑤(刊本) ⑥(帝國、一三・三三)  
**印度哲學** ①(日) In-do-tetsu-gaku.  
 佛敎唯心綱要 ②一巻 ③存、哲學部講義  
 録之内 ④(齊藤唯信述) ⑤(刊本) ⑥(帝國、一四・  
 七九) ⑦(一四・二一九)  
**印度哲學研究** ①(日) In-do-tetsu-  
 gaku-kenkyū. ②六巻 ③存 ④(宇井伯壽著  
 ⑤(一) ⑥(二) ⑦(三) ⑧(四) ⑨(五) ⑩(六) ⑪(七) ⑫(八) ⑬(九) ⑭(一〇) ⑮(一一) ⑯(一二) ⑰(一三) ⑱(一四) ⑲(一五) ⑳(一六) ㉑(一七) ㉒(一八) ㉓(一九) ㉔(二〇) ㉕(二一) ㉖(二二) ㉗(二三) ㉘(二四) ㉙(二五) ㉚(二六) ㉛(二七) ㉜(二八) ㉝(二九) ㉞(三〇) ㉟(三一) ㊱(三二) ㊲(三三) ㊳(三四) ㊴(三五) ㊵(三六) ㊶(三七) ㊷(三八) ㊸(三九) ㊹(四〇) ㊺(四一) ㊻(四二) ㊼(四三) ㊽(四四) ㊾(四五) ㊿(四六) ㊿(四七) ㊿(四八) ㊿(四九) ㊿(五〇) ㊿(五一) ㊿(五二) ㊿(五三) ㊿(五四) ㊿(五五) ㊿(五六) ㊿(五七) ㊿(五八) ㊿(五九) ㊿(六〇) ㊿(六一) ㊿(六二) ㊿(六三) ㊿(六四) ㊿(六五) ㊿(六六) ㊿(六七) ㊿(六八) ㊿(六九) ㊿(七〇) ㊿(七一) ㊿(七二) ㊿(七三) ㊿(七四) ㊿(七五) ㊿(七六) ㊿(七七) ㊿(七八) ㊿(七九) ㊿(八〇) ㊿(八一) ㊿(八二) ㊿(八三) ㊿(八四) ㊿(八五) ㊿(八六) ㊿(八七) ㊿(八八) ㊿(八九) ㊿(九〇) ㊿(九一) ㊿(九二) ㊿(九三) ㊿(九四) ㊿(九五) ㊿(九六) ㊿(九七) ㊿(九八) ㊿(九九) ㊿(一〇〇)













